

■風俗文献とSMプレイ情報満載■

# 奇譚クラブ

♥思い出の奇ク嬢たち♥マニアフォト・愛奴  
のプロフィール♥ロマン派生のSM時評♥ア  
クションカメラ・ハント♥地下本発掘秘公開  
♥刺青美女お披露目♥妊婦を縛る愉しみとは

復刊第2号

4

SMのエキスだけを集大成した  
マニア待望の読者参加情報雑誌



奇譚クラブ

復刊第2号

マニア待望の読者参加SM情報誌

昭和57年4月1日発行（毎月発行）  
第一巻第二号



雑誌02805-4

定価1000円

(株)きたん社発行



# ビデオ公開 賀山茂の

こんな男に屈辱の姿体をとらされ、苦痛と責めに泣き悶え縄の抱擁の悦びの中で果てる私。  
もう二度とされまい、しまいと思いつつ……

■私のビデオ■

## 紫 痕

これがSMだ!!

…………… 3人の女が責めの競演 ……………

アマチュア生活30年。ひとりで楽しんだSM  
をここに公開します。その真髓を披露します。

お申し込みは… 東京都港区六本木5-13-3 ニューキャッスル  
麻布405号

サム・エンタープライズ

(定価15000円。ソニー用かビクター用を明記のうえ現  
金書留にて送金下さい。10日以内にお送りします。)

奇譚クラブ 4月号 定価1000円 昭和57年4月1日発行 発行所(株)きたん社  
東京都港区六本木3丁目4番5号402 電話03(407)0081番 発行人森田公治  
編集=風俗資料保存会 東京都中央区銀座1の22の10ストークビル501号

# 奇譚クラブ 4月号目次



愛奴のプロフィール……………	(3)
投稿フォトギャラリー……………	(7)
懐しの奇ク嬢たち・梨花悠紀子……………	(11)
緊縛秘画……………	(11)
辻村隆氏との交遊記②(賀山茂)……………	(20)
美濃村晃のアクションロープハント……………	(31)
縄の愉悦①(縛悦介)……………	(42)
縄妾志願……………	(48)
芸能SM小説・百恵の太腿①……………	(54)
SMポルノ・標的はメス犬②……………	(66)
淫魔に魅入られて……………	(80)
生人形地獄②……………	(92)
妊婦ハント①(前田八郎)……………	(114)
生ゴムに憑かれて(仁志木好美)……………	(120)
露出責めに陶醉する……………	(122)
「あひるの会」報告……………	(124)
奇クサロン……………	(126)
読者通信欄……………	(134)



## 愛奴のプロフィール①

松本ヤス子(20才)女子大に通学する勉強家の彼女だがM性に眼覚め始めた。ふくよかな乳房がチャームポイント





## 愛奴のプロフィール②

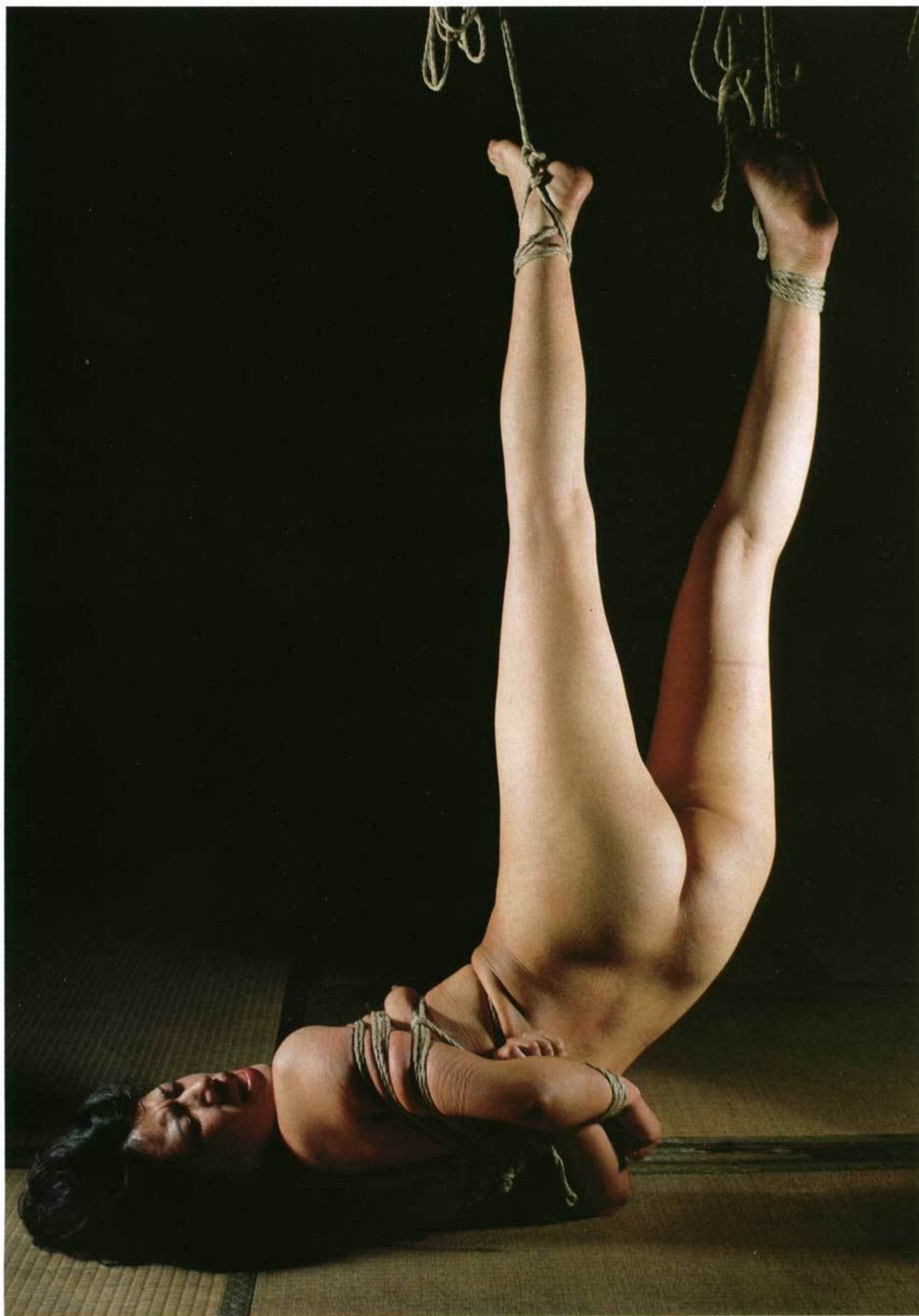
今野ユウ子(22才)銀座のクラブのバニーガール。タレント志望。男性の熱い眼差しに弱い。すらりと伸びた脚は最高





残酷な首縄で悲壮美がただよう





逆さ吊りでヒップの美しさが際立つ





### 愛奴のプロフィール ③

下条アキ子(27才)人妻。小柄だが着物の似合うしっとりした美女。ご主人は遊び知らずのカタ物で彼女は欲求不満気味



隷女 投稿フォトギャラリー  
 自慢



名古屋・M氏



都内・T氏



別府・仁志木好美氏





北九州・K氏



神奈川・O氏

静岡・WS氏





# 刺青が彩る被虐肌

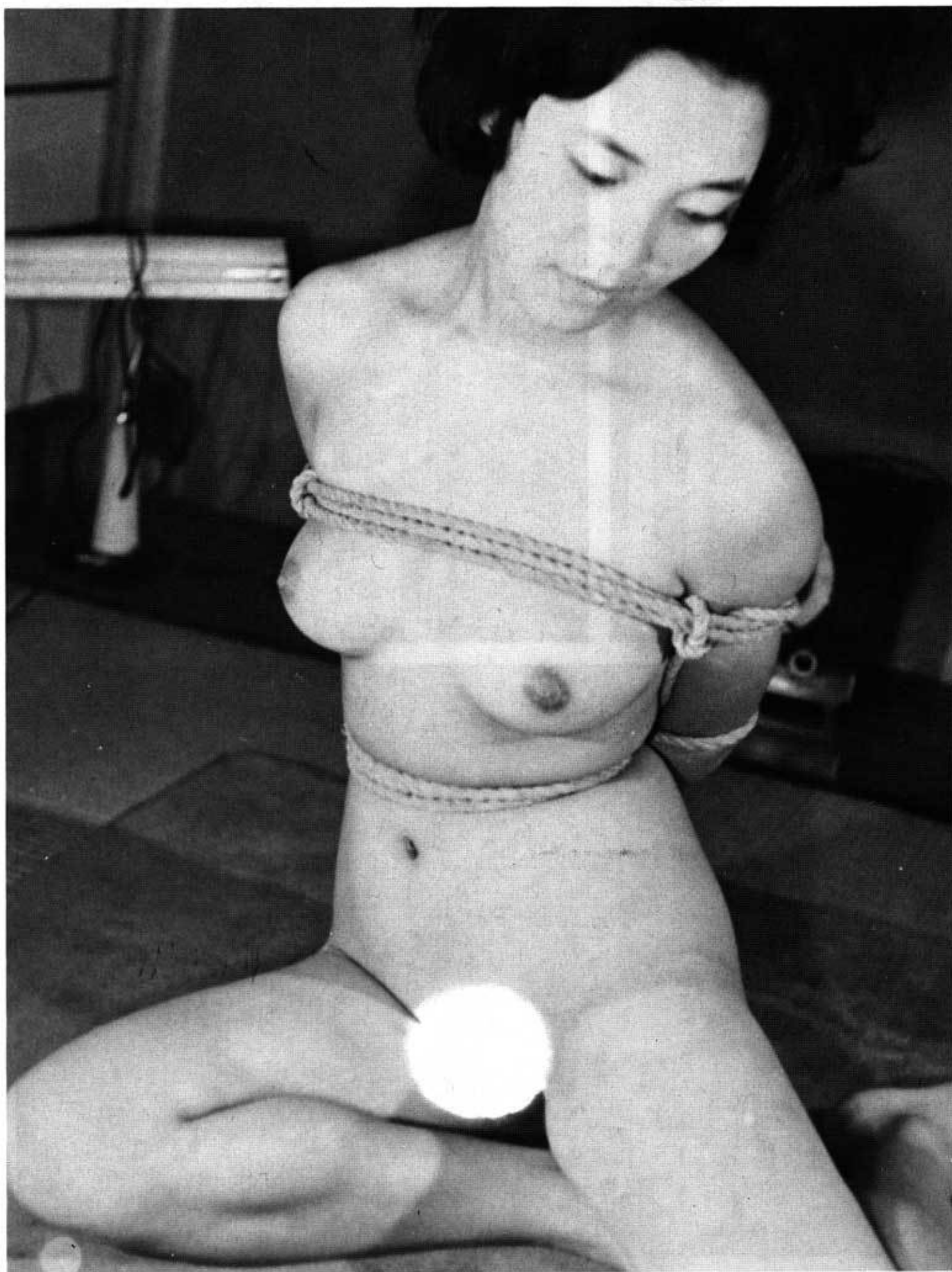
林京子（25才）真性のM女。刺青にあこがれ、まず太腿に一輪。次に右肩、左肩にもスミがはいり、その若々しい美肌とあいまって、彫物界でも貴重な存在となった。



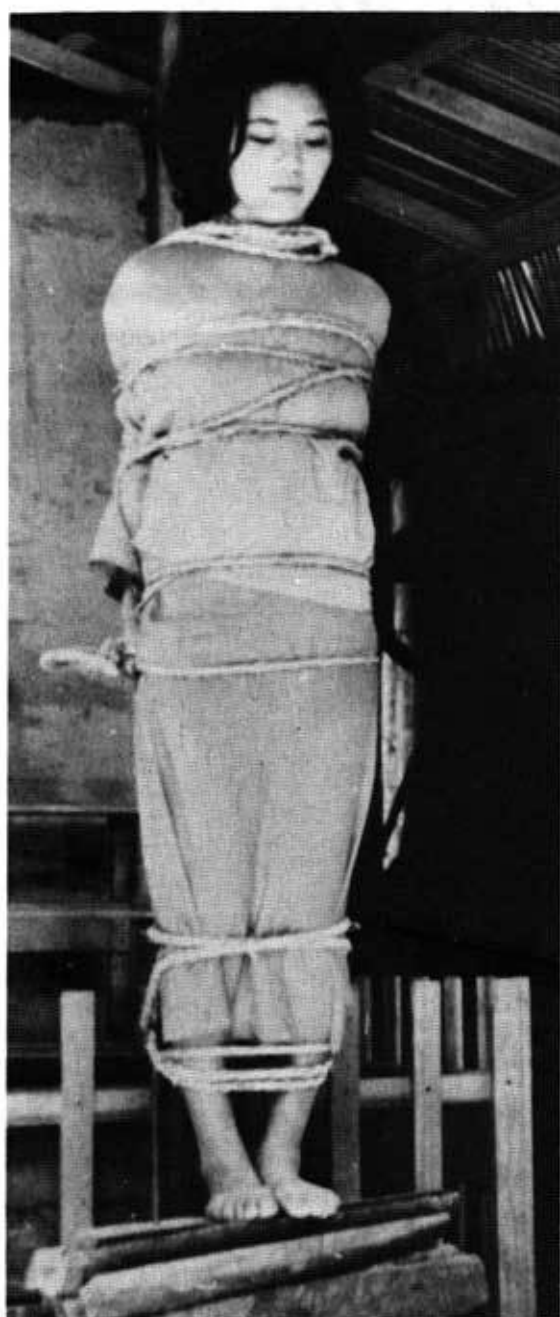


# 懐しの奇ヲ嬢たち

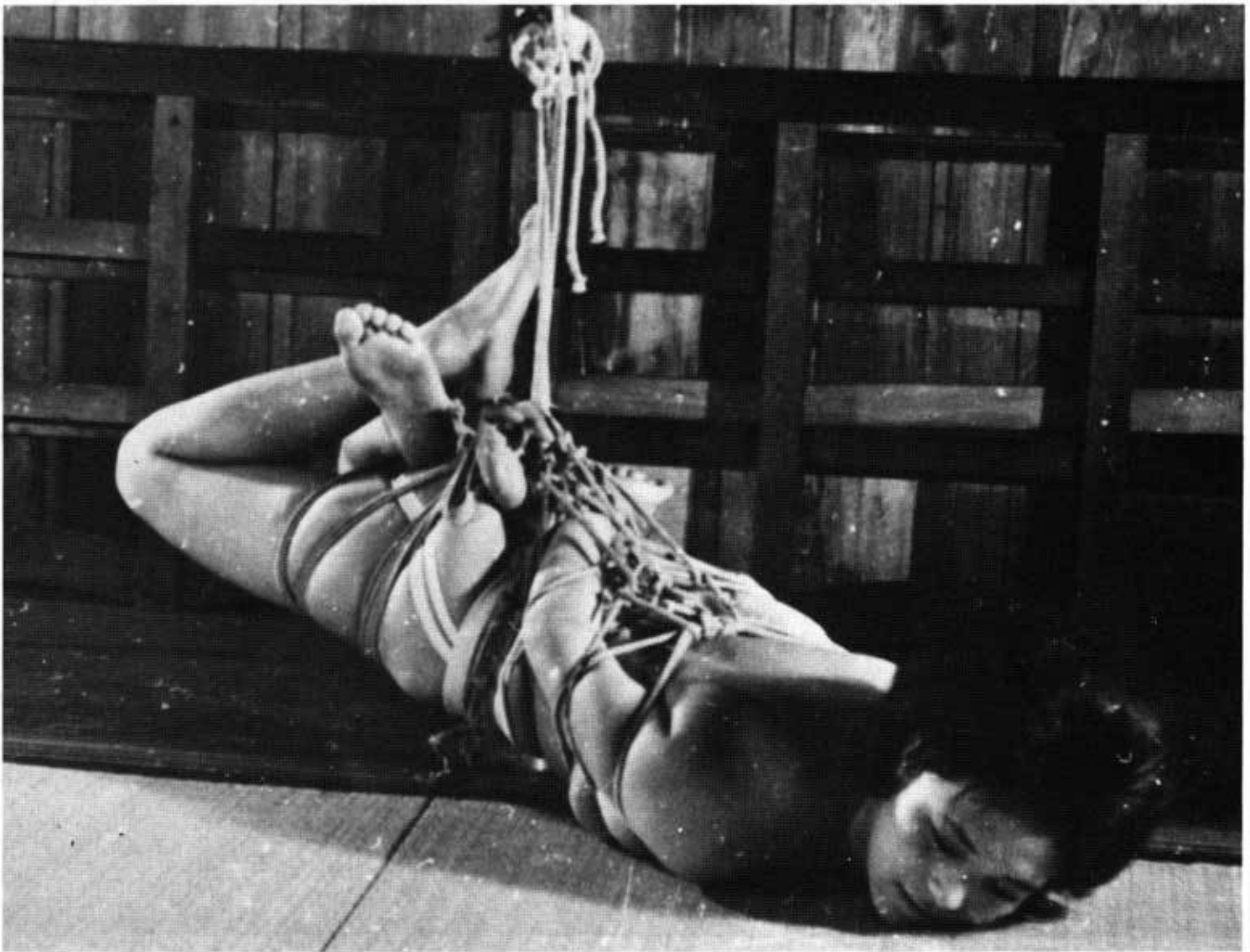
梨花悠紀子



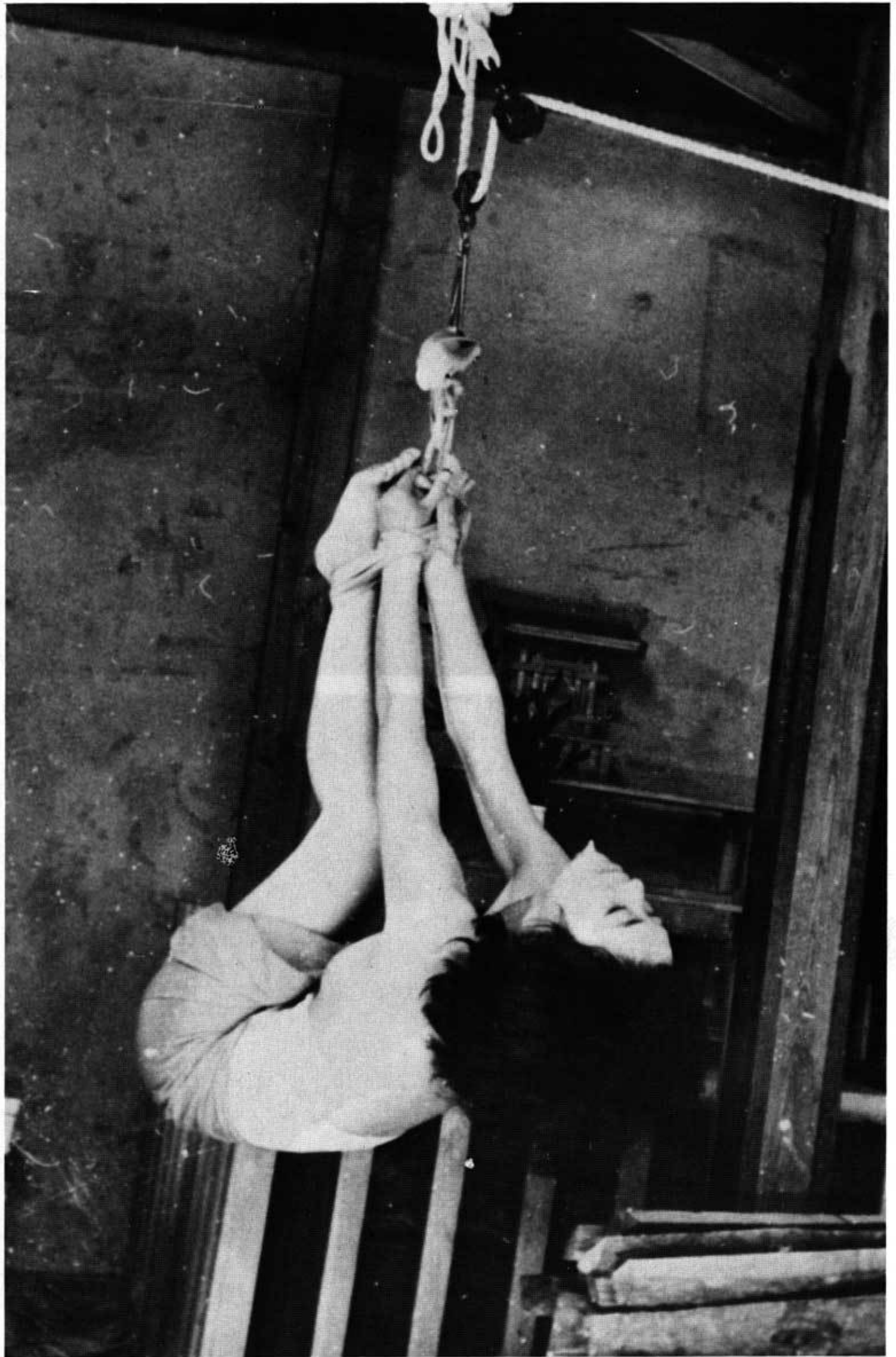


















## 梨花悠紀子嬢

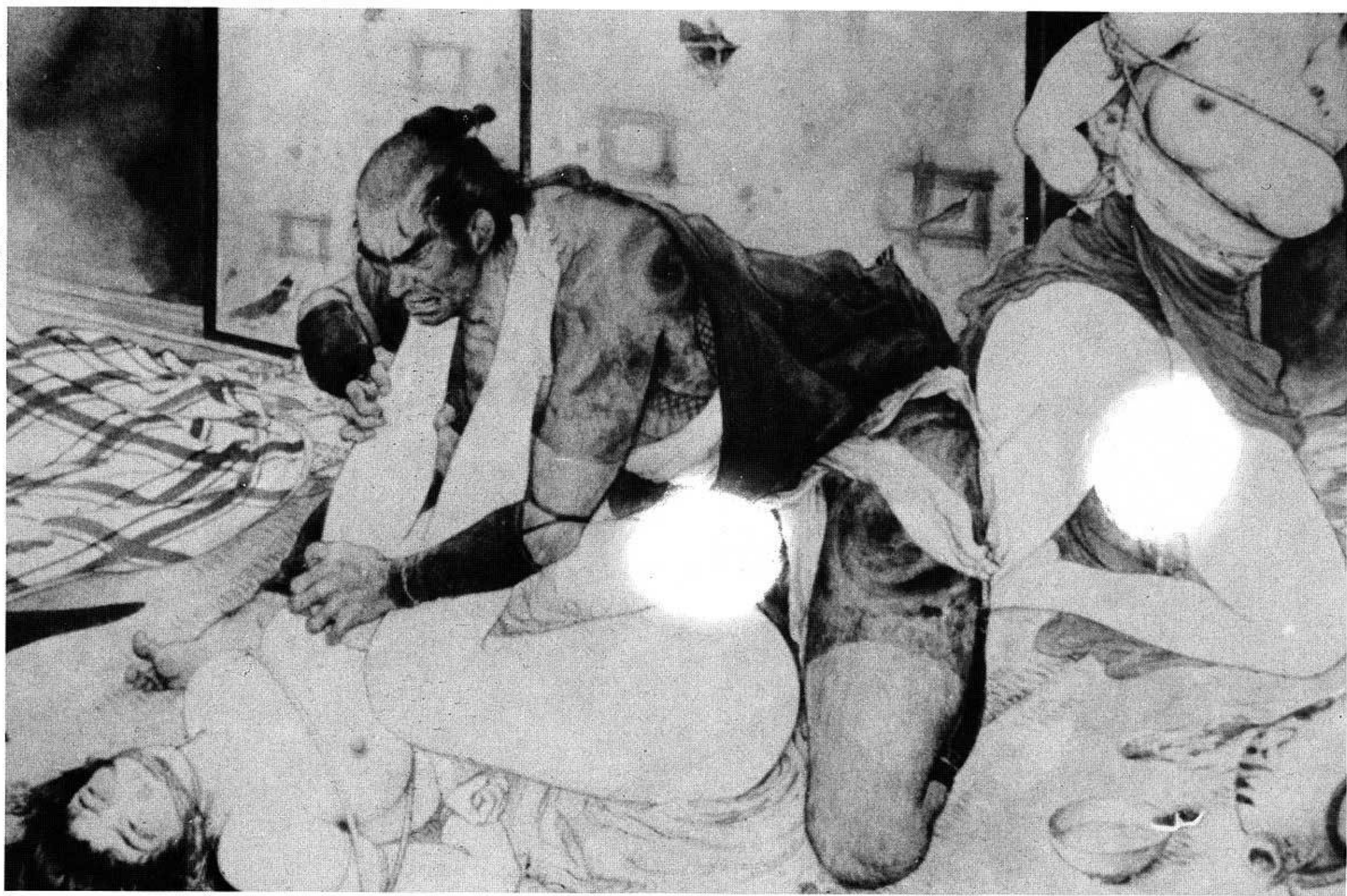
旧「奇ク」誌全盛時代、あどけない表情と、可憐な姿体でマニアの嗜虐心を煽り、多くのファンをつくった。そのか細い体に似ず、奥深いマゾ性を秘めていた。当時21歳。



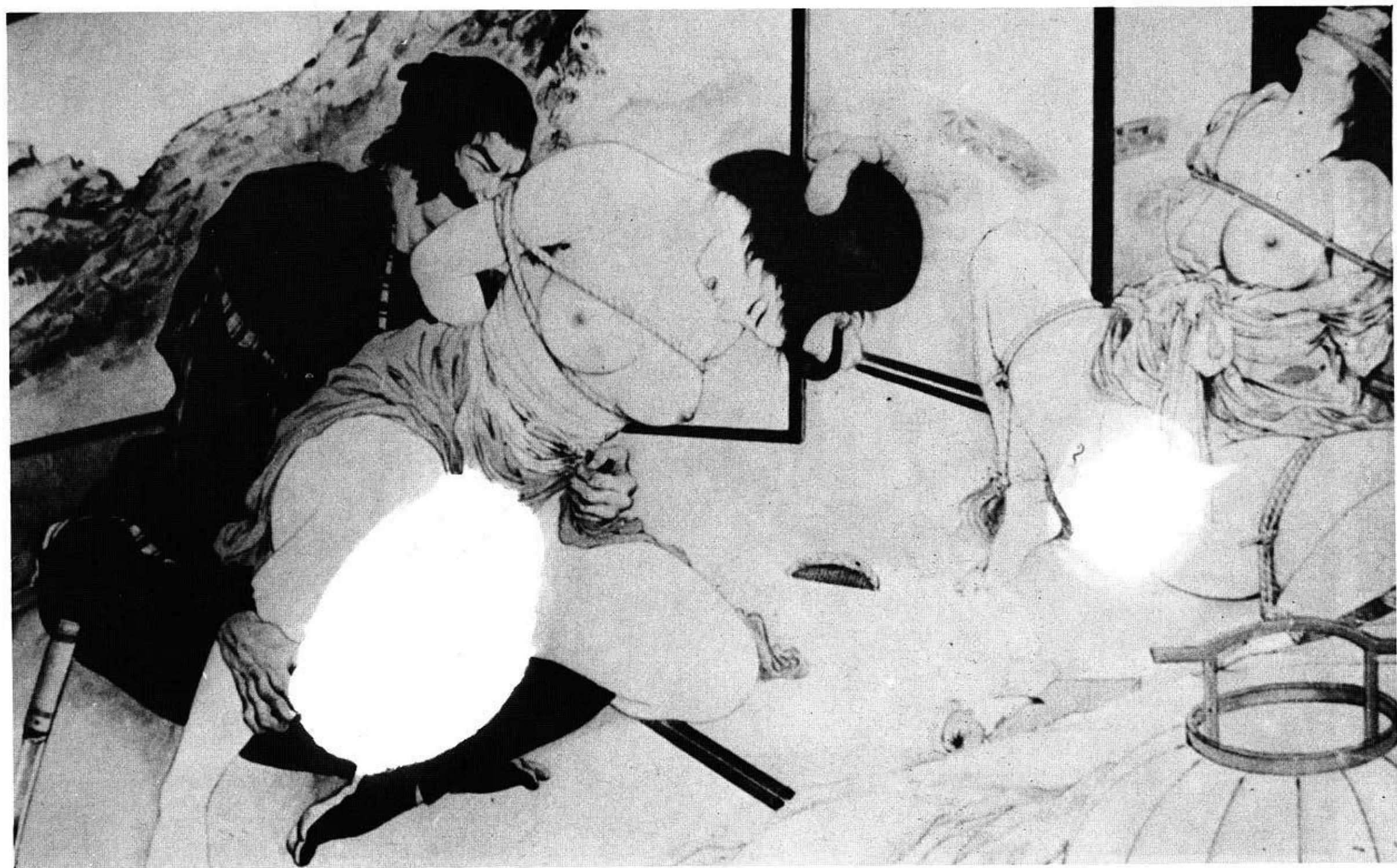


# 落花狼籍

傑作秘画選











奇譚  
クラブ

1982年4月号

*Signature*



# 古都より愛をこめて

賀山 茂

千載一遇のチャンス

久しぶりに辻村さんから電話が入りました。検約家の先生は連絡はいつも手紙なのです。一瞬びっくりしたほどです。「賀山さん、梨花ゆき子と連絡ができましたよ。ご存知で

しょうが、彼女は数年前結婚してこの世界から隠退してたんです。どういう風の吹き回しか、明後日、なつかしいのでお会いしましょう、というのですよ。千載一遇のチャンスです。賀山さん、是非こちらにいらっしゃいよ」

大先生の好意で友情に応えるべく、私は即座に「参りま





しょう」と答えていました。

梨花ゆき子嬢はカネボウの「チャームガール」出身で旧「奇譚クラブ」の代表的なアイドルモデルでした。美人でありながらハードな責めにも耐えてくれる貴重な存在でもあり、あこがれの君にめぐり会える悦びに、私はしばし感慨無量の思いに耽ったのです。

辻村さんに梨花ゆき子嬢を紹介して頂いたあと、私たちは人は、道頓堀のカニ料理店で昼食をとることになりました。美貌の人妻に「賀山さんって素敵だわ」といわれ、私も



人妻の色香を発散させる初々しい梨花ゆき子嬢の緊縛美

柄になく照れたものです。神妙に梨花さんと辻村さんの話に耳を傾けていますと、梨花さんは屈託のない明るい性格らしく、体をゆすりながら、如何にも楽しそうに話してくれます。辻村さんも彼女のペースに巻きこまれて、食べるのも忘れて昔話に夢中になっていました。

梨花嬢は結婚してはや二年たち、こどももすでに一人いるとのことでしたが、女らしい人妻の色香が全身から滲み出ていて、彼女の裸を見たくて高鳴る胸を抑えるのが大変でした。

話し上手の辻村さんは、そんな私の胸中を察したのか、「わざわざ東京から梨花さんに会いにこられたのですから軽くプレイをしましょうよ」

と説得するように梨花さんに話しかけたのです。

「そうですね……」肯定も否定もしない梨花さんの素ぶりから、辻村さんは脈ありと見てとったらしく、

「ではボツボツ出かけましょうか」

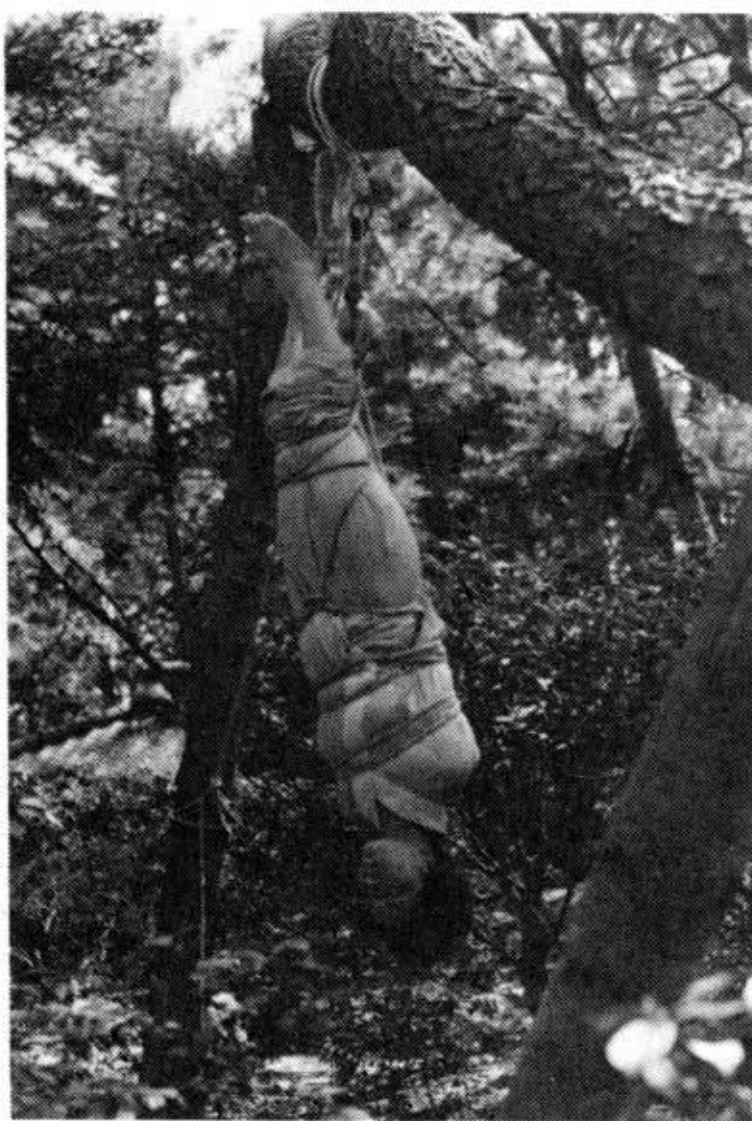
と言って腰をあげ、つられて私たち二人も立ち上って後に従ったのです。

辻村さんの案内で銀橋のホテル街に向いました。ホテルの部屋に入った私たちは、人妻を連れこんだことの精神的負担を少しでも軽くしようとして、早速部屋そなえつけの冷蔵庫からビールを取り出し、飲み始めたのです。

一方梨花さんは「こんな所、久しぶりだわ」と言って部



梨花ゆき子嬢は健気にも長時間の逆さ吊りに耐えた



屋中をグルグル歩き回ったりして、なかなかプレイに入る雰囲気ではありません。

ビールで気持がリラックスした辻村さんが、

「梨花さん、一緒に風呂に入りましょうよ、サアサア」

と言って彼女の手をとって、浴場に連れていったのです。少し間をおいて、「賀山さん」という辻村さんの呼び声がしますので、とんでいきますと、裸にされた梨花さんが風呂場のタイルの上で後手に縛られていました。

「一緒に入って彼女の体を隅から隅まで洗ってやることにしたのです」

と辻村さんが言われるので、私もあわてて裸になって風

呂場にとびこみました。

「賀山さん、はやく洗ってやってください」

辻村さんの指示で私がタオルに石けんを塗っておりますと、

「駄目ですねえ、こうやって洗うんです」

辻村さんは石けんをとって直かに彼女の裸身に塗りつけるのでした。両手で体を操むように石けんをつけますと、彼女はくすぐったそうに声をあげ、体を左右に悩ましげによじるのです。

「賀山さんも、さあ」

石けんを渡されたので、彼女のオッパイめがけてつかむように洗い出しますと、柔軟でありながら弾力に富んだ乳房は、性感を刺されたのか、乳首が立ってきました。

私の手は次第に肉づきの良い腰回りをなでなでし、遠慮会釈なく太腿の付根へと進み、毛深くはあるものの、柔らかい密林は、石けんを容易に吸収し、泡立っていました。やがて私の手が湿地帯に突入しますと「ああっ」と声をあげ腰を妖しげにゆすりながら、何をされても仕方がないという姿勢でM性を表情にはっきりと浮かべ、じっと耐えていたのです。

続いて梨花さんをサイドイチにして浴槽につかり、前後より、思い思いに責めますと、身動きできない彼女は苦しげな溜息を連発するのです。



やがて解放され、座敷に座った梨花さんは、湯上りの肌が艶めかしく輝いて、とても一児の母とは思えません。彼女もまた、タイムトンネルで二年前の独身女性に戻ったようでした。

「きょうは、賀山さんがやってください」

待ってましたとばかり私は、梨花さんを部屋の中にしつらえられた飾り座に引出し、玉石の上で「アトがついたら旦那さんに悪いなあ」といたぶりの言葉をなげかけながら後手より首なわ乳房縛りにいきました。

上半身だけの縛りにして少し遊んでやろうと、  
「好きなように動いてください」



辻村さんに呼ばれて浴室にとんでいく  
と梨花嬢はタイルの上で後手縛りに……

彼女はまるでピクニックにでも行ったようにピョンピョンはね回り、所かまわず卑猥なポーズをとって私たち二人を挑発するのでした。

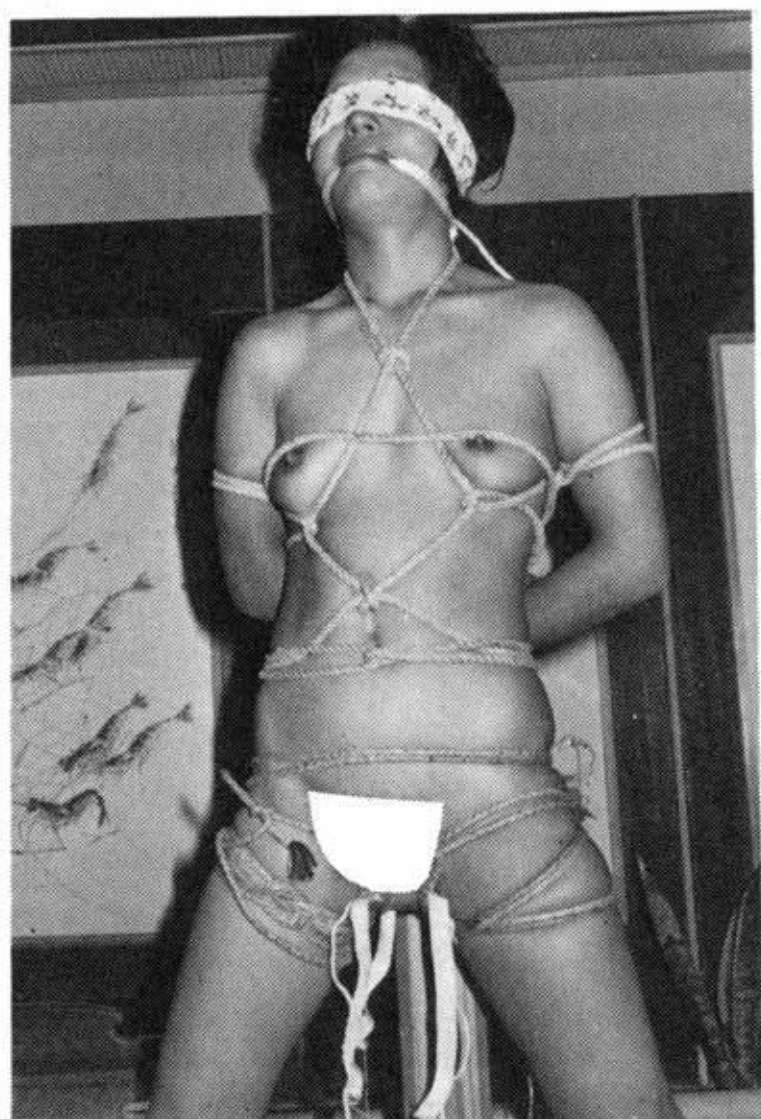
ニコニコして傍観していた辻村さんが立ち上り「コイツメ」と彼女の腰をかかえるようにして柱の所へ連れていき、

「コラッ、観念しろ！」

と罪人を扱うように柱に縛りつけ、手拭いでサルグツワをかませます。すると魔法にかかった羊さながら、彼女はとたんにおとなしくなり、虜囚の身をさらすイケニエムードが出てきたのです。







罪人みたいに柱に縛りつけ手拭いでサルグツワをするとイケニエのムードが



動きの素ばやさ、さすが大御所といわれるだけのことはあるとその手腕に改めて感服した次第です。

「賀山さん、眼隠ししましょうよ。眼隠しをすると、女はなにも見えない不安から、何をされても仕方がないという気持ちになるらしいですよ。これからすこし卑猥にいたぶりましょう」

そういうと辻村さんはバックから七つ道具をとり出しました。彼女の体をあちこちさわっていた辻村さんは、

「この子はお尻の穴が弱いみたいですよ」

そういうながら、そこに集中的に刺激を与え始めます。

「お願い、やめて、やめてっ……」

耐まらなくなった梨花嬢は、声にならぬ声をあげて、苦しそうに腰を突き出すのでした。それを見た辻村さんは、往生させましょう、とバイブレーターを取り出し、ゴムバンドで彼女のもっとも感じやすい部分にあてがいました。ややしばし、自分自身と格闘していた梨花さんは、体を小刻みに震わせたかと思うと、ガクンと腰をおとしたのです。

参ったようすな、と辻村さんが眼隠しをとってやりますと、先ほどとは打って変わった弱々しい眼を梨花さんは私に向けるのでした。



## 満たされぬ夜

「ご免なさいね」

家庭の主婦である梨花さんには、そう遅くまでつきあっていたく訳にはいきません。またこんどおねがいしますわ、と心優しい彼女は本当に済まなそうに言うのです。

「これからもちよくちよく会えますよ」

と辻村さんに慰められ、かなり物足りない思いでしたがとにかく憧れの君に会えたのだからと自分に言い聞かせ、ホテルを後にしました。

私と辻村さんは味気ない想いで難波の大阪一という「南大門」という焼肉屋に入りました。焼き肉を肴にコーリヤン酒でしたたかに酔った私たち二人は辻村さんの提唱で酔い醒ましに小さな浮世風呂にとびこみました。酔っぱらっていたせいか、相手の子の顔に手を出してしまい、泣かせてしまうというハプニングが起きました。私は眼の座った辻村さんを見たたん、パツと酔いが醒めて、これはまずいことをしたとひたすら謝まって、辻村さんの手を取り、タクシーで奈良の辻村邸へと急いだのです。

翌朝、家族と一緒に食事の時、酔いの残っている辻村さんは、昨夜はどうも済みませんでした、とひたすら恐縮しておりましたが、私は昨夜の武勇伝の中に辻村さんのサディストとしての面をはっきり見たと思ったのです。

「きょうはゆっくりして言って下さい。何かおもてなしを考えます」

意味ありげな辻村さんの言葉は何かを期待させます。

食事の後、辻村さんの居間でアルバムを見せられました。辻村さんと奥さんのプレイ記録です。縛りの写真から始めて、奴隷の如く、機械人形の如く、なんでもさせられる奥さんでした。

中でも裏庭で、がんじがらめに縛られ、逆吊りにされている受難の顔で、小便を受けいる顔が印象的でした。お世辞にも美人とはいいい難い奥さんですが、ここまで調教した辻村さんの実力には敬服しました。

「きょうはめばしい子はいないんです。でも編集部に来たモデル志願の子に連絡がきました。お昼に奈良駅まで迎えに行く約束したんですよ」

獲物をとらえた狩人さながら、辻村さんは、まあ良かったですねと相好を崩すのです。

「賀山さん、まだ縛られたことのない子ですので、余りハードには出来ないと思いますが、頑張ってみましょう」  
辻村さんはとても張り切っておられました。

電車がホームに着くと、長身の女性がこっちに向かって歩いてきます。他にそれらしき人物はいません。彼女が近づくと待ち、どちらからともなく声をかけ合って、ドッキ



ングできました。

帰りの車の中で彼女は「村上ゆきです。よろしく」と名乗りました。

昨夜私が寝た離れに案内された彼女は、結婚に失敗し現在アルバイトサロンにつとめていると話しました。プイの経験はないが、店のお客さんに奇クを見せられて、何気なく応募したのだそうです。

庭の奥でやりましょう。と辻村さんはカメラを肩に下駄をひっかけて、

「村上さん、裸になって下さい」

折りたたみ椅子に彼女の衣裳を置き、

「すこし痛いですよ」

手なれた縄さばきで縛り上げ、辻村流のリズムで楽しげにシャッターを切りはじめました。

村上さんは黙々と言われるままにポーズをとり、まったく感情を表わしません。

一時間ほどして、辻村さんが、

「ご苦労さま、こんどは上にあがりましょう」

と言ってロープを持って座敷にあがりました。

「カメラハント用にすこし仕事をさせてもらいましたが、これからは楽しみの写真をとりましょう」

やがて衣服をつけた村上さんがやってきました。

「まだ終わっちゃいませんよ。脱いで下さい」

辻村さんが冷やかに言いました。

村上さんは実に素直に命令に従い、パンツまで脱いでしまいました。

「さあ、賀山さん。好みの縄がけをして下さい」

私は勇躍して彼女を後手にし、二の腕にも縄を回し、首より乳房の上下を縛り、腰を二回りして股間縛りにきめました。辻村さんはシャッターを切りながら、

「こんどはそのままの姿勢で排便スタイルになって下さい」と言います。村上さんが不自由な姿勢でしゃがみますと股に通した縄が大事な所に食いこんで、秘所が縦割りに展開するのです。でも村上さんはすこしも羞恥の風情を示しません。

業を煮やした辻村さんは、床の間に立てかけてあった棒を持ち出して、

「賀山さん、極めつきをやりましょう。手をいったんほどいて縛り直して下さい」

私はいささかヤケ気味に乳房の上下を容赦なく縛りました。村上さんは初めて表情を変えました。「アアッ」と呻き声をあげます。

「賀山さん、タテに一本いって下さい」

私は勢いを得て首にかけた縄尻を、彼女の秘所めがけて「グイッ」と引きしぼり、そのままゆるめることなく、背後に回し、固定しました。何回となくシャッター音が耳を





辻村邸の庭ではしごに縛りつけられた村上嬢。すらりと伸びた長身が素敵



打ちます。やがて数本の棒を持った辻村さんが、村上さんのだらりとした両手に棒をあてがい、

「これから、お白州だ。訊問を始めるから覚悟しなさい」

と言い、残った棒で彼女の乳房をつつき回すのです。棒の標的はだんだん下がっていき、股縄に責め棒をさし込んで「グイッ」と引きしぼりますと、これには流石の彼女も我慢し切れず「痛あっ」と大声をあげて畳に崩れ落ちてしまいました。

「ゴメン、ゴメン」

辻村さんは責め棒を私に渡し、さっさとカメラを持ち、

「賀山さん、何かポーズをおねがいします」

と私にバトンタッチするのです。棒を持った縛りは、初めてであったのと、彼女の表情に苦痛が読みとれたので、

私はやる気を起し、辻村さんの意味を体して、

「村上さん、正座しなさい」



不自由な姿勢にしゃがませると秘所が縦動りに展開する

と命令しました。

太腿を責め棒でつつかれた村上さんは、畳に正座し、何をされるのかと恐わごわ上眼づかいに私の顔を見上げるのでした。辻村さんから黒い布切れが投げられました。あまり大きな声を出されて、家人に聞かれてはまずいという配慮で、しっかり猿ぐつわをかませました。村上さんは額に



ロープの中に責め棒をこじ入れて乳房なぶりを始めると

心に深く感じたのです。

「きょうはこれまで」

と名判官の声で現実に戻り、私は村上嬢をやさしくいたわったのです。痛苦に耐えるのと緊張感で疲れましたと彼女に訴えられましたが、辻村さんはお構いなく、「最後の感じが本当によかった。だんだん呼吸が合ってくればすばらしくなりますよ」

と満足そうにニコニコ笑っています。その態度はまさしく「ジキル氏」と「ハイド氏」そのものでした。

「次回は名古屋でカメラハ

しわを寄せ、能面のような顔が次第に生き生きとしてきました。

調子にのった私は、ロープの中に責め棒をこじ入れて、乳房なぶりを始めますと、彼女は苦しさの余り体をよじらせ、演技ではない自然な素晴らしい色気がかもし出されてきました。これが本当のSMの真ズイではないかと、体に

ントの仕事をするので、日時がきまったら連絡します。よろしかったらどうぞ」

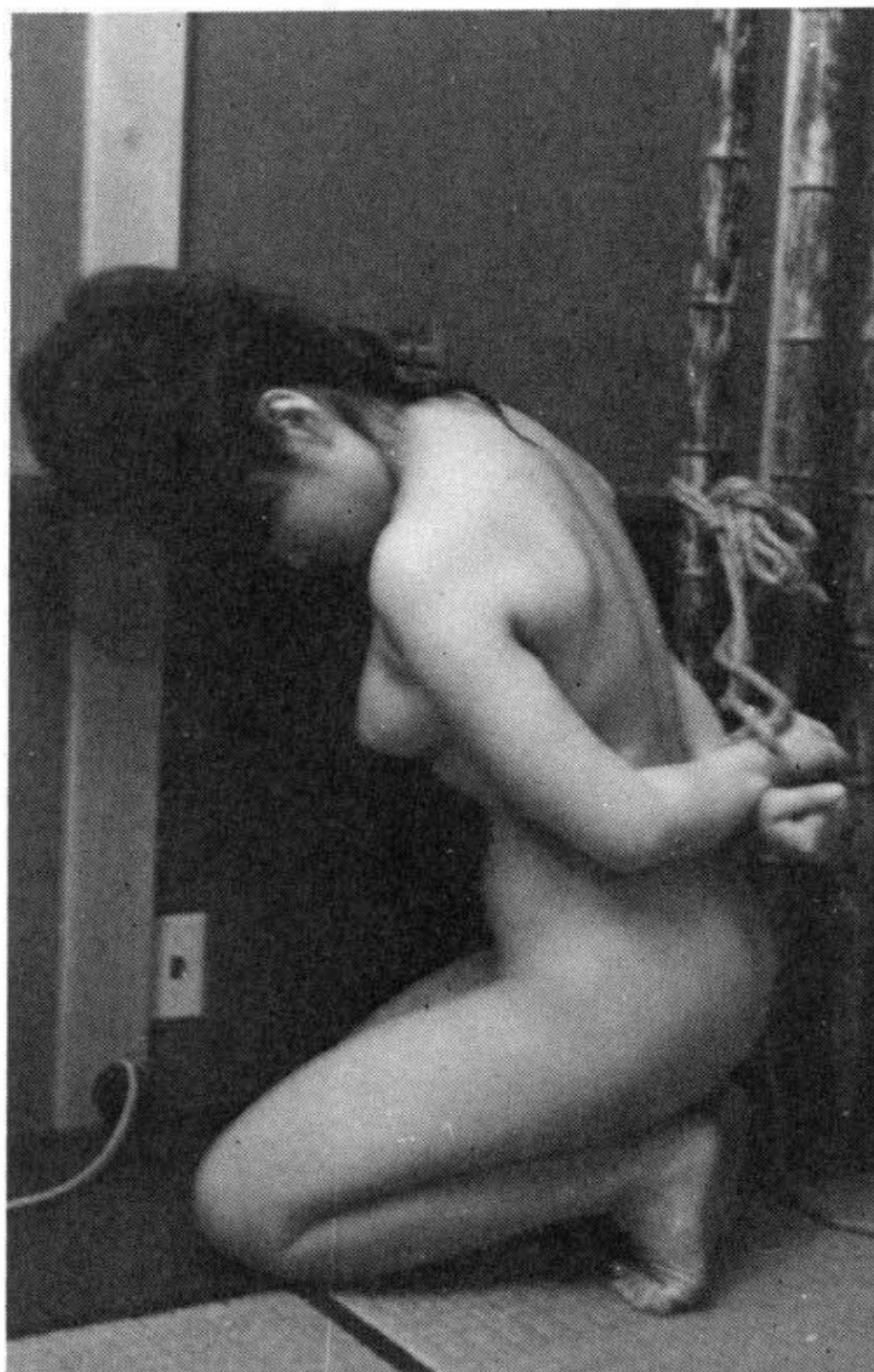
と次回の約束をして古の都を後にしたのです。



# 淫ら妻は背後責めに燃えた

夫の見ているまえて、美濃村晃に背後から犯されて快感に悶える芳子夫人の狂態!! だが夫人は 縛りの浣腸だけは許してと頑強にこばみつつけた……

美濃村 晃



覚悟をきめた芳子夫人の裸身から悲壮美が漂う

~~~~~SMプレイの誘いに惹かれて~~~~~

京都に住んでいる、私の年来の友人A氏から手紙を貰ったのは、十二月も末のことだった。

A氏と私とは随分古くからの親友で私が奇譚クラブに編集者として入る以前からいろいろとお互いの趣味のことで交流があったのである。

手紙の要旨は、何年も前からA氏と私との間で懸案になっていた、A氏の奥さんを縛るプレイの実行についてであった。

「……美濃村さんになら、縛られてもいいと言っていますから……おいそが

しいでしようがぜひ一度暇をみつけて京都へ来て下さい。芳子（これが奥さんの名である）も私もお待ちしています」

と、というのがA氏の手紙だった。

私は、あの和服のよく似合うA氏夫人の蠟たけた姿を思うさま縛れる期待に心がはずんで、京都までの道のりも遠くは感じられなかった。

たまたま世間は冬休みの時期でもあるし、私も冬休みのつもりで京都に遊ぶのもいいだろうと思って心が決った。

すぐA氏の許に電話をすると、いま直ぐにでも来てほしいということなので手廻りの品を入れたバッグと撮影機械やロープを入れた鞆を下げてふらりと新横浜から新幹線に乗ったのだった。

「……やあ。よく来てくれましたね。京都もこのところ寒くてねえ……忙しいのに遠いところをたいへんだったでしょう」

A氏は、そう云って迎えてくれた。

A氏の家は、京都の岡崎というところ

見てはいやと悶えまくる芳子夫人の痴態



ろにある、閑静な住宅だった。

「あら、よくいらつしやいました。ごぶさたをしているうちに、ずいぶんおやせになりましたねえ」

と、今回の主役である芳子夫人は、私にそう云った。

「ええ、思わぬ時に思わぬ病気をして入院したりしていたものですからすっかり痩せてしまいましたよ」

と、私は奥さんに言った。

私は彼女に恰度二年ほど前に逢っているのである。

あの頃の私はまだ今度のような病気をする前だったからもつと太っていたのであった。

「……奥さんが、覚悟を決めて下さったというので、きょうは、わくわくしながらやってきたのですよ。よろしくおねがいします」

私はそう云ってA氏に眼で合図を送った。

「そうだよ。美濃村さんも、この忙しい時期に病後をおしてわざわざ来て



下さったんだから、いつかのように、  
恥かしいから厭だなんて言わさないぞ  
！ うふふふッ 今から覚悟をきめ  
ておくんだな！」

A氏がそう言う通り、以前に一度プ  
レー寸前までいったが、芳子夫人が急  
にその場になって、

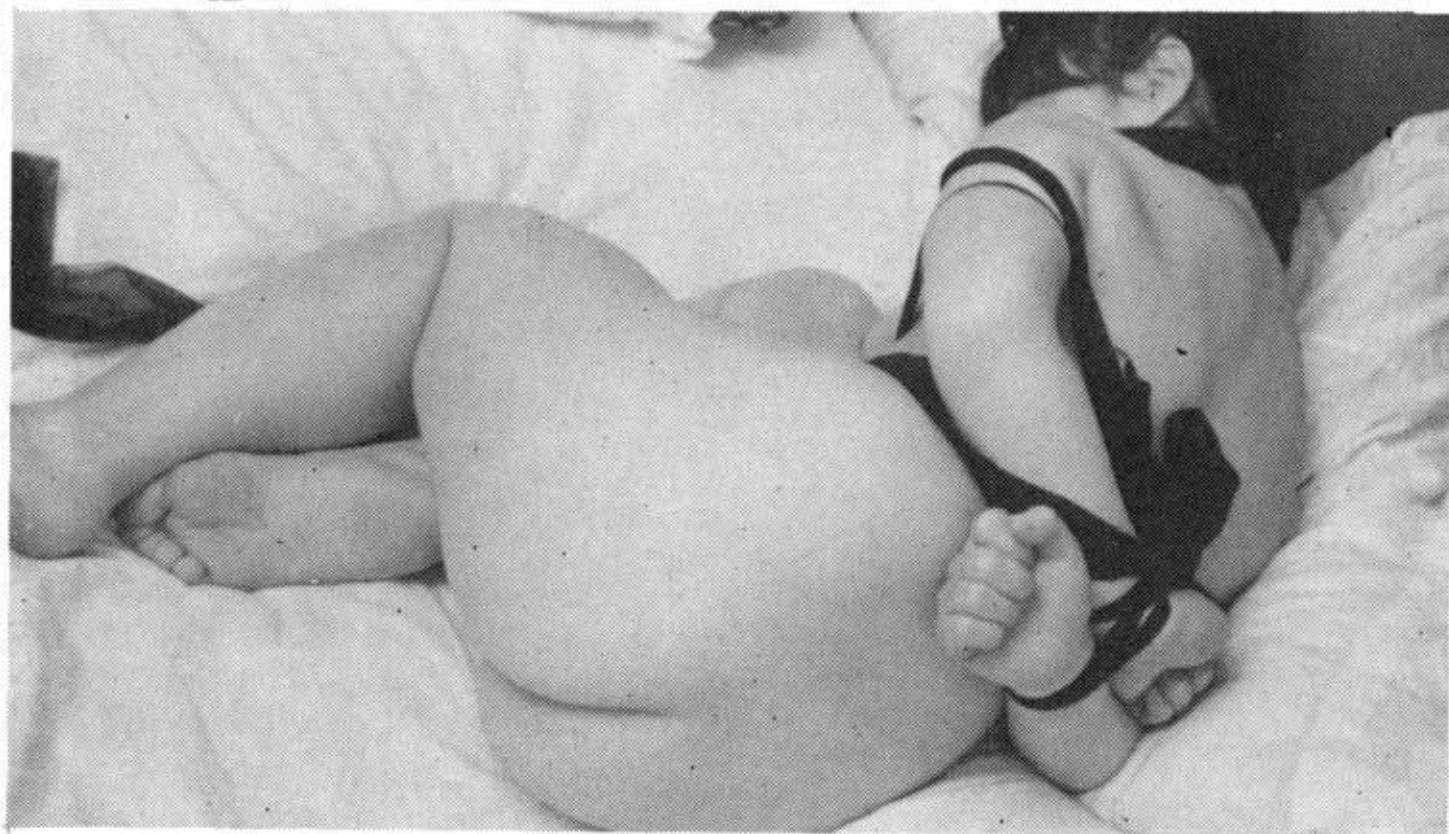
「はずかしいから、ゆるして下さい……」

と言い出して、とうとう折角の撮影  
がオジャンになってしまったことがあ  
るのだった。

「きょうは、あのおときのお仕置きも一  
緒にしてやることにしようか……」

芳子夫人心づくしの夕食の席上で、  
A氏はそんな冗談を言って芳子夫人を  
おびやかしたりするのだった。

「……まあ、あんなこと言ってえ。あ  
たし、逃げ出したくなりますわ。美濃  
村さんは助けて下さいますわねえ……」  
夫人は眉をひそめてさも辛そうに身  
体をくねらせてみせるのだった。



好きなようにやって下さいと主人が言った

### ……寝室が処刑の部屋……

食事が終わると、階下の八畳の和室が  
処刑の部屋と決って、その部屋に布団  
が敷かれた。

「……今夜はこの部屋で寝てもらうつ  
もりですから、どうかゆっくり過して  
下さい」

と、A氏はさりげなく言ったが、そ  
の言葉の裏には、A氏特有の私を驚か  
す罠がかくされているのだった。

八畳の寝室いっぱいにとんが敷か  
れて、

「ああー、いいお湯だったわア……」

と、芳子夫人が、ゆったりとしたガ  
ウン一枚のあでやかな姿で部屋の中  
に入ってくると部屋の中の雰囲気にと  
たんに妖しい気配になる。

「芳子は、ずっと以前から、美濃村さ  
んのファンでしてね。一度縛られたい  
と前から言っていたんですよ」

A氏は、今年五十八才だというが、  
年にしては少し頭髪がうすくなりかけ



玄関で縛られていた芳子夫人（上）マナイタの鯉の女体を、さあどこから責めるか（下）



ていた。芳子夫人は三十二才である。お二人の年令が少なからずちがうのは前の奥さんとA氏が死別したあとに、芳子さんを新夫人に迎えたからである。芳子夫人は、前夫人のきよさんが胃癌で入院中から、A氏の世話で伏見の大手筋でスナックをやっていたのだった。私はその頃から芳子さんを知っていたのである。

濃村さんに縛られたことがあるんじゃないのか？」  
と、冗談まじりにA氏が言うほど芳子夫人と私とはSMプレーについてあけすけな話を交すほどの仲だった。「……あたし、羞しいからパンティはいてきちゃった！」  
と、芳子夫人は、ふとんの上で身をくねらせる。彼女がガウンを脱ぐとその下には黒のスリッパを着ていて、そ

の下に黒いパンティをはいているのだった。  
彼女は肌の色が白かった。大柄でむっちりとしたからだをしていた。それにおしりが大きかった。私はこのタイプの女性に弱いのである。  
「さあ今夜は、美濃村さんにいいように縛ってもらうんだよ……美濃村さん縛るのはこの革紐で縛ってやって下さい」



「ねえ早くして、形のいいヒップが私を誘う（上）後ろから抱かれるとたまらないという（中）このポーズに弱い夫人（下）」



と言って、A氏に渡されたのは黒い革紐であった。私は愛用のロープを持って来ていたのだが、細い革紐が奇妙にセクシーな芳子夫人に似合いそうなのでその夜はその革紐を借りることにした。

「さあ、はじめて下さい」

A氏は、ふとんの上に横になってウイスキーをなめている。

私は湯上りでブリーフ一枚のままの裸体になり、革紐を持って芳子夫人の背後に迫った。

「芳子！ 美濃村さんのを見てみる！」  
とA氏が革紐を持って夫人に迫る私

の股間を指さした。

「……ン、まあッ！」

芳子夫人が息をのんだのも当然で私のその部分はまるでテントを張ったように硬直してブリーフを押し上げているのだった。

「う、うッ！ その黒いスリッパを脱

いでしまつてくれませんか、どうせ脱がされてしまうものだから……」

「ええッ！ これ脱いだら、オッパイが見えちゃうじゃないの！ ああッ……どうしよう……はずかしいわッ」

と、芳子夫人が言ったときA氏がウイスキーに酔った顔を上げて、トロンとした眼で夫人の豊満なおしりを見ながらこんなことを云ったのである。

「へへへッ。オッパイどころかきようは、オ×××も、おしりの穴も、おケケの生え方までバッチリ美濃村さんに見てもらうんだよ！ 覚悟をしておくことだなあ、ウハハハハハ！」

と、A氏は笑った。

「美濃村さん、今夜は無礼講ということにしましょうや！ お好きなように可愛がつてやって下さいよ。うんといじりまわしてやって下さいよ！ かまいませんからね。しかし芳子が騒ぐといけませんから、さるぐつわだけはしっかりと咬ませておいたほうがいいでしょうな」

A氏はそう言って、パンストを二つに切りはなして、芳子夫人の口に噛ませてさるぐつわをしてから、その上を余ったパンストの残りでしっかりと二重に縛り上げた。

「さあ、こうしておけば、そんなに大きな声は出せんでしよう……さッ！ 脱がせてやるッぞ！ うふふふッ」

と、A氏は彼女のからだから黒いスリップを脱がせてしまうのだった。

「ああ！ う、ううッ、う、う、うッ」スリップを脱がされた芳子夫人は、もう身につけているものは、黒いパンティがたった一枚だけであった。

彼女が羞かしがってふとんの上で悶えまわるのを、A氏は抑えつけながら「さあッ、このパンティを切り取ってはずしてしまつてやるぞ……」

と、ハサミを持ち出してきたA氏はあばれまわる夫人にかまわず、ひとかえもありそうな彼女のおしりをかかえ込んで、パンティと皮膚の間にハサミを入れて、ジョッキジョッキ切り裂いて

いくのだった。

「ひい！ッ！ いやよーッ！」

夫人は声をあげているつもりだろうが、その声はさるぐつわに消されて、「う、むッむむッ、む、むッむうッ……」

としか聞えなかった。

私の眼には、切り裂かれた黒いパンティの下から、芳子夫人のまっ白い臀部がムッチリとあらわれてむき出しになり、妖しい中央の割れめが、むっと息をのむほどの色っぽさでくねり悶えながら現れたときには、私は胸がふるえた。

「うッ！。く、くッ……あ、あッ」

芳子夫人は、さるぐつわの下で低く呻いていた。

「さあ、縛つてしましましょう」

と、A氏が彼女の両手をねじ上げるところを、私が革紐で手首を縛り上げる。

「あ、なるほど専門家は手早いものですねア……こりやあ、わたしなどがお



手伝いするまでもなさそうですね」

「いえ、やっぱりそうして抑えていた  
だくと助かりますよ」

云いながら私は余った革紐で彼女の  
乳房の上下を巻き締めていった。

芳子夫人の乳房は、むっちりと柔ら  
かく盛り上っていて、私の手が触れる  
と、ぷるんと弾きかえしそうだった。

「あッ。いやーん」

芳子夫人は、私という第三者の手で  
乳房をいじりまわされる淫らな感触に  
縛られた裸身を必死にもだえさせた。

「そ、そうです！ 遠慮なしにいじり  
まわしてやって下さいよッ」

A氏が傍から私を力付けるように声  
援するのだった。

A氏は少し酒に酔っているようだ。

私という他人に最愛の妻を蹂躪させて  
いる倒錯した今夜の行為が、常でない  
刺激として感じられるのだろうか。A  
氏のブリーフのあの部分も彼の興奮が  
ただならぬことを示していた。

「そ、そこですよ。芳子は左の乳房が

弱いのです。そ、そこをもっと……」

実はA氏に云われるまでもなく、私  
は彼女が左の乳房をもまれるとすぐに  
たまらなくなることを知っていた。

しかし、そのもみ方に少しコツがあ  
るのだった。芳子夫人が感じるもみ方  
は、左の乳首を、少し強いめに指でつ  
まみ上げておいて、引っぱり上げるよ  
うにしながら、グルグルまわすのだ。

これをやられると芳子夫人は眉を八の  
字に寄せて、

「あーッ感じるわーッ、美濃村さんに  
こんなにされるの、久しぶりだから、  
凄く感じるわァーッ。あーッ、どうし  
ようッ……」

と、裸身を身悶えさせながら、私を  
誘うのであった。

私は右手を彼女の胸にまわして、オ  
ッパイを、もみもみしながら乳首を唇  
にも含んだ。

「ああん！ いじわるッ！ こんなに  
縛られてあちこちさわられて焦らされ  
たら、あたし、気が狂っちゃうわ！

もっと別なところもさわって！……ね  
えッ！早くうッ！」

と、彼女は、縛られた裸身を、私の  
方にすり寄せてきて、うしろ手に縛ら  
れた手の指で、私のジュニアを、とら  
えようとするのだった。

彼女の白い指先で翻弄される私のジ  
ュニアは、もう先刻から天をつくよう  
になっているのである。

「ね！……早くうッ！……ねッ」

私は、彼女を背後から抱くポーズで  
そっと指を伸ばして花園に触れてみた。  
その部分は、沸きたった蜜壺のよう  
に熱くなっていて、私が驚いたほど、  
しとどに濡れそぼっているのだった。

「うッ！……あ、あーッ！ しびれる  
ウ！」

彼女が、うめいた。

私は、あれッ？ と思った。気がつ  
くと、さっきA氏が咬ませたはずの猿  
ぐつわが外れてしまっているのだった。  
私は背後から手をのぼして、彼女の  
口をさるぐつわの上から抑えつけて、

声が出ないようにしながら、うしろから責めたてた。私の硬直したものは、彼女のバックから、思わずのめり込むような感じで沈み込んでいった。

「……う、うッ！ ふん、ふん。ふんふん。ふんふん。ふんふんふんふんふんふん！」



いつしか、私も彼女も激しい息使いになって、お互いに密着したからだを揉みたてるのだった。

「……あ、あ。い、いいわ！……も、もう駄目になりそうよ！ あ、あーッ！ あーッ」

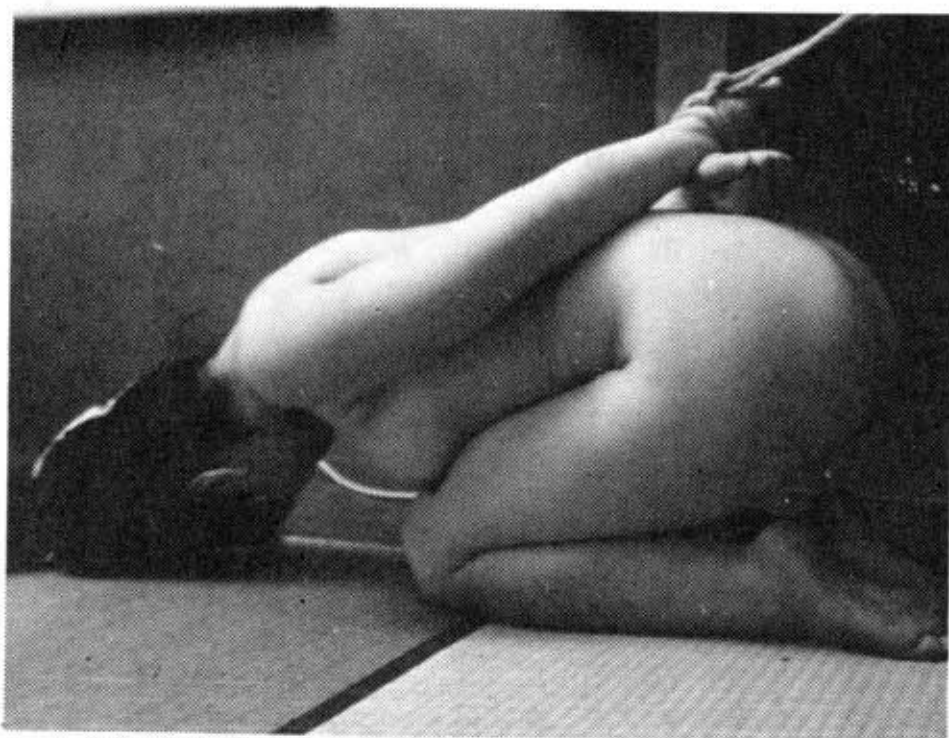
彼女が、のぼりつめる時の声を私は



うつつのように聞きながら、必死になってさるぐつわの上を片手で抑えながら激しく動いた。

「うッ。うーッ！」

私は、おとし（昭和五十四年）の五月に病気で倒れて東京女子医大病院に入院以来の一年半もの間の溜りに溜



黒いパンティを切り裂きお尻を剥き出しに（上）首縄をかけられた全裸の芳子夫人（中）イヤヨイヤヨの駄々をこねるのを（下）



ったものを、全身がとろけるような思いで一気に彼女の中にはじき込んだのであった。

「ヒィーッ。あたしもう、死にそうだったわ」

「ふうーッ。ああ、凄かったなあ……！」

彼女も私も、本当にこんな思いは久しぶりだったので、終ってからでも心臓がいつまでもドキドキしていた。

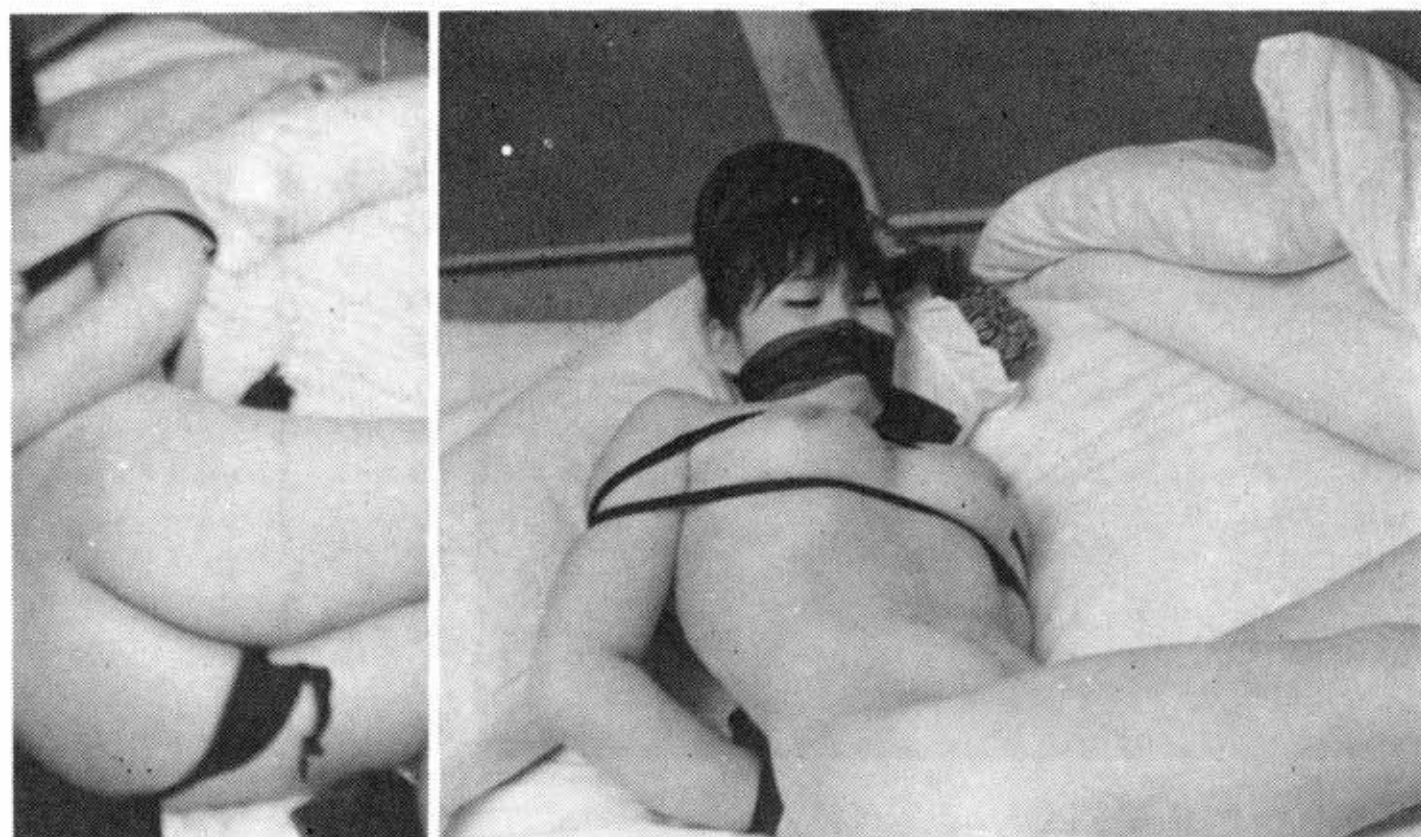
彼女芳子夫人を、A氏に紹介して二人を一緒にさせたのは実は私だった。だから私が一回目に倒れるまでは、当然のことだが彼女は私の、ロープ・メイトだったのである。

そんな仲だから、久しぶりに逢った彼女と私を、A氏は二人きりにして好きなようにさせてくれたのであった。

### もう一晩泊ったら？

そんなことでもなければ、他人の寝室にまで入りこんで他人の奥さんをハダカにして縛りあげ、こともあろうに

何をしてもいいのよといって眼を閉じたが



バックから犯すようなことが許されるはずもないのであった。

「いやあ。おかげで、傑作のビデオが撮れましたよ。ふふふッ、みんな美濃村さんのおかげですよ。音もバッチリとれました。大成功！大成功！」

と、A氏が寝室に入ってきてそんなことを言うのと、

「ええーッ。あんなところを、ビデオにとったのーッ。へええーッ、なんだか変だと思ってたわッ！……そんなことしちやあ、美濃村さんに悪いじゃないの！……まあッ、あきれたわ。いやあねえッ！」

と、芳子夫人は、驚くやら呆れるやらで、大騒ぎになったが、これは、始めから、A氏と私との諒解があって、ビデオを撮ることは私には前以て判っていたのだった。

だから私はビデオカメラのある方向ってことさらによくうつるように演技したつもりだったし、彼女の声もよく収録できるようにせいぜい刺激して

出させたつもりだった。

あとで、私と芳子夫人が愛情交換をしている場面のビデオを、みんなで見ながら楽しんでA氏は、

「……こりゃあ、最近の傑作だァ！、カメラのアングルといい、写真の構図といい、縛られた女のもたえ方といいどれをとっても秀逸だッ。S Mポルノ・コンクールがあればそのビデオ部門にでも出品したいくらいのものだ！」などと云いだして、私や芳子夫人をあわてさせるようなこともあったほどだった。

まあ、その夜はそんな騒ぎで終わったのであるが、翌日の朝になると、朝食を食べている私の目の前にA氏が芳子夫人を連れてきて、



あたしもうたまんない。なんとかしてよ！



豊かな裸身が 恥でバラ色にそまった……

「昨夜は、腰が抜けるほど可愛がって貰ったから、満足しただろうが、いよいよ今日はお別れだ。美濃村さんをお送りするにはこんな姿が芳子には一番似合うだろうと思ひましてねえ……」

と言って、芳子夫人を追い立てながら出てきた。

「あッ！」

私は夫人の姿を見て驚いた。

芳子夫人は、文字通り素ッ裸にされていて、うしろ手に縛り上げられているのだった。

「さあ、そのままの姿で、お別れの挨拶をするのだ！」

A氏は、夫人の縄尻を、玄関の次の間の飯床の間の竹の柱につなぎ止めて「そこで、美濃村さんによーく〇〇〇〇を見て貰って、またおいで下さいと云え！」

とか、

「へへ、何なら、もう一晩泊ってもらって、もっと凄いビデオ撮りをやって貰うことにしようか……どうだい？」



などと言って、私が帰ろうとしているのに、

「……どうです。もう一晩、あそんで行きませんか？……」

と、わざと私に見せつけるようにしながら芳子夫人の、縛られたままの裸の股間に手を入れて、ヒューヒュー泣かせたりするのだった。

「美濃村さん、ほら、これを見てごらんなさい。ちよっとこうしていいじりまわしただけでもうこんなになってしまっていますよ……ほら！　ほら！」

と、帰り支度をしている私の目の前に、いま彼女の股間から抜き出した指をこれみよがしに見せつけるのであった。

「……いいですよ！　じゃあ。もう一晩泊めてもらいますよ！」

結局私は、A氏夫妻の強引な要請に負けてもう一夜だけ泊ることにしたのだったが、それはたいへんな失敗だった。

### 縛りは羞かしい、イヤ……

そんなことで、もう一晩だけA氏宅に泊ることになったのだが、その夜のビデオ撮りがまたたいへんだった。

「一度だけ、芳子を、まっばだかのままで蟹縛りにしておいてから強力浣腸をかけてみたいと思っていたのですが……このさい美濃村さんにご協力を願ってビデオを……」

と打ちあけられて、私は、  
「ふええーッ！　強力浣腸ですかあ……」

「駄目ですか？」

「い、いえ。そ、そんなことはありませんが、浣腸は、奈良の辻村さんが専門なんだがなア……」

と、私は言ったが、その辻村隆氏はその時糖尿を病んで病床にあった。

「じゃあ、その辻村先生を……」

気の早いA氏はもう立ち上りかけているのだった。やりたいとなると足元から火のついたようになるA氏の性格

を知っている私は、この分なら本当にA氏は、京都から奈良まで車をとばして辻村氏を迎えに行くかもしれないと思った。それでは辻村さんがたいへんなのだ。

「あ！　いいですよ！　私がやりましょう」

思わず口走ってしまった。

「あー、よかった。やってくれますか！　もう少しで奈良へ車を出すところでした」

と、A氏は言った。

そんなやりとりを傍で聞いていた芳子夫人は、縛られたまま、激しくもがいた。

「イヤヨーッ！」

と、必死に叫ぶ声は表の道路にまで聞えそうだった。

「バカ！　こんなところで大きな声を出す奴があるかッ！」

「イヤヨーッ！　この縄、ほどいてッ！　そ、そんな、強力カンチョーなんて許してネーッ」

「ねえッ！ この縄ほどうッ！ 美濃村さん 腸やめてーッ！ おねがいよッ！ いやようッいやようッ！」

と、駄々をこねるように、丸裸のままで悶えるのであった。

「うふふふッ。どうせ厭がるだろうと思ったから、あらかじめ縛っておいたんだ」

と、A氏は言って、せせら笑うのだった。

さあ、それからが大変なことになった。

蟹縛しぼりというのは、芳子夫人の縄を一度解かねばならないのだった。

縄をといて、もう一度、蟹縛しぼりするには、彼女が厭がってあばれるので、とうとうその日は夕方まで蟹縛しぼりできなかったのであった。

これが小説や何かだと男が二人もいれば、犠牲の女は、みるみるうちに男の側の思いのままに縛り上げられてゆくのだろうが、実際にはとても小説のような訳にはいかず、結局は、A氏が

「ええい、仕方がない。そんなに厭ならまた別のことを考えよう……。しかし、きょうのことは忘れるなよ！ つかきつとお仕置きをしてやるからな……いいかい」

ということと、蟹縛りの強力カンチヨーは実行できずに終わったのである。

本来ならここで、豊満な芳子夫人のカニ縛り浣腸ポーズの写真がお目にかけられたはずなのに残念でありました。

A氏にあとで聞いたら、

「ふふふふ。あれは作戦の失敗でしたよ。あんなに蟹縛りをいやがるとは考えてもみませんでした。本当なら、アナス責め大会をやりたいかったのですが、それをやるためには彼女には、こちらの意図を知らせずにおいて、さりげなく縛りあげてしまってから、いきなりやらなくては出来ませんから、ぜひ、この次の機会を狙いましょう……。ふふふふッ、そうすれば、うんと思いきったことができると思いますよ……。その日がたのしみですね……。また京都

へ来て下さいよ……」

A氏は、眼を輝やかして言うのだった。

「いつかきつといい機会を作って凄いのを撮りましょう！」

と、私はA氏と約束をして東京に帰ってきた。

この、SMポルノビデオコンクールは、いずれ機<sup>かり</sup>をみて実施するつもりであるが、今回は彼女の協力が得られなかった。

しかしA氏は一度思い立ったら必ず実行する人だから、遠からず芳子夫人悶絶のシーンを、読者にお見せできると信じている。



# 豊満女体のマゾ開眼

縛悦介

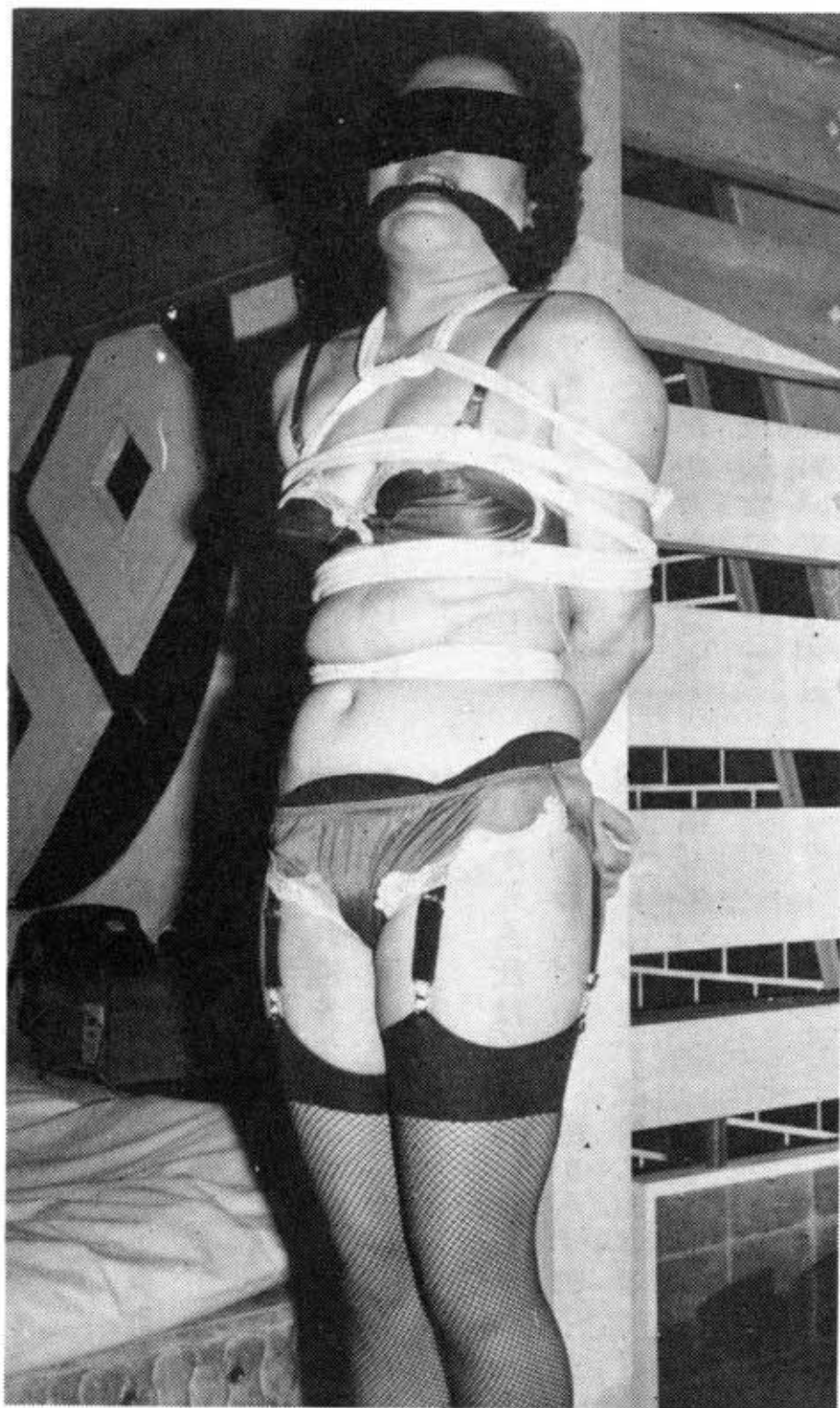
## 初縛り

雅代は某誌の文通欄で知りあった女である。文通欄で女性と知りあうというのはなかなか難しいことであるが、私はラッキーだったのかもしれない。

私にとって更に幸運だったのは、雅代がマゾ性を秘めた女だったことだろう。といっても、彼女がSMについての知識があったというのではなく、むしろ、その反対であった。

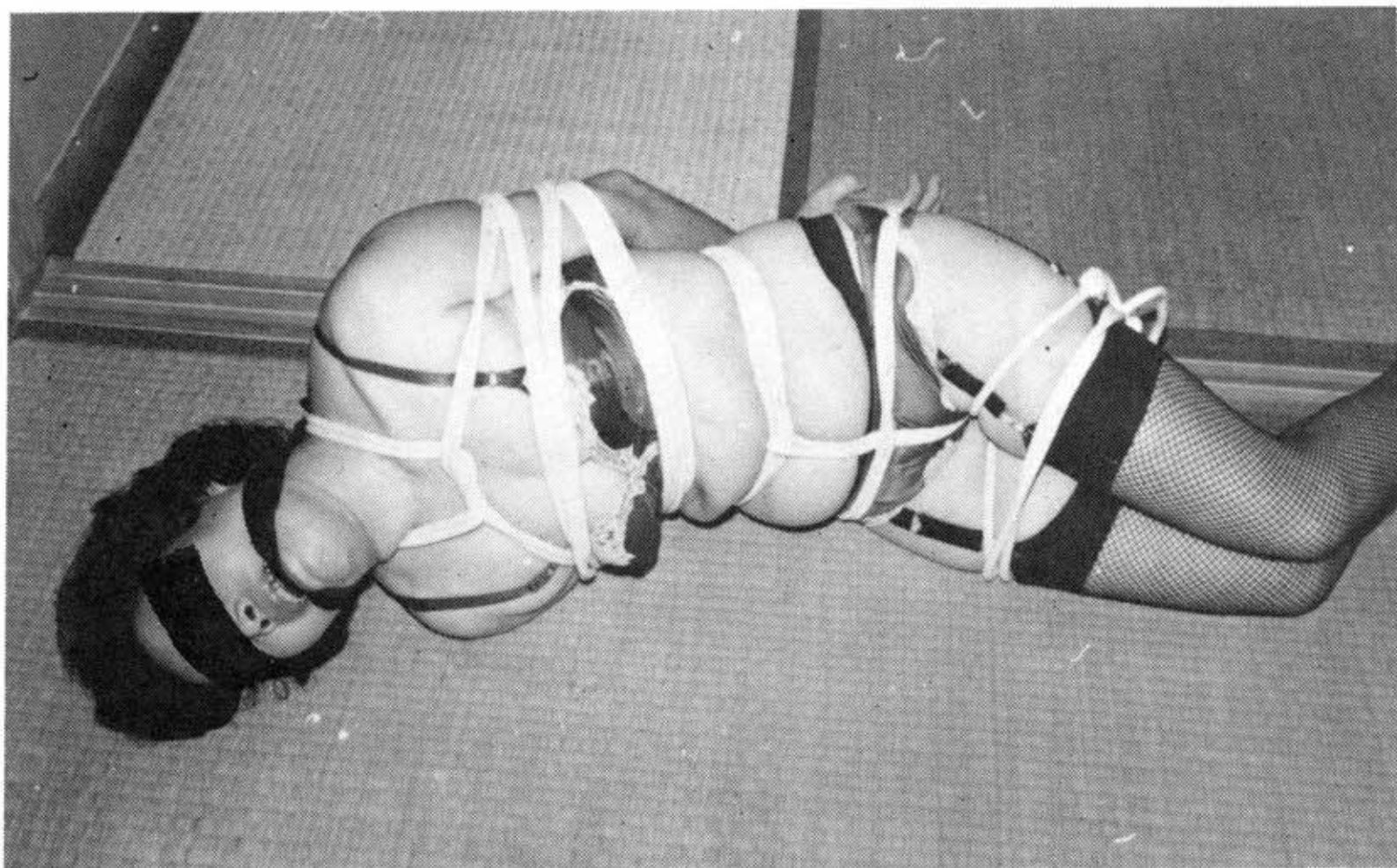
四〇は過ぎている、と本人がいうだけで、本当の年令はよく判らないが、雅代はいろいろな事情から、私と知りあった時には独りで暮らしていた。

何度かの手紙の交換で知り得たところでは、彼女はその年令になってもセックスのことはあまりよく知らず、私の文面にあったSMという言葉が判ら



ずに訊ねてくるほどであった。私の説明を聞いて、ガ然興味を覚えた雅代と実際にプレイするまでに、さして時間を要しなかった。

来阪するという彼女を空港までクルマで迎えに行き、たびかさなる文通で気心は知れているとはいえ、初対面の女性をホテルへ案内するのは気がひけ



たが、彼女はなんのためらいもなく招待に応じてくれた。

ホテルへ着き雅代をくつろがせながらSM雑誌などをひろげて、ひと通りSMについて話をしたあと、入浴をすすめた。

だが、彼女は、出発前にすませてきた、というのでさっそくプレイに入ることにした。

最初は、服を着たままの簡単な後手縛り、余った端で乳房縛りなどをやってみせて、上手にやれば緊縛プレイに危険はないことを実地に教えてやった。

雅代は私の説明に安心したのか、

「すべてお任せしますわ、好きなようになさって…」と、早くも頬を紅潮させていた。

ウブで純情な若い娘を相手にするわけではない。女

盛りもやや過ぎようとしている女性とプレイするのである。私は妙な遠慮は一大決心をしてきたであろう雅代をむしろ傷つけることになると思い、服を脱がせて先へ進むことにした。

雅代は、ちよつと恥ずかしそうに俯向いたが、すぐに背を向けて着ていたワンピースを脱ぎ、下着姿になった。

その姿を見て、私はドキツとした。

まっ赤なブラジャーとパンティ、それに黒のガーターベルトで吊った網目のストッキングをはいていたのだ。

その派手な下着姿に自分でもテレ臭いのか、雅代は、

「恥ずかしいわ……」と、身を揉んだ。

私は忘れていたのである。雅代との文通で、赤いブラジャーとパンティ、ガーターベルトで吊ったストッキングこそ、私が大好きなものであることを知らせていたことを。雅代は、私の好みに合わせて、似合うかどうかわからない下着を着けて、私に会いに来たのだった。

「すばらしいよ、なんともいえずエロチックだ」





と、心から感激して言った。白い、豊かな肉体へ張りついているかのような赤と黒の布切れ……、私はワクワクと心が躍るのを覚えた。

エロチックな下着姿をもっと観賞したいと思い、まず、雅代を柱縛りにした。緊縛プレイには年期が入っている

ので縛るのは早い。雅代は、自分の体にすばやく巻きついてギリギリと縛りあげていくロープに、

「アアッ……、ウウッ……」

と、小さな悲鳴と呻き声を洩らしていたが、それは決して嫌悪しているものではなかった。

「こんなに縛られて……、私、もうどうすることもできないのね……」  
ベット際の柱へ立姿で縛りつけると雅代は、自分を憐れむかのようにつぶやいた。

「その姿を写真に撮らせて下さい」

私カメラを構えると、彼女はうなづき、目を伏せた。数枚撮影したあと、「感じを出す為に猿ぐつわもしましよう」

と、雅代が首に巻いていた赤いスカーフで口を塞いだ。彼女は、アアーン、アアーン、と甘えたような声をあげていたが、それは、緊縛され、猿ぐつわをされた気分を一生懸命に味わっているようであった。

## マゾ開眼

下着姿での緊縛と撮影を終えて、雅代を柱から解き放してやると、私の胸へグツタリと寄りかかってきた。

「縛られるって、こんなに興奮するとは思わなかったわ……」

雅代は、ハアハアと息をはづませ、その唇の間へ私の舌を滑り込ませると待っていたように強く吸った。

ベットへ倒して下着やストッキングを脱がせ、全裸の雅代を愛撫してやる。ボリユームのある乳房を揉みしだき、小指の先ほどの乳首を吸う。アア、アア、と遠慮がちな声をあげる雅代の下肢を大きく開き、フワフワと柔かい腹を掌で撫ぜおろし、更に茂みの奥の肉溝へ指先を滑り込ませていった。

先刻からの雅代の様子から、当然、そこは潤っていると考えていたのだが、案に相違して、湿りも少なく、肉芽に触れようものならむしろ痛がるそぶりさえ見せた。不思議に思い、理由を訊ねると、

「きつと、男性経験があまり無いせいですわ」

という答えがかえってきた。四〇を過ぎて秘園を愛撫されるのを痛がる、というのは妙な話だが、雅代の態度を見ていると、嘘ではなさそうである。試みに指を埋没させようとすると、ひどく痛がった。きつちりと狭いのだ。

まるで処女のような、痛がる雅代とは反対に私の心は躍った。だが、せっかく快感を開発してやろうと試みたバイブなどによる愛撫は徒労に終わった。



雅代にはどんな愛撫も無駄であったのだ。どうしたものか、と考えあぐねた私は、ふと思いついて彼女を尻を鞭打ちしてみることにした。

ベットへ俯伏せに寝かせ、背中へ回させた両手を強く縛り、革鞭で最初は軽く、だんだん激しく打たいていった。

私の試みはどうやら正解だった。ウウ、ウウと始めのうちは痛みに耐えているような呻き声を洩らしていたが、だんだん、アッアッ、という鋭い悲鳴に変わっていった。終いにはヒイヒイと泣き声になってしまったが、そこには甘い響きが感じられたのだ。急いで



秘園をまさぐってみると、先刻の乾燥が嘘のようにたっぷりと潤っている。「感じてるんだね、もうすっかり濡れているよ」

という私の言葉に煽られて、雅代は、「恥ずかしいわッ、私、こんなになるの始めて……」

と、薄赤く染まった尻を揺すって身悶えた。雅代自身がそれほど強く意識していないにしろ、彼女は数分の鞭打ちで愛液をしたたらせてしまうほどマゾ性があったのである。

雅代は一泊するつもりでいたので、翌朝まで、私は彼女のマゾ性をはっきり意識させてやろうとセックスよりも緊縛プレイに熱中した。

全裸の雅代に試みた緊縛プレイは、立縛り、海老縛り、開脚縛り、股間縛りなどである。縛っておいて鞭で尻を打ち、指でまさぐっては濃い滴りを確かめた。そして、その量が次第に増えていくのを知って私は興奮した。調教次第ではホンモノのマゾ女にできる、という確信を得たのである。

後で判ったことであるが、雅代は二十三歳で結婚したものの、夫が間もな



く、性的不能になるほどの自動車事故に会い、セックスの味もよく知らぬまま十五年近くの結婚生活を送ったが、性格の不一致もあって、つい数年前に離婚してしまった、というのである。

その間、雅代は入院、退院を繰り返す夫に替って働いてきたのだが、気がついた時には女経営者として男まさりの手腕を発揮するほどになっていた。

生活に余裕ができ、足手まといでしなくなっていた夫とも別れてみると、四〇を過ぎて男つけのない生活というのはあまりにも味気なさすぎる。自分では意識しなかったにしろ、性的欲望も溜っていたのだろう。そして、たまたま某交際誌に載った私のメッセージに興味を覚えて、文通を開始することになったのであった。

尻を鞭打たれることに快感を感じていると知ってから、緊縛と尻打ちとを併用してなんとかアクメを体験させてやろうと努力した。そういう状態で絶頂に達してしまえば、雅代はもうマゾの悦楽からのがれられなくなる。数多くの女性に接してきた私の体験からもそれは言えることであつた。

尻を高く持ち上げさせて、白い肉のかたまりのような雅代の尻を自家製の九尾鞭が激しく見舞う。

鞭の先端がビシッ、ビシッと小気味よい音をたてるたびに、雅代は、アアッ、ヒイツ、と悲鳴をあげるが、やめて、とは決していわない。豊満な肉体を震わせ、必死で痛みに耐えているのだが、耐えることがまた快感へとつながっていくのか、ウネウネと腰を振る姿体からは一匹のメス豚と化した女を感じさせた。

だが、いつまでも鞭打ちを続けるわけにはいかない。それにグツタリと伸びてしまった雅代の全身



から疲労感も漂い始めていた。初対面の私とのプレイ、それに始めて知ったに違いない被虐の興奮が心地よい疲労となつて彼女を襲っているであろう。

そこで、緊縛をいったん解き、改めて乳房の上下へロープを巻きつけただけの、両手両足を自由にさせた姿で夜具へ寝かせた。

「疲れたろう？、このまま寝なさい」

仰向けに寝かせた雅代を横抱きにしながら、乳房縛りでくびれた二つの乳房を愛撫してやると、雅代はおとなしく目を閉じた。

その片手をそつと撫ぜおろし、やや開き加減にしている両足の間へ伸ばしてみると、その辺りは溶けたバターのような状態になっていた。試みに肉芽に触れてみると今度は痛がらず、軽く指先を動かしているうちにスヤスヤと軽い寝息をたて始めた。

その安心しきつた寝息を聞いているうちに私も快よい眠りに引きこまれていった――。



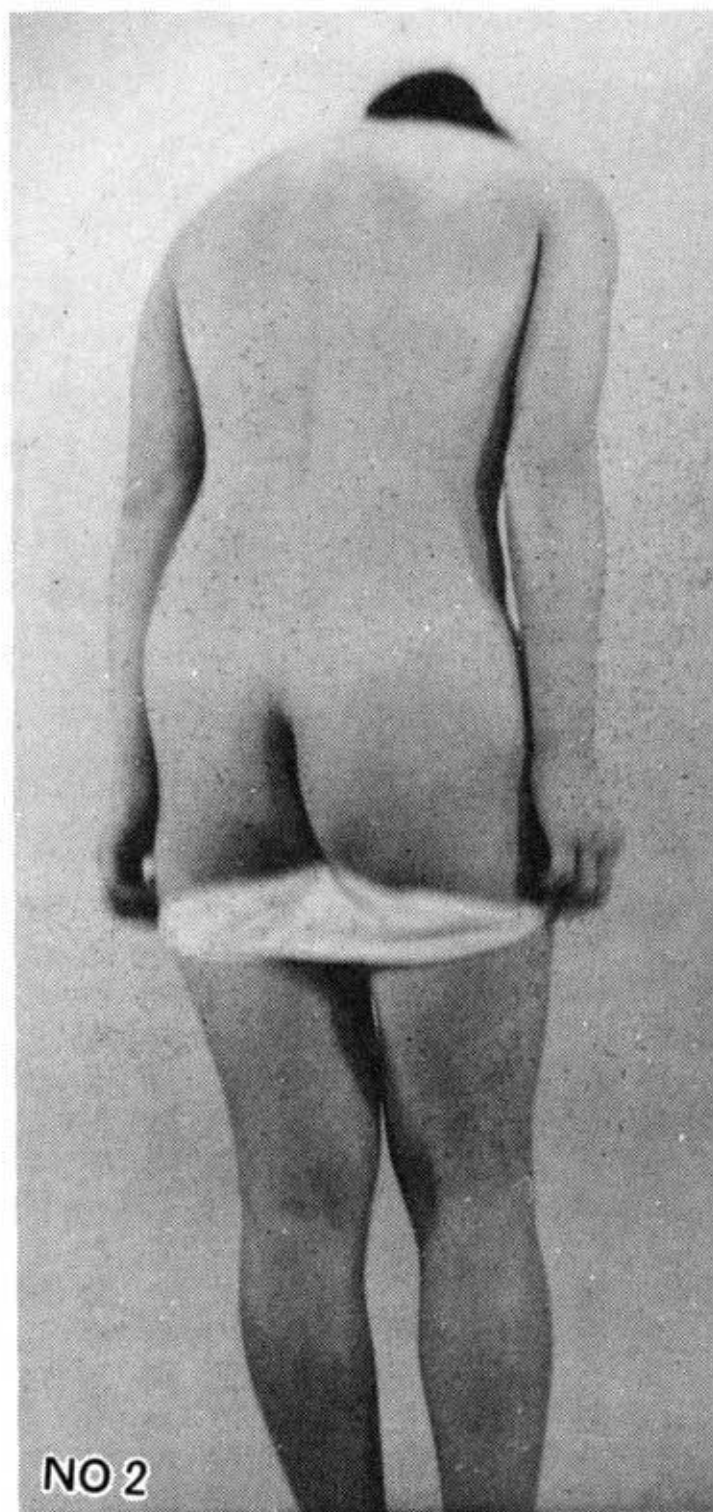
# する縄妾志願の美女達



NO 1

○私って着やせするタイプなんです。身長一五九センチ、バスト八十三センチ、ウエスト六〇センチ、ヒップ八十九センチ、けっこう均整もとれていると思うんです。こんな私、縛りがいいがあるんじゃないかしら……。そう思いませんか？

(No. 1 順子・25才)



NO 2

○後ろ姿でオッパイが見えないけど、かなり大きいのよ。S一六二センチ・B八十五センチ W六十四センチ・H

九十二センチ・ステキな男性だったら  
どんどん脱いじやいます……。  
(No. 2 まゆみ 二十七才)



NO 3

○S一五五センチ・B八〇センチ・W六〇センチ  
H八十五センチ・チビだけど、それなりに恰好いいのよ。やせた女の子が好きなのはわたしは好適。軽いからどんなポーズにもOKよ！よろしくね……。

(No. 3 洋子・21才)

# サディストの彼を募集



NO 4

○少し太めだけど、ポッチリしてていいでしょう？ それに縛られて責められるのが大好きだから、絶対だと思うの。S一五六センチ・B八十五センチ・W六十五センチ・H九〇センチ・優しくて頼りがいのあるオジサマなんか最高だわ。  
(No. 4 圭子・21才)

○白夜の天使にあこがれて看護婦になったけど毎日大変！ たまには私が看者さんになってお世話されてみたいな。サイズはS一五七センチ・B八十二センチ・W六十二センチ・H八十九センチ・(No. 6 敏江・24才)



NO 6

○カッコイイ男の人をいつも夢みている私なの、S一六〇センチ・B八十一センチ・W五十八センチ・H八十五センチ・(No. 5 エツコ・23才)



NO 5

○どなたか私を思いっきり飲ばせてくださる方、いらっしやいませんか？首を長くしてお待ちしております。私のサイズはS一五八センチ・B八十三センチ・W五十八センチ・H八十五センチ・T四十五キロ・お気に召しまして？  
(No. 7 るみ子・28才)



NO 7

女性には調教次第で一〇〇人中九九人までがマゾヒストになり得る——とはベテランのSMマニアの弁であるが、確かに心理学的にみても、女性は本来Mの気があって、これを果たせるか否かはパートナーの腕次第であろう。

ここに登場した五人の女性は、程度の差こそあれ、皆一様に縄の体験を持っており、さほど好きでないにしても、拒絶反応は示さない。つまり相手次第で如何様にも変貌する可能性を秘めているのだ。交際希望の方は相手の写真を切り取って編集室宛郵送されれば本人に回送する。



## 映画情報

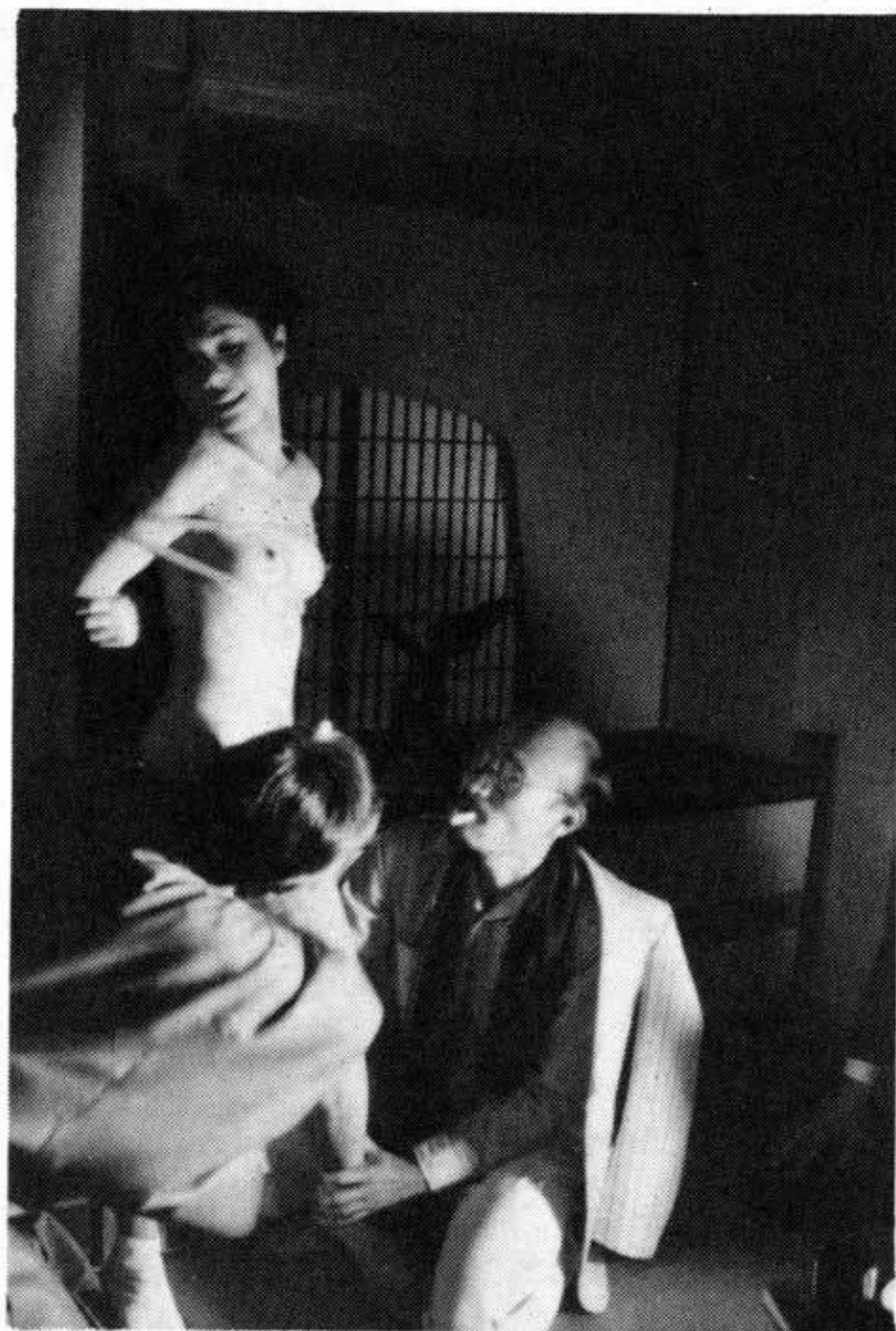
団 鬼六の

# 「黒髪縄夫人」

撮影現場より

SM界の御大、団鬼六率いる鬼プロが放つ「黒髪縄夫人」(製作鬼プロ、配給につかつ)が、2月初旬の寒風吹きすさぶ鎌倉海岸近くの廃屋などで開始された。

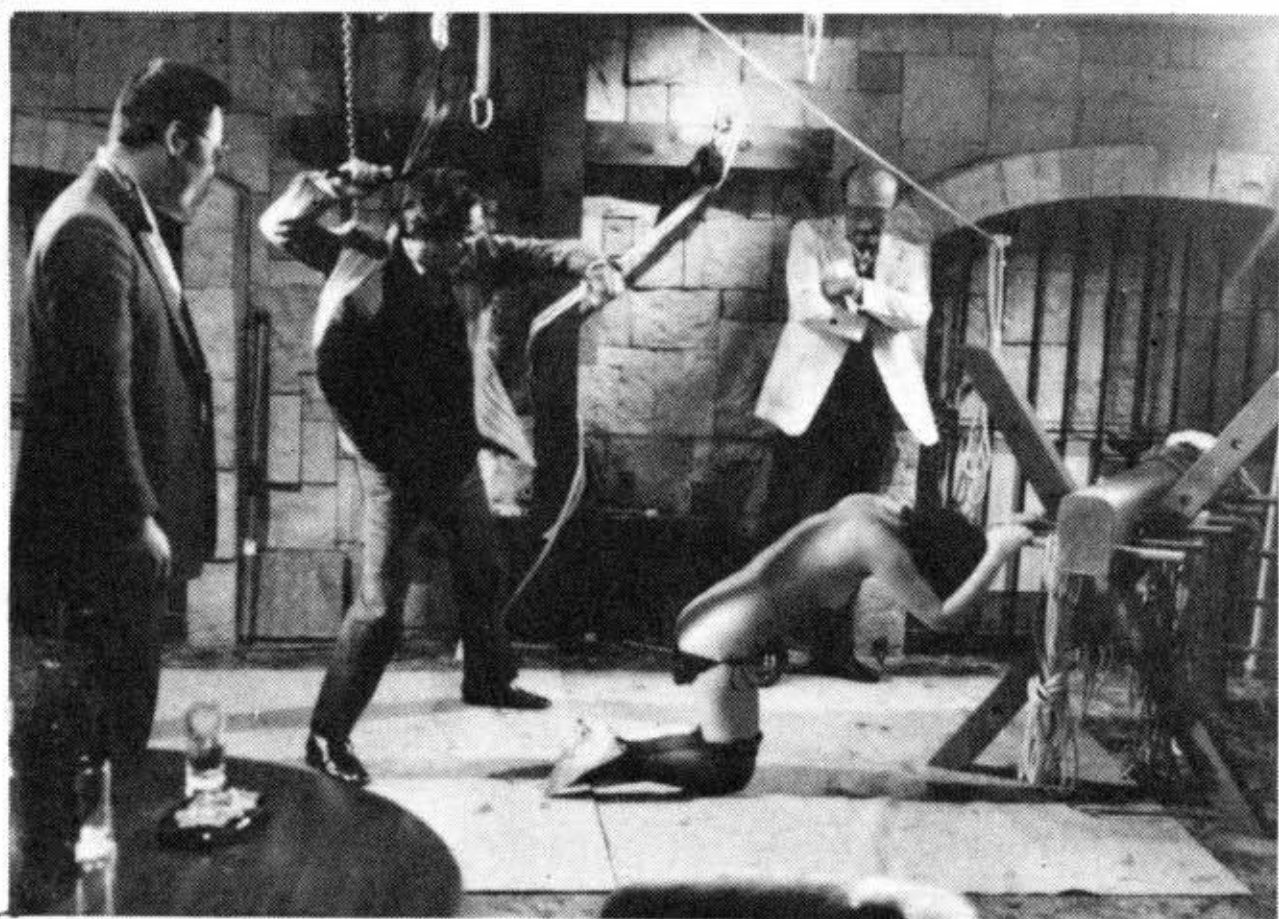
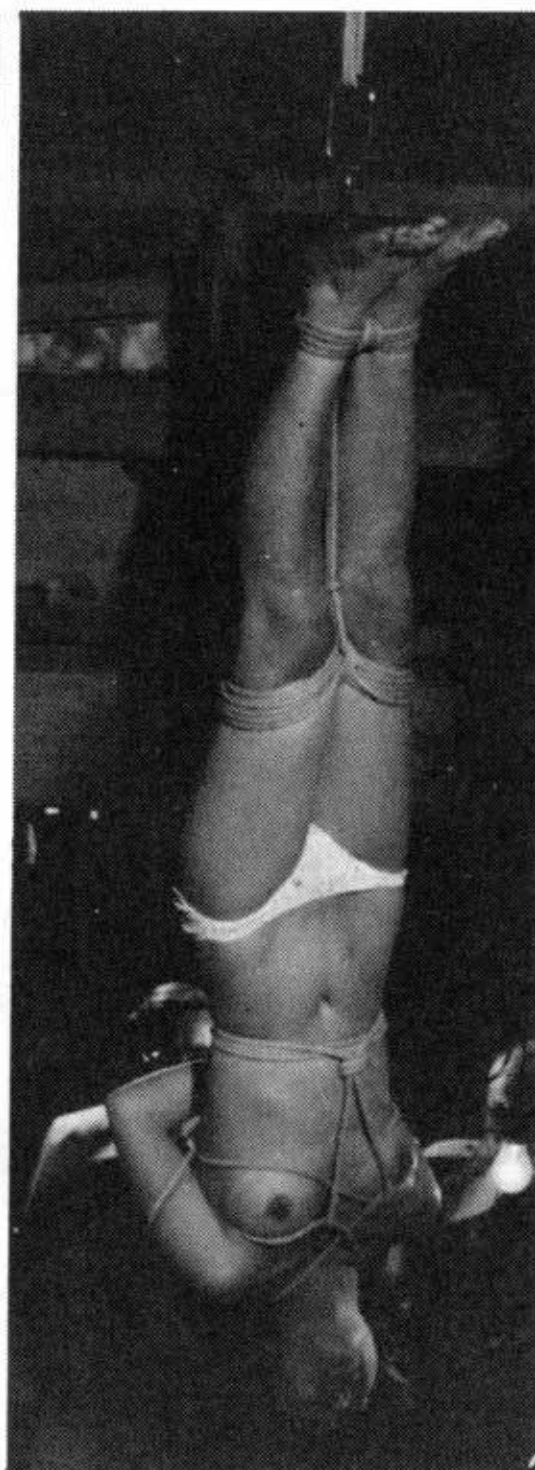
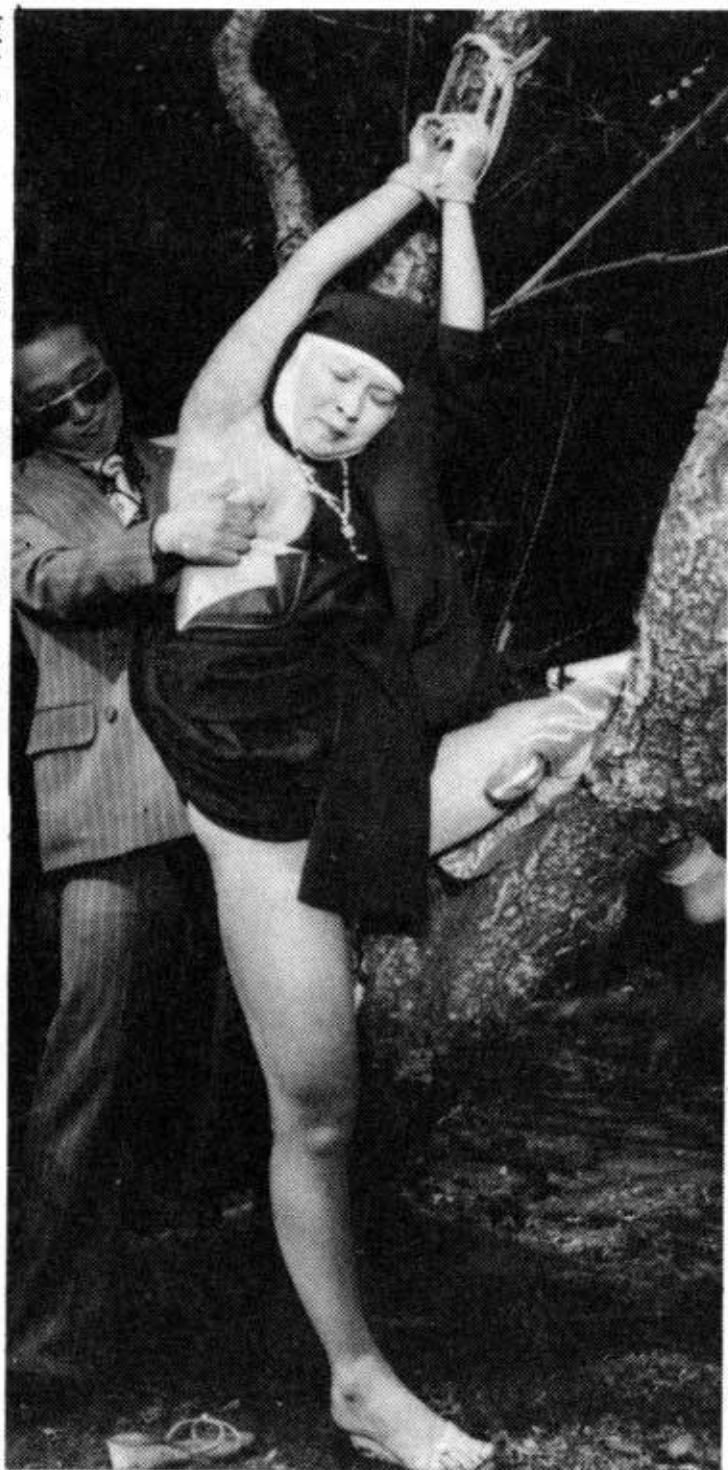
なにしろ「夫人モノ」ではネツの入れ方も違う鬼六センセイ自ら陣頭指揮の撮影だけに、ホンモノのマゾ女になるまで責め



抜けッ、とSM映画を得意とする渡辺護監督の叱咤がすまじい迫力で俳優陣やスタッフらの頭上に落ちる。結局、徹夜で撮影しても満足できず、翌日もエンエンと責めシーンの連

続である。台本があるにはあるが、鬼六御大のヒラメキで即座に変更、お蔭で主演女優、志麻いづみはヘアも剃り落されてマゾ女を狂演、他の女優陣もマゾ女になりきっていまし

た。3月公開予定。

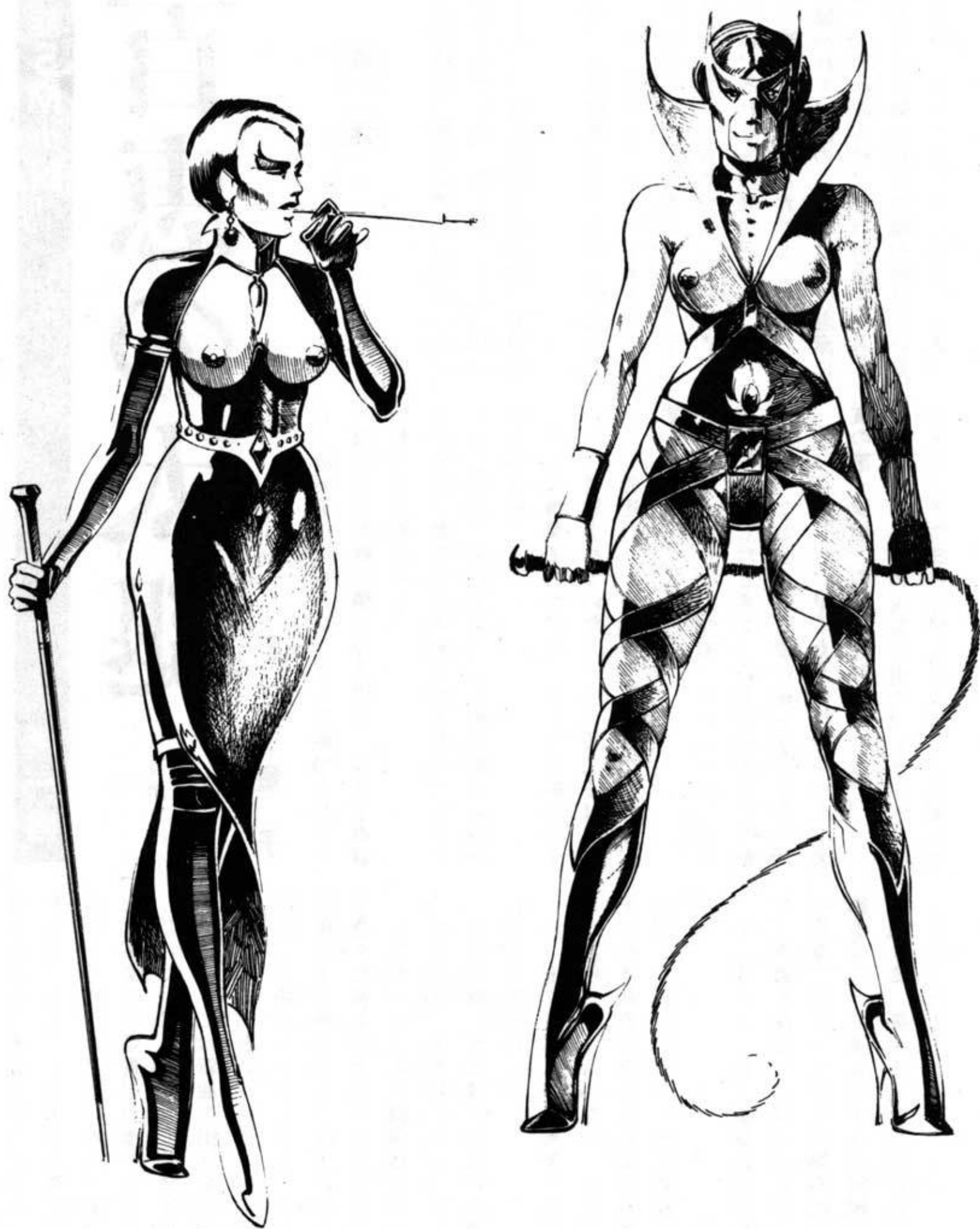






# 黒衣のサディスティン

黒い革衣裳の猛女が鞭を持つと……





# 百恵の太腿

笛吹童子

疾走

夜の高速道路を、柳田留美子は郊外へ向って愛車を走らせていた。夜といっても、陽は沈んだばかりで、外はまだその余熱で充分暖かい。

目的地は、今度移籍することになったCB Aレコードの、チーフプロデューサーである酒田政義の別宅だった。彼女が、デビュー以来十年も所属していた東洋レコードを移る気になったのは、それなりの理由がある。

かつて天野マリや南田さおりとともに“三人娘”と騒がれて、他の二人が数年で急激に人気を失って忘れ去られ、また引退したあと、留美子だけは第一線で活躍を続けている。それは、他の“カワイ子ちゃん歌手”と違っ

て、留美子にはしっかりと歌唱力があり、基礎的な力の他に踊りや芝居もこなせる素質があったためである。

さらに、華やいだ美貌や恵まれたプロポーションなど、どれをとっても他の歌手にひけをとらない。

そんな留美子だが、近ごろヒット曲からすっかり見放されていた。それを留美子は、レコード会社のセールスの不熱心さのせいだと思っている。

思えばデビューの翌年、大ヒット曲“北の花嫁”を出したときが、彼女が歌手として絶頂にあったと云える。春に爆発的に売れた“北の花嫁”は、早くもその年のレコード大賞の第一候補との下馬評が高かった。

実際、留美子の人気、実力、レコードの売り上げ、また曲の完成度にしても、大賞に充

分ふさわしい名曲といってよかった。そして、もし、レコード大賞の投票が十一月に行われていたら、間違いなく留美子の受賞が決まっただろう。だいたいこのレコード会社も、十一月過ぎには新曲を出さないのが通例である。というのは、その時期に出した曲がヒットしても、それが翌年にまで跨がると、年末に行われる色々な賞を取りにくくなるためだ。したがって、他に競争相手のなかったその年、上半期に大ヒットした“北の花嫁”が大賞をとるのは間違いないと思われた。

が、十二月に入って異変が起った。ここ数年ヒット曲のなかった中堅歌手あき奈美の出した“喝采の夜”が大ヒットとなり、一気に混戦となった。

十二月三十一日、番狂わせが起った。勝敗を決したのは、二つには“北の花嫁”のヒットがその年の前半で、師走に入って連日のように有線放送で流れる“喝采の夜”の前に色褪せてしまったこと。もう一つは、この

芸能界のボス酒田はベテランスター柳田留美子の豊熟した肉体を貪りながらも人気絶頂期に引退・結婚した百恵の太腿に熱い思いを馳せる

曲で久々に第一線にカムバックした奈美に比べ、留美子はデビュー二年目で、これからまだ何度も可能性があるからという、多分に感情的な要素が左右したのだった。いわば貫禄負けといったところだった。

当時、留美子は二十歳。  
(まだ若いんだし、チャンスならいくらでもあるわ)  
と彼女自身思った。  
たしかにその後、留美子は何曲ものヒット

を飛ばした。が、いずれも“北の花嫁”を上回ることはできなかった。  
(いつかきっと、いい曲にさえ当たれば)  
そう思っているうちに十年が立とうとして





近ごろでは、レコード会社の方も以前のよ  
うに力を入れて留美子を売ろうという気持ち  
が薄れている。それが留美子には、不満でな  
らなかった。

そんな時に持ち上ったのが、CBAレコー  
ドからの移籍の話である。一般の会社員が、  
長年務めた会社を辞めて、他のところへ移る  
のと同様、歌手の場合も移籍となると相当の  
勇気と決断が必要だった。

が、留美子にほとんど躊躇う気持ちができ  
なかったのは、プロデューサーの酒田からの  
熱心な誘いのせいである。酒田といえば、こ  
れまでに何人もの歌手を育て上げ、その手腕  
はCBAはもちろん、この世界では一目置か  
れている男である。

今から一年半ほど前、日本中を騒がせて、  
結婚とともに引退した、あのスーパースター  
山内百恵もまた、彼が手塩にかけた一人だっ  
た。

正式な契約を交わす前日、留美子はだから、  
酒田に体を求められても拒まなかった。場所  
はやはり酒田の別宅、今度の移籍の話が持ち  
上ったときから、留美子にその覚悟はできて  
いた。十年も芸能界にいと、こんなことも  
常識として考えられるようになる。むしろ、

何の要求もされなければ、本当に自分を再起  
させる気があるのかと、疑ったことだろう。

## 珍客

「あとで客が一人来ることになっているんだ」  
バスルームからタオルを巻いて出てきた留  
美子に、酒田が云った。

酒田の座っているソファの上には、留美子  
の着ていた衣服や下着が散らばっている。先  
ほどブランドーを呑みながら、酒田が一枚一  
枚脱がしたのである。

酒田は、留美子の自慢のゆたかな乳房の先  
を咥え、同時に下腹の翳りの下をまさぐって  
きたが、

「先に体を洗わせていただけじゃない」

留美子が頼むと、あっさり許してくれた。  
たとえ何度も、を許した相手でも、汗と分泌  
物に汚れた体を抱かれるのは、美人歌手とし  
てのプライドが許さない。

「お客さん？ 誰ですの」

アップにした髪を解きながら、留美子は艶  
めかしい腰つきで、酒田の向い側に腰を下し  
た。ピッタリと膝は閉じているものの、バス  
タオルからにゅっとこぼれる象牙色の、熟れ

きった太腿の谷間からは、今にも羞恥の翳り  
が見えそうである。

酒田は、チラと太腿の付根に眼を走らせな  
がら、

「例の計画の仕掛け人さ。ほら、こいつを見  
たまえ」

と云って、数冊の週刊誌を差し出した。

開かれた頁には『新浦百恵さん、新婚一年  
半の心境を語る!!』とか、『智和、百恵に待  
望の赤ちゃんが?!』とか、『百恵さん、カム  
バックへの計画を本誌に告白!!』などと、仰  
々しい見出しの記事が載っている。

もちろん全て注目を引くためのマユツバな  
記事だが、驚くのは引退して一年半立つとい  
うのに、いっこうに衰えないその人気である。  
例え絶頂期に引退した大スターとは云え、時  
間の流れとともに忘れられるのが普通である  
が、山内百恵に限って云えば二年後の今も全  
週刊誌が以前に増して大騒ぎしている。とい  
うことは、彼女が世間の人々の関心を引くだ  
けの魅力が未だにあるという証拠だろう。

留美子は、パラパラと頁を捲りながらそれ  
となく酒田の表情を窺った。酒田と今のよう  
な関係になってから、彼女は何度となく山内  
百恵をカムバックさせる計画があるのを、彼

から聞かされている。留美子には、計画そのものよりも、そのことを自分に話す酒田の腹を、計りかねていたのだが――。

「じゃあ、本当におやりになるのね」

「うん、今がチャンスなんでね」

酒田はグラスの中身を空けると、

「そこで君にも一つ、力を貸して貰いたいんだ」

留美子はギクリとなって、酒田を見た。

「私が？」

「そう。と云っても、大したことじゃない。

ただ、君のその魅力的な体を貸して貰いたいのだ」

「何をするんですの、いったい」

「うん……ま、そのことはやつが来たらゆっくり話そう」

酒田はそう云って立ち上ると、湯上りの淡いピンク色に染まった留美子の横に腰掛け、「君に悪いようにはしない。計画がうまく行けば、君の欲しいものは何でも手に入るだろう。それとも私の云うことが信じられないかね」

銀縁の眼鏡の奥で、眼が不敵に光るのを見ると、留美子はあわてて頭を振り、「いいえ……何でもおっしゃって下さい。」

私、前の会社を退めるとき決心したんです。これからのことは全て先生にお委せするって。そう決めたときから、留美子は先生のものですわ」

と、甘えるように云った。

「いい覚悟だ。君なら三年以内にどれか一つは、大賞をとれるだろうよ」

そう云うと、酒田は乳房の先に引っかかっていたバスタオルを、はらりと剥いだ。

## 肉悦

初めの数回はともかく、近ごろこの別宅を訪れるのはたんにチーフプロデューサーにコネを作るためばかりではないことを、留美子ははつきりと感じていた。

骨肉も溶け出すような官能のよろこび、とでも云うのだろう。酒田とのセックスで、留美子は今まで味わったことのない、深い女のよろこびを知ったのだった。

もちろん、それまで何人かの男と恋愛し、ベッドではそれなりに満足していた。それが酒田と関係を持つようになるなり、これまでのセックスの味けなさを思い知ると同時に、女として一気に絢爛と花開いたのである。

留美子はベッドの上に、仰けに押し倒された。両手首は、背中で細い革紐で縛られている。酒田はこの種の遊戯を好んだ。留美子の手を自由を奪ってにおいて、脚を開かせ、卑猥な言葉を浴びせながら、体をまさぐり、ときには張型で責めるのである。

初めはさすがに、恥ずかしさと屈辱感に抗ったが、最近になって酒田の発する言葉や、四肢の縛めが妖しい刺戟剤となっていて、ことに、留美子は気づいていた。それを恥じて戒める気持ちはあるのだが、それ以上に被虐の快美のうねりは圧倒的だった。

「さ、自慢のアンヨを開くんだ」

酒田は巨大な責め具を手にして云った。もちろん酒田は、この成熟した美人歌手がマゾヒスティックな性癖の持ち主であることを見抜いている。

肩に顔をうずめた留美子は、切長の眼を伏せたまま、何か耐えるように、長い、形のよい両肢を開いていった。下腹の淡い翳りの下から、まだ瑞々しい薄桃色の花園が顔を覗かせる。

「気どらずに、もっと堂々と開くんだ」

酒田が両膝に手をかけると、留美子は、「ゆ、許してっ」



と声を引きつらせながらも、開かれるまま羞恥の花園を露わにした。かつて舞踊で鍛えただけに、体の柔軟さは素晴らしい。

酒田はさらに、枕を留美子の腰の下に敷いて、下肢に大胆な角度を持たせた。

素晴らしいのは、体の柔らかさばかりではない。三十に手が届こうというのにいよいよ熟れ始めた腰の線、象牙色のムッチリと脂肪をのせた両の太腿、さらにその付根でふっくらと息づく縦長の裂条線――。

「せ、先生、そんなにじつとご覧にならないで」

酒田の粘っこい視線を感じてか、留美子は肩に頬をうずめたまま、モジモジと優美な肢体をくねらせる。

「羞かしいのか？ でも、こうして見られると感じるんだろう」

「そ、そんな、嘘です」

「隠しても駄目だぞ。お前には露出症の気が

あると、私は睨んでる」

そう云うと、酒田は指で意外に慎ましい翳りの下の、淡いピンクの扉を押し開いた。

「あっ――」

たちまち留美子の腹部がピクッと弾み、冴えた美貌は紅潮した。

酒田の指がくつろげた花園の中は、すでにしっとりとした熱い蜜を滲ませている。

（いよいよ本物のマゾになってきたな）

と思いながら、蜜を指先にすくうと、

「見たまえ、まだ何もしないのに、ただ縛られてのぞかれただけで、こんなに濡らしているじゃないか」

留美子の眼の前につきつけて云うと、酒田は蜜を形のよい鼻梁になすりつけてやった。

もともと酒田には、美しい高貴な女をいたぶり、辱しめて悦ぶ性癖がある。ことに、ブラウン管や銀幕などで人気のある歌手や女優を相手にするときに、最も燃えるときだった。

普段清純派と呼ばれ、また近づき難い美貌

と気品を持った彼女たちを、黷り、辱め、その仮面を一枚一枚剥いでいくことに、この上ない歓喜を覚えるのである。そして実際、自分の地位を利用して、これまでに何人もの女を欲望の標的としてきた。

柳田留美子もその中の一人だが、彼女の場合これまでの生贄の中でも、最も彼の好みに合った一人と云ってよい。

その美貌や、恵まれた優美で豊麗なプロポーションはもとより、彼女の一流歌手としての実績、さらにやや嬌慢で気丈な性格が、酒田の気に入ったのである。

そのツンと澄まして、お高くとまったプライドの高い柳田留美子は今、酒田の眼の前で一糸まとわぬ裸身を晒し、さらに両手を縛られたまま、自慢のスラリとした両肢を、ストリップの特出しさながらに開いて、生々しい羞恥をさらけ出している。

留美子のゆたかに張った乳房を、指と唇と舌で充分に弄んだ酒田は、唾液にまみれたピンク色の乳頭を、歯の間で柔かく噛んで硬さを確かめてから、愛撫の手を下半身へ移した。大胆に割られた下肢の付根では、薄っすらと縦長の口を開いた花園が、触れなば落ちん





といった状態に濡れ、ムンムンと成熟した女の色香を匂わせている。

酒田は逞しい太腿に手をかけながら、張型を豊潤な肉の層の中へ押し入れていった。

「さ、ステージで歌うように、いい声で泣いてみろ」

とからかうように云って、酒田は張型を粘っこく動かし始める。

すでに酒田の巧みな愛撫と、下品な言葉で官能の芯を妖しく燃え立たせていた留美子は、責め具が押し入るなり、たちまち美貌のスターの仮面を脱ぎ捨てた。

次第に早くなる張型のピッチに呼応して、留美子の口からは、堪えていた甘美なすすり泣きが、特徴ある高い透き通った声音で洩れ始める。が、この五十がらみのしたたかな男は、もっと残酷だった。

留美子をいったん頂上近くまで追いつめておきながら、留美子が昇りつめようとする一歩手前で、スッと引き抜いたのだ。

一瞬何が起ったのかと、眼を開けた留美子は、酒田が引き抜いたのを見せびらかして邪淫に笑うのを見て、

「せ、先生、嫌っ、嫌っ」

「欲しいのかね、こいつが」



酒田が張型を鼻先へ持つていくと、留美子は喉を鳴らして頷いた。

「柳田留美子ともあろう美人が、はしたないと思わないのか」

酒田は、陰険に瞳を輝かせて云う。

「だ、だって、先生、我慢できないのよ」

羞らいながらも、燃え上る官能の焰に煽られ、留美子は脂汗に光る肢体をブルブル震わせて哀願する。

「お願い、意地悪しないで」

「それなら、ちゃんと私に頼むんだ。私、柳田留美子は淫乱な牝犬です。どうかその嫌らしい道具で可愛がって下さい、とな」

「そ、そんな——」

さすがに留美子は躊躇ってみせたが、酒田が嫌ならいいんだとベッドを降りようとする、あわてて、

「ま、待って、待って下さい。云いますから」

普段の留美子なら、口が裂けても云わないはずなのに、こうして両手の自由を奪われて、全裸の体を弄ばれるうちに、身心が痺れるような甘美な戦慄を覚えるのだ。

すっかり観念したのか、留美子はその切長の眼で酒田の握る張型を見つめると、屈辱の言葉を口にした。

「わ、私、柳田留美子は、淫乱な牝犬です。ですから、先生、どうかその道具で、留美子をうんと可愛がって下さい」

云い終るなり、ああと恥じ入るような溜め息をついて、肩に頬をうずめた。

再び張型が留美子の熟れきった体内を動き始めると、留美子はさらに烈しい甘美な啼泣を洩らした。

太い責め具を両肢の付根に刺し、引きながら酒田は、しかし、これが山内百恵であったなら、思わずにはいられなかった。

手塩にかけて育ててやったにもかかわらず、何度誘ってみても、一度も自分になびかなかった女——そして今は、結婚と同時に引退して、文字通り手の届かぬ人妻となってしまうた。

が、それで諦めたわけではない。それどころか、百恵に対する思慕の念は日一日とつり、それが今度のカムバック計画を彼に作らせたと云ってもよかった。

（待っているよ。今年の秋までには必ずカムバックさせて、ひともうけさせて貰うから。そのとき新浦百恵は、もちろん、私の奴隷になっているのだ）

絶頂が近づいたのか、留美子は上気した面

を揺すり、張型に合わせて腰をくねらせながら、さらに高い声で喜悦に泣いた。そうして、にわかに声を詰まらせたかと思うと、その刹那、

「行くっ——」

咆哮に近い声を張り上げて、ググッと張型を啜え込んだまま、身も心も溶け合うようなエクスタシーを極めた。

玄関のチャイムが鳴ったのは、その直後だった。

（来たな）

振り返った酒田は、胸の中であんなように呟いた。

艶熟

これまでの二十三年間の人生で、この一年半ほど幸福で、充実した楽しい日々はなかったように、百恵は思う。あのファイナル・コンサートが終って、芸能界を引退してから、ようやく自分の本当の人生が始まったように思われるのだ。

最後の曲を唱い終えて見せた涙は、だから、離別の哀しみゆえでなく、うれし涙だったのである。実際、二人だけの新婚生活は想像通

り、いやそれ以上に素晴らしい夢のような毎日だった。

もちろん、それは夫である新浦智和との深い愛情の絆のおかげである。が、それと同時に七年間、追いかけて回された殺人的な仕事のスケジュールから抜け出せたことも、忘れてはならない。

あの頃、毎日三時間の睡眠時間が今は倍以上になった。マンションの一室に一人にいるときも、愛する者の帰りを待つ喜びを知った。そんな平凡なことが、今の百恵には新鮮な発見であり、喜びでもあった。

芸能界という一見華やかに見え、実は虚飾だらけの汚らしい世界に比べたら、今の生活の何と穏かで美しいことだろう。それもこれも、結婚と同時に引退という道を選んだからこそ、得られたのだ。

その日は、智和が夏に封切られる映画の撮影で、京都へ出掛ける前日だった。

「ハワイで買ってきたバッグはどこへやったかな。明日は朝早いから、今のうちに仕度しておかないとね」

そう云って、台所で百恵が食器を洗っているところへ、智和が顔を出した。

「あら、それならもう私がやっておいたわ。

居間に置いてなかったかしら」

振り返って百恵が云うと、

「そうか、済まないね。君はほんとによく気のつく嫁さんだ」

新妻となって近ごろ一般と色っぽくなった百恵の後ろ姿にそそられ、智和は近づくなり、背後から体を押しつけていった。そうして、両手で、柔かく胸のふくらみを揉みながら雪のように白い首すじに唇を押しつけ、

「愛してるよ」

耳もとでささやいて、軽く耳朵を噛んでやる。

「あッ、駄目よ、今は……」

百恵はコーヒークップを洗う手を休めて、くすぐったそうに首をすくめた。

「いいじゃないか、明日からしばらく会えなくなるんだから」

そう云って、さらにうなじに鼻をうずめながら、ズボンの前をまるやかなヒップの挟間に押しつけ、片手でスカートの中をまさぐると、

「ウフフフ……駄目よ、あなた。あとにして頂戴。それより、忘れ物がないかどうか調べなくていいの」

智和の唇をかわしながら、百恵はしなしな

## 新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集長宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

東京都中央区銀座1の22の10

銀座ストークビル・5F

芳友社・編集長



と腰を揺すった。

「わかったよ。続きはベッドの中だ」

あっさり手を引いて、台所を出ていった。

この満ち足りた生活で、一つ不安な点は、彼の仕事に関してである。昨年彼が主演したアクションものの映画が、興行的に不振だっただけに、今度の仕事にかける彼の意気込みは、並々ならぬものがあつた。

例えば前回の映画の批評に、こんなものがあつた。

「百恵さんと結婚して、これからは役者としての幅を拡げていきたいという、新生智和の汚れ役への挑戦映画といったところだが、結果から云うと失敗だったようだ。これは新浦

自身の責任ではないが、彼の美貌は今回の一

匹狼風の役にはいかにも甘すぎる。それに加えて、ナレーションに深みがない。新浦も三

十になったのだから、いつまでも若い女の子のアイドルでいるわけにもいくまい。これから、いかに本物の演技力をつけるかが、役者として大成するか否かの別れ道になるだろう。

智和ファンならずとも、心配してしまうのは、小生未だ消えることのない、大勢の百恵ファンの一人だからである」

妻という立ち場を度外視して、第三者の眼で見た場合、必ずしも中傷とは云えない指摘であるだけに、百恵の心中も穏かではなかつた。

明日から半月ばかり会えなくなることもあって、その夜の夫婦の契りはいつになく烈しかった。

舌と舌を絡ませてキスをくり返したあと、結婚して一段とゆたかになった乳房を揉んでから、智和はパンティのゴムに指をかけた。新妻らしいネグリジェの色と同じ、淡いブルーのパンティには、すでにしつとりと蜜が染み出している。

ムッチリとこぼれんばかりに太く、逞しい太腿の内側を、舌と唇で愛撫すると、智和は薄いパンティをスルリと剥がした。

立て膝にした両肢を、やわらかく押し開く。下腹の翳りは、濃い漆黒の纖毛で、逆三角に





生い茂り、その下では淡紅色の唇が、こんもりと盛り上った頂きの中央に、ピッタリと口を閉じている。

初めて百恵の体を抱いた頃に比べると、さすがに成熟度が違う。当時のそれが青い蕾だとすれば、今はその固い蕾がふくらと女らしく花開いたといった按配である。

成熟したのは何も花園ばかりではない。大きくもなく、小さくもない形のよい両の乳、見事に熟れた腰の線、そして何より美貌に一段と磨きがかかった。

鼻先を盛んな翳りに擦りつけながら、智和は指で淡紅色の羞恥をくつろげ、舌を果肉に

さし入れてかき回した。しっとり湿っていた百恵の羞恥は、たちまち熱湯のような蜜を溢れさせた。さらに、智和の舌先が、女体で最も敏感な真珠のような固まりを、チロリと舐める。

「あっ——」

染みわたる快美のうねりに、百恵は無意識のうちにうっとり眉根を寄せ、舌で上唇を舐めていた。

明日からしばらく会えないということもあるのだろう。その夜の百恵はいつになく積極的だった。

智和のそれがまだ充分昂まっていなかったのを

見ると、体を起して片手を添え、ふくよかな唇を開いて口に含んだ。

顔を上下に動かしながら、昂った幹の裏側へ舌を這わしてやると、智和は爪先を反り返らせて、呻いた。恋人時代から口による愛撫の経験があるので、百恵も智和の弱点を充分知り尽している。それに、こうして智和の幹を愛するのが、百恵は好きだった。

仰けに寝た智和の顔を跨ぐ恰好で、百恵は舌を使いながら愛しい昂りを吸い続けた。それに応えるように、智和も百恵の花園へ舌を這わせてくる。すでに滴るばかりの蜜を湛えた花卉は、智和の舌が触れるなり、ピクピク



とわなないて、トロトロと愛の蜜を滲ませる。さらに、舌でプックリと充血した真珠を、コロコロと転がしてやると、百恵の太い、みっしりした太腿が智和の顔を、強く挟みつけてくる。

あやうく果てそうになるのを堪え、智和は百恵を制して、入れ代った。

百恵は、立て膝にした腿を自ら開いて、ぐったりと仰けに寝ている。その付根では、漆黒の飾り毛に覆われた淡いピンクのはざまが、キラキラと内部の襞を蜜に濡れ光らせている。「あなた、早く、きて」

お願いと、切長の濡れた眸を薄っすらと開いて、思わず口走る百恵。

智和と撃るなり、百恵の太腿は智和の腰に巻かれ、律動に合わせて腰が淫らにうねった。

「いいかい、もう」

腰を使いながら、智和が訊ねた。

「ま、待って。まだ、もう少し」

百恵も、込み上げる法悦に迫いすぎるように、懸命に腰を揺する。

「も、もう我慢できない」

そう云って、智和が熱いクリームを腹の底へ放ったときに、百恵も智和の首を抱いて頂上に達した。

恐らくこのときの二人に、不幸の影が迫っていることなど、微塵も考えられなかったに違いない。が、すでにその忌わしい影は、マンションのドアの外まで近づいていた。

あくる日、智和を送り出し、掃除、洗濯を終え、昼食を一人で食べ終えたときだった。買い物へ行こうと、服を着換えていると、玄関のチャイムが鳴った。

「どちら様でしょう」

と、部屋のインター・ホンで訊ねると、「××運送の者ですが、新浦智和様に荷物が届いてます」

という声が返ってきた。

「今、行きますから」

百恵は、鏡をのぞいてから玄関へ赴いた。念のため覗き穴からのぞいてみると、三十すぎの緑色の服を着た男が、帽子を被って立っている。男の横には、四角い大きなダンボール箱が置かれている。

未だに、取材にくるしつこい記者がいるので、どうしても来客に対しては用心深くなってしまう。何の荷物か、わからないが、夫のものなら受け取らないわけにはいかない。鍵を外して、ドアを開けてやった。

「印鑑をお借りしたいんですが」

男は、玄関に大きな荷運び入れると、領収書のようなものを出して云った。

「ちよっとお待ちになって」

そう云って、百恵は部屋に戻った。

筆筒の引き出しを開けて、印鑑を取り出すとしたときだった。

不意に、背後に人の気配を振り返ると、緑色の服を着た男が立っていた。

何か云おうとした瞬間、口を白いハンカチのようなものでふさがれた。

「ううっ——」

眼を大きく見開いて、身をもがかせたが、ハンカチに染み込んだ薬を吸うと同時に、百恵の意識はすつと暗闇に落ちていった。

(以下次号)

## SMモデル募集

あなたのおひまな時に、モデルのアルバイトをしませんか。一時間につき一万円お支払いします。応募の秘密は厳重に守りますので、写真同封のうえ手紙で連絡して下さい。  
連絡先 東京都中央区銀座一の22の10、ストークビル501号 風俗資料保存会宛。

投稿作品 襲われた母娘

悪太郎





# 標的は牝犬

異常なほどの女好き、しかも虐め抜くことに  
悦びを感じる変質者——暴力団組長のドラ息子  
に標的を定められた人妻・夏子の悲運!

火夏圭介



英次は一滴残らず注入した。空らになった浣腸器を手の  
中でころがしながら、へらへらと笑う。

「おいしかったろう、奥さん、へへへ……」

英次の狂ったような眼が一層ギラギラと光り、淫らな色  
を増している。ついに夏子に浣腸してやったという興奮で、  
爆ぜんばかりに昂ぶっているのだ。

数多くの女を襲い、浣腸してやったが、これ程までに気  
持ちが昂ぶった女はいない。英次にとって夏子は、文句の  
つけようのない極上の獲物だった。

その夏子は、浣腸という思いもしない羞かしめを受けた  
ショックで、すすり泣きながら顔をふり続けている。気も  
狂わんばかりの汚辱と屈辱感に打ちひしがれているのだ。

「へへへ、出したくなったらいつでも言うんだぜ、奥さん」  
英次がオマルを見せながら言った。子供の由加が使って  
いたオマルである。

夏子の顔が、すうっと蒼ざめた。英次はそのオマルに排  
泄させる気だ。たとえ愛する夫であっても見せられない行  
為を、観察する気でのいるのだ。

「そ、そんな……そんなものはいや、いやよ。おトイレに、  
おトイレに行かせてッ」

夏子はひきつった悲鳴をあげた。もがき起きようとして、  
あわてて全身を硬直させる。荒々しい便意が急速にかけ下  
ってきたのだ。

「あ、あッ……ああ……」

オマルを見せつけられた事で、夏子は一層荒々しい便意  
を意識した。寒気が背筋を走り、腸がゴロゴロと鳴った。  
必死にすぼめているアヌスが哀れである。

「あ、あッ、どう、どうしよう……く、くるしいわッ」

「へへへ、苦しけりゃひり出せよ、奥さん。じっくり見て  
やるからよ」

「そ、そんな……いや、いやよッ……ああッ、縄をほどこ  
いてッ」

夏子はブルブルとふるえ出した。ジットリと油汗もにじ  
み出してくる。

「お、お願いッ、おトイレに行かせてッ……」

「駄目だ、俺は奥さんがどんな風に出すのかを見てえんだ  
よ、フッフ」

英次はせせら笑った。夏子に浣腸し、その排泄を見る事  
を、英次は夢にまで見てきたのだ。

「ひどい、ひどいわッ……狂ってるわッ」

「フッフ、ほんとでもいいな。いやでも奥さんは俺に見せ  
ることになる。時間の問題だぜ、奥さん」

「い、いやあッ、ここでは、ここでなんていや、いやッ」



ドス黒い絶望感が夏子をおおっていく。荒れ狂う便意は、もう、限界に近づいている。悪感が背筋を絶え間なく走り出した。

「う、うッ、くるしいッ……た、たすけてッ」

出ちやうわ……そう言わんばかりに、夏子の泣き声がうわずった。

英次は意地が悪かった。必死にすぼめている夏子のアヌスに指を押しつけて、ゆるゆるともみこみ始める。

「おめえらも、奥さんをリラックスさせてやりな、へへへ、ひり出す気になるようによ」

英次に言われて、夏子を押えつけていた会田と堂島の二人も、夏子のからだに手を這わせた。乳房をわしづかみにしてもみこみ、はちきれんばかりの下腹をもみゆする。

「あ、あッ、いやあ……やめて、やめてッ」

「へへへ、出しやすいようにしてやってんじゃねえか。ほれ、やるんだ、奥さん」

「あ、あッ……け、けだものッ」

英次にもみこまれるアヌスが痙攣し出した。今にもほとばしらせるかのように盛りあがってきたかと思うと、キュッとする。

もう縄をといてやっても、トイレまでは行きつけまい。

「やれよ、奥さん」

オマルをあてがいながら、英次は冷たく言った。夏子の

アヌスがゆっくりとせりあがってきた。汚辱の瞬間が始まろうとしている。

「あ、あッ、見ないで、見てはいや、いやあッ……」

絶叫にも似た叫びを夏子はあげた。出口へ向ってひしめきあう便意は、もう、自分の意志では押えられなかった。

「いやあ、見ないでッ……あ、あッ、いや、いやあッ」

号泣が噴きあがる。次の瞬間、耐える限界をこえた激流がオマルの中へほとばしっていた。

英次がくい入るようにのぞきこんでいる。会田と堂島の二人ものぞきこむのが夏子にわかった。一生人目にさらすことはないであろう秘められた行為をのぞかれるおぞましさに、夏子は泣きながら両眼を閉じた。

いくら止めようとしても、一度ほとばしった荒々しい便意はどうにもならない。のぞかれるおぞましさと羞かしさ、だが、強烈な便意がほとばしる解放感と心地よさ……それが入り混じって、夏子はわけがわからなくなっていく。

「ちくしょう、たまらねえ……堂島、張型だ。張型をよこせッ」

英次はひきつった顔で叫んだ。

また英次の悪い病気が始まった。しょうのない坊っちゃんだ……とばかりに堂島は英次を見た。英次は興奮するとみさかいがなくなり、残酷なまでに女を責めまくるのだ。女体の状態、限界などおかまいなしである。

「何をグズグズしてやがる。早くしねえか、堂島」

「坊っちゃん、ムチャはいけませんぜ」

堂島はそう言いながら、持ってきたカパンの中からコケシ型のバイブレーターを取り出して、英次にわたした。

英次はスイッチを入れた。ブーンとうなりながらバイブレーターが振動し始めた。頭の先はクネクネと蠢動する。

「いやあッ……そ、そんなもの、いや、いやよッ」

張型を無理やり見せつけられた夏子は、恐怖にひきつった悲鳴をあげた。

「い、いやあッ」

「へへへ、たれ流しながらこいつをくわえ込むと、もっと気持ちよくなるぜ、奥さん」

夏子の排泄はまだ続いている。腰をゆすって逃げることに出来ない。

夏子には、英次のやろうとする事が信じられなかった。

張型のようないやらしい器具を女に使う事自体が信じられない。なのにそれを、排泄している夏子に使おうというのだ。

「うんと深く入れてやるからな、へへへ」

英次の指が、夏子の女の部分を割り開いた。サーモンピンクの肉襞を剥き出すと、女の最奥めがけて一気に押し入れた。

「ひッ、ひいッ……」

夏子は絶叫し、本能的に双臀をはねあげた。張型は驚ろくほど深く沈んできた。まるで子壺をグイグイ押し上げるほどである。夏子はその深さに白眼を剥いて顔をのけぞらせた。

「いやあッ……こんな、こんなことって……けだもの、けだものッ」

「へへへ、いいだろ、奥さん」

「い、いやあッ」

気も狂うようなすさまじい感覚だった。

子壺を突きあげ、粘膜をただれさせる淫らな振動と蠢動、そしてほとばしり続ける荒々しい便意……夏子は泣きわめいた。

からだ中に痙攣が走り出し、足の爪先が内側へそり返った。

## 二

夏子はうしろ手に縛られたまま、床の上へ泣きくずれていた。浣腸と排泄、そして張型責めと、気も狂うような汚辱にまみれた女体である。その責めの激しさを物語るように、夏子の全身は油をぬったようにヌラヌラと光っている。その妖しく美しい女体を、英次がニヤニヤとながめている。まぎれもなく、予想通りの夏子の双臀であり、反応で





あった。いや、それは予想以上のすばらしさだった。

英次はかがみこむと夏子を無理やり引き起こした。

「へへへ、よかったぜ、奥さん。こんなに興奮させられたのはひさしぶりだ」

夏子を抱きすくめるようにして、英次は言った。双臀をネチネチと撫でまわしてから、指先をもぐり込ませてアヌスをまさぐる。

「いや、もういやッ……そこはいやッ」

ハッとしたように夏子は顔をあげた。顔を弱々しく左右へふる。

「いやじゃねえよ。奥さんは亭主にさえ見せた事のない姿を、この俺に見せたんだぜ、へへへ、その上、張型で気まぐれでやってよう」

英次は意地悪くささやいた。

夏子の泣き声が高くなる。

「言わないで……」

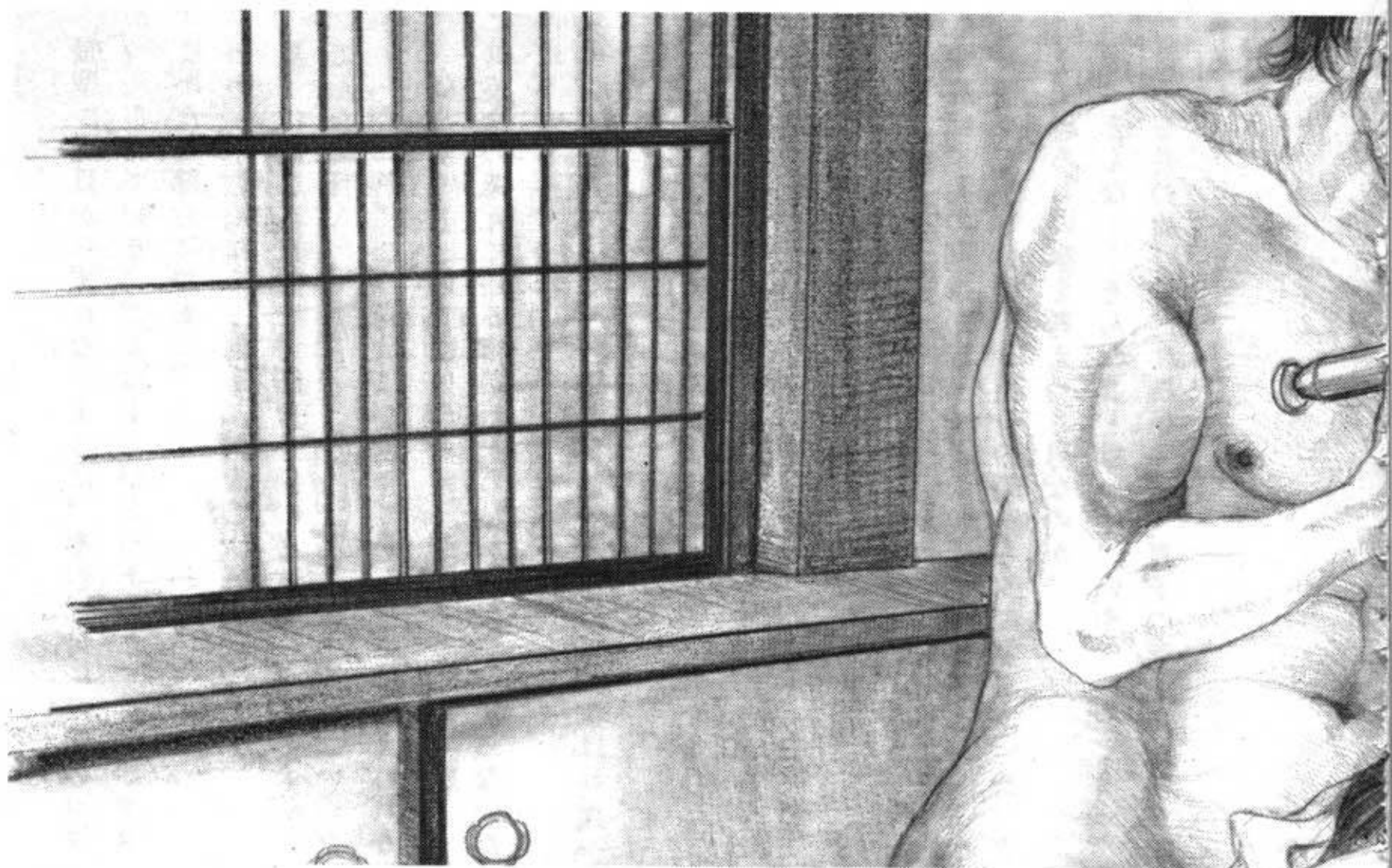
夏子はそう言うのが精一杯だった。

信じられない汚辱の連続に、夏子のからだはあらがう力も意志も失なったようだ。何かが夏子の中で崩れ落ちたのだ。

「お、お願い……早くすませて……」

「早くすませるって、何をだい、フッフ」

英次は夏子が何を言いたいのか知っている。知っていて、



わざと意地悪くとぼけているのだ。

夏子には答えられるはずはなかった。夏子は、今となつてはいっときも早く英次が満足して、帰ってくれる事を願った。だが、女の口から、そんな事を言えるはずもない。

「さあ、立ちな、奥さん、本番はこれからだぜ、へへへ」

英次は堂島と会田に手伝わせて夏子を立ちあがらせた。荒縄を新たに取り出すと、夏子の首に軽く巻きつける。

その縄尻を乳房の上下にくい込んでいる縄の真中へとタテに巻きつけ、更に下へおろすとヘソの所でからだを一巻きして太腿の間へ通す。女の肉の合わせ目の間を割るようにしごいて食い込ませ、背中の方へしぼりあげた。

「あ、あ、あッ」

タテにからだを割る股縄に、夏子は尻上がりに悲鳴を高くした。

気の遠くなるような屈辱と羞恥の縄目だった。女の羞恥に荒縄は容赦なくくい込んできた。おぞましい張型は、まだ夏子のからだに埋めこまれたままである。その張型が、くい込んでくる縄に押されて、更に深く沈んできた。

「あ、あ、こんな……やめて、やめてッ」

夏子は戦慄した。張型は今にも子壺を突き破らんばかりなのだ。こんなに深く入れられた経験はない。

「ハハハ、これでよしと……奥さんにピッタリの縄だぜ」  
英次は笑った。



張型が縄目からずれないように、その部分には縄のコブがつくられている。こぶはもうひとつあった。夏子のアヌスにあたる部分にである。

「ああ……こんな……何を、何をしようというの」

夏子はおびえた顔で、縄尻を持つ英次をふり返った。こんな縄目をかけるなんて、英次は自分を犯す気がないのだろうか。いや、この英次にかぎってそんな事は考えられない。だとすると、いったい何をする気なのだろう……夏子には英次の考えている事がわからなかった。わからないだけに不安もつものだった。

そんな夏子の心の内を見すかしたように、英次はニヤツと笑った。

「へへへ、歩くんだよ、奥さん。牝のように引きまわしてやるぜ、へへへ、心配しなくても亭主が帰ってきたら、こいつをぶち込んでやるよ」

英次は固く張ったズボンの前をさすって見せた。

英次は愛する夫の前で自分を犯す気なのだ。あと一時間もすれば、夫の利彦が帰ってくる。それまで夏子を犯さず、夫が帰ってきてから……夏子の顔から血の気が去った。どこまで恐ろしい事を考えつく男なのか。

「そ、そんな……そんなことはいや、いや、いやよッ」

愛する夫の前で犯される恐怖に、夏子の唇から悲鳴が噴きあがった。

いくら夫であっても、英次一人ならともかく、堂島と会田にあってはたちまち押えつけられてしまうだろう。間違はなく夫の前で凌辱の限りをつくされる事になる。

「や、やめてッ、そんなひどい事はしないで……いや、いやよッ」

「へへへ、人妻は亭主の前で犯るのが一番なんですよ、奥さん、へへへ、さあ、歩きな」

「あんまりだわッ、ひどい……主人の前でだけはいや、いやよッ」

夏子は激しくかぶりをふった。

だが、英次は非情である。ピシヤと縄尻で夏子の双臀をはたくと、追いたてる。

「ひッ……あ、ああ……いやッ」

思わず泣き声が出る。双臀をはたかれる痛さに、たまらず足を踏み出した。よろけるように部屋の中を追いたてられながら歩くのだ。

夏子はみじめだった。英次の言った通り、自分が牝としてあつかわれているのがわかる。足を踏み出すたびに、張型が容赦なくくい込んできた。子壺を痛いまでに突きあげてくる。夏子は突き破られるのではという恐怖におびえた。たまらず立ちどまる。

すると、容赦なく縄尻が双臀にピシッととぶ。夏子は泣きながらよちよちと歩いた。

しかし、突き上げられる恐怖より、夫の前で犯される恐怖の方が大きかった。

「う、ううッ……お願い、主人の前でだけはいや、それだけはかんにんしてッ」

夏子はよろけながら、哀願を続けた。夏子は夫の利彦を心から愛しているのだ。利彦にだけは、みじめな姿を見られたくない。

「うるせえ、さっさと歩けッ」

英次はどなった。縄尻がとんでピシャと双臀が鳴った。

それまで黙って英次のする事を見ていた会田が、ゆっくりと夏子に歩み寄った。

「奥さん、そんなに亭主の前じゃいやかい。言う事をきくなら、やめてもいいけどよ」

会田は表情ひとつ変えずに言った。サングラスが不気味に光っている。

「……………」

夏子は思わず、すがるように会田を見た。

「どのみち、奥さんは犯されるんだ。ただ、今すぐ自分から坊っちゃんに抱かれると言うなら、亭主の前で犯るのはやめてやってもいいんだぜ」

会田がそう言い終ったとたん、英次が顔色を変えてどなった。

「会田ッ、てめえ勝手な事を言うなッ」

「坊っちゃんッ」

英次を堂島がうしろから押えた。

会田と堂島にしてみれば、英次が夏子を亭主の前で犯せば、やっかいな事になる。妻を犯された亭主が黙っているはずがない。夏子だけなら、弱味を握っておけば泣き寝入りさせられる。もめごとは英次の父である組長に厳禁されているのだ。英次のおもい役である二人がのり出すのも当然だった。

「坊っちゃん、いけませんぜッ」

堂島がするどい声で言った。言い返す事を許さない響きがある。

英次は洩々と従った。迫力まけしたというところだろう。

「どうする、奥さん」

黒髪をつかんで顔を上向かせ、会田はきいた。

夏子は無言だ。自分から英次に抱かれる……それがどんなに恐ろしく、屈辱的な事かわかっている。だが、夫の前で犯されるのはもっと恐ろしい。

「早く決めねえと、亭主が帰ってくるぜ」

「ああ……主人の前ではいや……それだけはいやです」  
それが夏子の答えだった。夏子の顔が蒼ざめ、ひきつった。



### 三

股縄もはずされ、張型も引き抜かれた。だが、うしろ手に縛った縄はそのままだ。

英次が裸になって、ベッドの上にあお向けになっている。

夏子がいつも夫の愛を受け入れる寝室である。

「さあ、こいよ、奥さん。ちゃんと自分から受入れるんだぜ」

英次が手招きをして言った。天を突かんばかりのをゆすって見せる。

ハッとして夏子は顔をそむけた。英次は若くたくましかった。そんなものを見せつけられてはためらわずにはいられない。

「どうした、奥さん。坊っちゃんの上へまたがらねえか」

「どうやら手伝ってやらないと駄目のようだな」

会田と堂島の二人が、左右から夏子にまとわりついた。

太腿の裏側に手をあてがって、大きく割り開くと、赤ん坊におしっこをさせるかっこうに抱き上げてしまう。

「あ、あ、あッ」

夏子がおびえた声をあげた。これから始まる事への恐怖を、必死に耐えているのがわかった。それでもからだのふるえだけは、とまらない。

会田と堂島は夏子を、ベッドの英次の上へ運んだ。下ではそそり立った英次が待ちかまえている。

「俺の顔のところへ持ってこい」

英次がうわずった声で命じた。

うつむいている夏子の眼に、英次の顔が入ってきた。ニヤニヤと夏子を見上げるその眼の不気味さに、夏子は思わず息をのんで顔をそむけた。

「へへへ、まったくいい尻の穴をしてやがるぜ……こたえられねえな」

英次は眼の前に生々しく剥き出ているアヌスを見上げながら言った。手をのばすと、指先でアヌスをなぞり始める。ビクッと夏子がふるえるのがわかった。夏子は悲鳴をのみ殺し、両眼を閉じている。

英次はゆるゆるともみこんだ。更に指先で貫こうと、ゆっくり押しつける。指先でぬうように貫いていくのだ。

指先がもぐり込むと、夏子は顔をのけぞらせ、ひいッと息を吸い込んだ。浣腸の直後とあって、繊細な神経は敏感になっている。

「い、いや、そこはいや、やめてッ」

耐えきれず、夏子は悲鳴をあげた。

「ああ、そ、そこはいやあッ……」

「いやじゃねえよ、へへへ」

英次は指をその付け根までねじこんだ。灼けるような熱



さが指をつつみこんでくる。

英次は指をカギ状にまげると、夏子を自分の腰のところへ移動させた。

「へへへ、いいぜ。奥さんを降しな」

英次はそり返っているのをつかんで、狙いを定めながら言った。

会田と堂島が夏子のからだを英次の上へ下げていく。

「へへへ……もうすぐだな」

アヌスを貫いた指で夏子をあやつりながら、英次は誘導した。

「ああ、いやあッ……あなた、あなたッ」

いくら歯をくいしばって耐えようとしても駄目だった。

観念したはずでも、犯される恐怖に愛する夫の顔が脳裡をよぎった。

「いやあッ……あなたッ……」



夏子は泣きわめきながら、会田と堂島の腕の中で悶えた。英次の先が開き切った夏子に触れた。肉の合わせ目に英次が押し入ってくるのが、はっきりとわかる。

「ひ、ひッ……ひいッ、いや、いやあッ」

ジワジワと貫かれながら、夏子は狂ったように顔をふって泣いた。英次も下から腰を突きあげて迎える。

「へへへ、とうとう入れたぜ、奥さん。熱いな……いい感じだ」

自分の上にまたがって腰をおろしている夏子を見上げながら、英次は笑った。深々と付け根まで貫いている。アヌスに埋めこんだ指にも、前の自分の形が感じとれる。

会田と堂島が、夏子の腰を動かすようにゆらし始めた。

前後に上下に、そして円を画くようにとゆらすのだ。

「あ、あ、ああ……いや、いやッ……」

死んだ気で耐えようという決意は、とっくに崩れ落ちていた。性の喜びを知りつくした人妻の体は、この翻弄に抗しきれなかった。腰がしびれ出し、からだの芯に熱いものが走り出す。ゆさぶられるたびに、からだのどこかがとろけ出し、あふれだすのだ。

（こんな……こんなことって……いや、あなた、たすけてッ）

自分が女である事を思い知らされる瞬間だった。

「あ、ああ……かんにんして……」

押えても押えても声がもれる。その泣き声は、明らかにさっきまでとちがって、どこか艶めいていた。

突然、英次は夏子の腰を浮かせると、自分を引きぬいた。それまで自分が貫いていた女の最奥からアヌスへ向って這うようにすべらせると、指にかわってアヌスに押しつけた。ググッと押し込もうとする。

夏子は始め、何をされたかわからなかった。引き裂かれるような激痛が襲ってきた。

「な、なんということを……いや、いやあッ、そんなことはいやあッ……」

英次のくわだてを知った夏子は絶叫した。

だが、その声もかすれて、苦悶のうめきに変わる。

英次は夏子の体重を利用して、グイグイ押しつけた。すんなり押し入る事は無理である。少しずつゴムをひろげるように、ジワジワと押しひろげた。

「い、いたいッ……やめて、人間のすることじゃないわ、やめて、やめてッ」

「痛いのは始めのうちだけさ、へへへ、その内気持ちよくなってくる……ほれ、もっと尻の穴の力をゆるめねえか」

「痛い、痛いッ……裂けるわッ、いやあッ」

夏子は泣きじゃくった。

それでも夏子は徐々に拡大し、英次の先がもぐり込んだ。まるでゴムに締めつけられるようだ。夏子が苦痛にもがく

たびに、ジワジワと英次は沈んだ。頭が完全にもぐり込んでしまふと、あとは一気に根元まで沈んだ。

「う、ううッ、うむむ……」

夏子は生々しいうめき声をあげて、全身をそり返らせた。腸の中までギッシリ埋めこまれたようで、張り裂けんばかりだ。もう、息をするのがやっとである。

「やめて……こんなこと、やめて……」

夏子は息も絶えだえにうめいた。苦しげに顔をふり続けている。

「奥さん、尻の穴に入っただのは俺が最初だろ、へへへ」

「こんなことって……けだもの、けだものだわッ」

「痛てえほどにしめつけてきやがる……へへへ、イカスぜ、奥さん」

夏子のアヌスに埋めこんだ感触を味わうかのように貫いたまま、英次は笑った。両手を夏子の双臀へまわし、臀丘を割り開いて、英次は更に深く結ながつた。

「へへへ、たっぷりと楽しませてもらうぜ、奥さん」

臀丘を両手でつかんだまま、英次はゆっくりと夏子の腰をゆさぶり出した。

#### 四

「へへへ、奥さん、俺が動いてるのがわかるだろ、それ、それッ」

英次は夏子の臀をいっぱいにひろげておいて、グイグイとゆすった。

夏子は上体をのけぞらせて、逃げようとずりあがる。豊かな乳房がブルブルとふるえた。その乳房を堂島がわしずかみにしてもみこみ出した。堂島は夏子の乳首が固くどがつているのに気づくと、顔を寄せて唇で吸いついた。乳首に歯をたててガキツとかみつく。

「ひいッ、たすけて、たすけてッ……」

夏子は悲鳴をあげて身悶え、そりかえってからだをはねさせた。その反応が英次にまで伝わって、くいちぎらんばかりにしめつけてくる。

「いいぜ、堂島。もっとかむんだ……ううッ、すげえしめつけてきやがる」

天にも昇るような快感に英次はうめいた。

堂島は乳首をかみ続けた。かみちぎらんばかりにゆさぶる事さえする。

乳首とアヌスの二点から押し寄せる激痛に夏子は泣き叫び続けた。激しくかぶりをふる顔は、恍惚のときのように見える。

「ひッ、ひいッ、たすけてッ……」

会田がカメラをかまえて、さかんにシャッターを切っている。恍惚にも似た夏子の泣き声、かみつかれてひっぱら



れる乳首、深々と英次に貫かれているアヌス……次々とカ  
メラにおさめていく。レンズを通して見る夏子は、妖しい  
までの美しさだった。

「これじゃ坊っちゃんが夢中になるわけだ……さすがの会  
田も眼を吸い寄せられずにはいられない。」

時間がたつにつれて、夏子のからだに微妙な変化があら  
われてきた。絶叫にも似た泣き声は、いつしかうめき声の  
入り混じったすすり泣きへと変わり、両眼を閉じた美しい  
顔は唇をひらいたままかぶりを弱々しくふっている。

「坊っちゃん、とろけ出しましたぜ」

乳首から顔を離れた堂島が言った。堂島は若いころスケ  
コマシをやっていた組みつてのテクニシャンだった。堂島  
の手にかかってとろけない女はいなかった。堂島はいつも  
英次が手に入れる女をとろけさせ、若い英次を手助けする  
のだった。

堂島が乳房から腰のあたりへと指を這わせるだけで、夏  
子はそこをピンクに色づかせてブルルツとふるえる程だっ  
た。

「へへへ、堂島、もっとメロメロにするんだ。よがり泣き  
するまでよ」

英次は夏子の腰をあやつり、ゆすり続ける。

それまで苦痛に逃げるようにずりあがっていた夏子の双  
臀が、時々ではあるが英次を受け入れるように双臀を沈め

る動きを見せ始めた。

「あ、ああ、あ……やめて……」

はつきりと歎き声とわかる泣き声が入り混じっている。

さっきまでの激痛は、ウソのように消えていた。いや、  
苦痛は続いているのかもしれないが、それを感じないまで  
に夏子は、わけがわからない状態に陥っているのだ。

「あ、あああ……」

今度は、はつきりと夏子の方から双臀を沈めてきた。英  
次の動きにこたえ始めたのだ。

「へへへ、俺が言った通りだろ。これだけいい尻をして感  
じねえわけがねえ」

「あ……あ……ああッ」

夏子の唇から、押えきれない呻き声があがる。全身にう  
っすらと汗がにじみ、それがヌラヌラと光っている。おび  
たらしい果汁が夏子からあふれ、英次の腹にまでしたたり  
流れ、それがからだが上下するたびに、淫らな音をたてた。  
「奥さん、自分から尻をふってよう。そんなにいいのかい」  
堂島が耳元で意地悪くささやいた。なよなよと顔をふっ  
ていた夏子は、

「い、いい……いいわ、たまらない……」

思わず口にしてしまったから、ハツとして腰の動きをと  
めたが、長くは続かない。すぐにめくるめく悦楽の快美に  
引き込まれるように、また、腰を使い出す。

燃えさかった人妻の官能は、もう、どうにもならないの  
であろう。夏子は堰を切ったように身悶え出した。まるで  
官能の恍惚に身をひたす事で、自分が犯されていると言う  
現実を忘れるかのようなだった。それとも、もうどうにでも  
なれと言う居直りにも似た気持なのだろうか。

「あ、あおッ……も、もう……」

最後の瞬間が近いのであろう。夏子は顔をのけぞらせた  
まま、ガクガクと英次の上ではねた。

それを知って、英次の動きも早くなった。

「もうすぐなんだろ、奥さん」

英次に聞かれても、夏子はこたえる余裕がない。まるで  
英次に応じるように、そこを収縮させ、肉壁をからませて  
くる。

「あ、ああ……あなた、あなたッ」

夏子の脳裡には、愛する夫との営みが浮んでいるのだろ  
うか。

巨大な官能の波に押し流され、全身をはねあがらせ、そ  
り返らせ、

「あ、あ……い、いい……いくわ、いくッ」

恍惚の絶叫を噴きあげた。

全身を激しく収縮させ、何度も痙攣を見せながら、英次  
の汚辱のほとばしりを、アヌスの奥深く受け入れたのだっ  
た。

すべてが終わった時、夏子は死んだようにグッタリとベッ  
ドの上に身を横たえていた。激しかったアヌス責めを物語  
るように、夏子の全身は汗でヌラヌラと光っている。

思う存分に夏子のアヌスをもてあそんだ英次だった。な  
のに、英次はなおも夏子のアヌスを犯そうとした。

「坊っちゃんッ」

夏子にいどみかかろうとする英次を、堂島がとめた。そ  
ろそろ時間なのだ。グズグズしていると夏子の夫が帰って  
くる。

「バカ野郎、手を離せッ、俺はもっと犯りてえんだよ」

英次が叫んだ。その眼は血管が浮き出て血走り、禁断症  
状の様相を呈し始めている。あと二、三十分もすれば、手  
がつけられなくなるだろう。

英次は抵抗した。狂った英次の頭には、夏子のアヌスの  
事しかない。それに、夏子を夫の眼の前で犯してみたい。  
人妻は亭主の前で犯るのが最高だ……

「は、はなせッ、手をはなしやがれッ」

だが、二十才ぐらいの英次が組きつてのつわものである  
会田と堂島にかなうわけがない。英次は両わきをかかえら  
れたまま、部屋から連れ出されていくのだった。

あとには静寂が残った。その中で、夏子のむせび泣きだ  
けが、いつまでも流れていた。

(以下次号)



# 淫魔に魅入られて 雲海寺 竜

若奥様はフツンの上にあお向けにされ両手を頭上で固縛され、男の一方が両脚を開きにかかります。佳代様が泣いて哀願するのも構わず男は剥き出された草むらをなであげ、肉の合せ目に指をのばし……

花も恥じらう

若奥様の美肌

大旦那様にお仕えして二十年になります。その大旦那様も今では隠居され、本家の実権はお孫様であられる若旦那様が握っておられます。

現代気質とでも申すのでしょうか、実主義の若旦那様は私みたいな古い使用人には眼もくれず、いつしか私は庭番の仕事をやるようになっていました。

その若旦那様が奥様をおむかえになられました。

佳代様と言い、甘い新婚生活を物語るようにほのかな色香を漂よわせる、輝くばかりの美人でございました。佳代様は、それはやさしい方で、私のような者にも「爺や」と声をかけては何かと気をつかって下さいました。

でも、それがいけなかったのでございます。私は自分の身分も年も忘れ、ひそかに佳代様に恋こがれるようになってしまったのです。（死ぬまえに一度でいいから、佳代様に思い

をとげてみたい……」

佳代様のお顔を拝見するだけで、ズボンの前がカーッと充血してくるのでございます。

淫らな心がふくれあがるに従って、私は佳代様を一人占めなさっている若旦那様がうらやましく、憎くすら思うようになっていました。

しかし、佳代様は若旦那様の奥様、私のような者に手が届くはずもございません。物影から佳代様の姿を盗見し、私は悶々とした日々を送っておりました。いつしか私は、母屋にしのび込み、若旦那様夫婦の寝室をのぞき見するようになっていました。天井裏からそつとのぞくのでございます。

たいてい佳代様はあお向けに横になられ、その上に若旦那様がのしかかっておられます。予想通り、いや、それ以上に素晴らしい佳代





様のからだでございました。すみからすみまでムッチリと白く、輝やくばかりのみずみずしさなのです。白桃のような乳房は形よく張って、信じられないほどのムチムチとした肉づきでございました。まるで熟しきって、食べられるのを待っているみたいなのです。

若旦那様に吸われた乳首は、濡れて妖しく光り、ころなしに脹らんだ感じでございます。乳房から下は、私が最も見たいところでございますが、若旦那様がのしかかっておられる為に、見る事は出来ません。割り開かれた佳代様の太腿が見えるだけでございます。

「佳代、君はすばらしい……」

若旦那様は、そんな事を何度も言われながら、ゆさゆさと腰をゆすっておられます。しかし、その動きは変化にとぼしく、単調なものでございました。体位もきまって正常位でございます。

その為か、佳代様の表情は今ひとつとぼしく、物足りません。

「あ、あ……あなた」

消え入るような声で囁かれ、あとはすすり泣くだけでございます。

私はイライラしました。佳代様をもっと激しく身悶えさせ、生々しい啼き声をはり上げ



させる事の出来ない若旦那様へのいら立ちで  
ございます。あまりにも単調な愛の営みへの  
失望でございます。

佳代様のからだは素晴らしいだけに、この  
私ならヒイヒイ泣かせられるものと思った  
ものです。

若旦那様の単調な行為に比べ、佳代様のお  
顔は余りにも美しく、悩ましいものでござい  
ました。ものたりなさを漂よせつつも、夫  
に合わせようと、唇を少し開いて顔をのけぞ  
らせるのですが、それが私にはたまらない表  
情でございました。じらされた子供がむずか  
るようで、私は思わず胸ふるいしました。

「あ、あなた……もつと、もつと……」

佳代様は催促されるように声をあげられま  
す。さあ、いよいよこれからと思う時に、若  
旦那様はあっけなく果てられるのです。あれ  
では佳代様がおかわいそうでございます。佳  
代様の成熟したからだは、まだ何ひとつ満た  
されてはいないのでございます。

「あなた……も、もう一度……」

佳代様はたまりかねて、若旦那様にすがる  
れます。

そんな夜が続きました。私の佳代様への想  
いは、この私なら佳代様をたっぷり満足さ

せてあげられるのに、という胸の内と共にふ  
くれあがっていったのでございます。

### 悪魔に魅入られた

### 淫夜のできごと

それは風の強い夜のことでした。

夜中にトイレに立った私は、佳代様の寝室に  
灯りがついているのに気づいたのです。今夜  
は、若旦那様は商談で遠方へ行っておられ、  
佳代様一人のはずでございます。

こんな夜中に何をなされているのか……い  
つものようにのぞきの虫が騒ぎ出した私は、  
そっと天井裏へしのび込んだのでございます。

「お金は全部出しましたわ……も、もう、帰  
って、帰って下さい……」

突然、私の耳に佳代様のすすり泣くような  
声が聞えてきました。あわててのぞき込むと、  
佳代様が一糸まとわぬ全裸で、フトンの上に  
伏しているではありませんか。その佳代様  
を二人の男が見おろしています。背中一面に  
見事なイレズミを彫った男達でした。部屋の  
中は荒され、タタミの上に出歯包丁が突き立  
てられています。

思わず、あッと声をあげそうになって、私  
はあわてて口を自分の手で押えました。

押し込み強盗だ……私は直感的に悟ったの  
でございます。このところ、二人組の強盗が  
押し入っては若い女に乱暴をくり返している  
と言うニュースを、今朝が聞いたばかりな  
のです。

「おとなしくしてなよ、奥さん。さわぐと死  
ぬ事になるぜ」

男の声は低く、ドスがきいていました。男  
達の手で全裸に剝かれたのでしょうか。佳代様  
はおびえきっておられました。私の眼には、  
佳代様の白い背中が見えるのですが、それが  
ブルブルとふるえているのがわかります。

「お願いです……変な、変なことはしないで  
……しないで下さい」

「うるせえ。その変なことがしてえんだよ、  
へへへ、さっさとあお向けにならねえかよ、  
奥さん」

男達の手が、佳代様のからだにのびると、  
佳代様は激しくからだをゆすって、拒ばまれ  
ます。

「いや、いやですッ……私には夫がいます。

それだけはいや……いやですッ」

「おとなしくしろってえのが、わからねえの  
かッ」

バシッ、バシッ……

男の手が、佳代様の頬をはりとばしたのでございます。それで佳代様の抵抗も終りでございました。お嬢様育ちのおしとやかな佳代様が、いくらがんばってもかなうはずありません。

佳代様はフトンの上に、あお向けにされておしまいになりました。両手を頭の上で、男に押えつけられ、もう一人の男が佳代様の両脚を開きにかかったのでございます。

「ひッ……いや、いやですッ」

「へへへ、俺達は女を犯る前に、女の道具を調べることにしているだ。奥さんは美人だから、調べがいがあるぜ」

「そんな かしいことはやめて下さい……いや、いやですッ」

佳代様は泣き出されました。殺されることを恐れて、その悲鳴は押し殺したような響きでございました。

男は佳代様の両脚を割り開くと、閉じられないよう、その間に出歯包丁を二本、突き刺しました。そうしておいて、身をかがめてのぞき込むのでございます。

「すげえ、上玉だぜ……へへへ、まるで生娘のようだ」

「いやあ……見ないで、見てはいやですッ」

「これ以上さわぐと、本当に殺すぜ、フッフ、奥さんよう」

男はおどしておいてから、女の黒い草むらなで上げ、女の肉の合わせ目を剥き出しました。そうしておいて、左右から指をのぼして、くつろげるように女の肉の合わせ目の奥をさらけ出したのでございます。

私はゴクリと生唾をのみこみました。ちょうど私の眼の真下に、佳代様の秘密が剥き出していたのでございます。いつもは若旦那様の影になって、見る事の出来ないあこがれの秘溝です。私はもう、強盗が押し入った事を外へ知らせに行くのも忘れ、見とれました。

サーモンピンクの肉襷が、明々とした電球の下ではつきりと私の眼にやきつきしました。

「か、かんにんして……」

佳代様はもう、すすり泣きながら弱々しく顔をふるばかりでございませう。男の指を感じると、ひッ、ひッと息を吸うような泣き声をあげられます。男は執拗にのぞき込み、指をつかっています。肉襷のひとつひとつを指先でなぞるように探るのでございました。

私はまるで自分がまさぐっているような錯覚におち入り、自然に指先がうごく程でした。

「あ、あ、あッ、い、いやです……か、かんにんして……」

「へへへ、男が欲しいんだろ、奥さん。なにしろ、これだけいいからだをしてるんだ」

男のいたぶりは執 でした。すぐには犯そうとせず、佳代様をいたぶり、官能の芽をほり起こそうとしているようでした。

サーモンピンクの肉襷をまさぐり、指を二本女の最奥に沈めては、もう一方の手で女の蕾をさぐりあててのです。

私はひどく興奮させられました。若旦那様の単調な愛撫にうんざりしていた私は、男の巧妙で執拗な愛撫に、おおいに魅せられました。

（佳代様のからだへの愛撫はそうではなくては……あれなら佳代様も満足されるはず……）

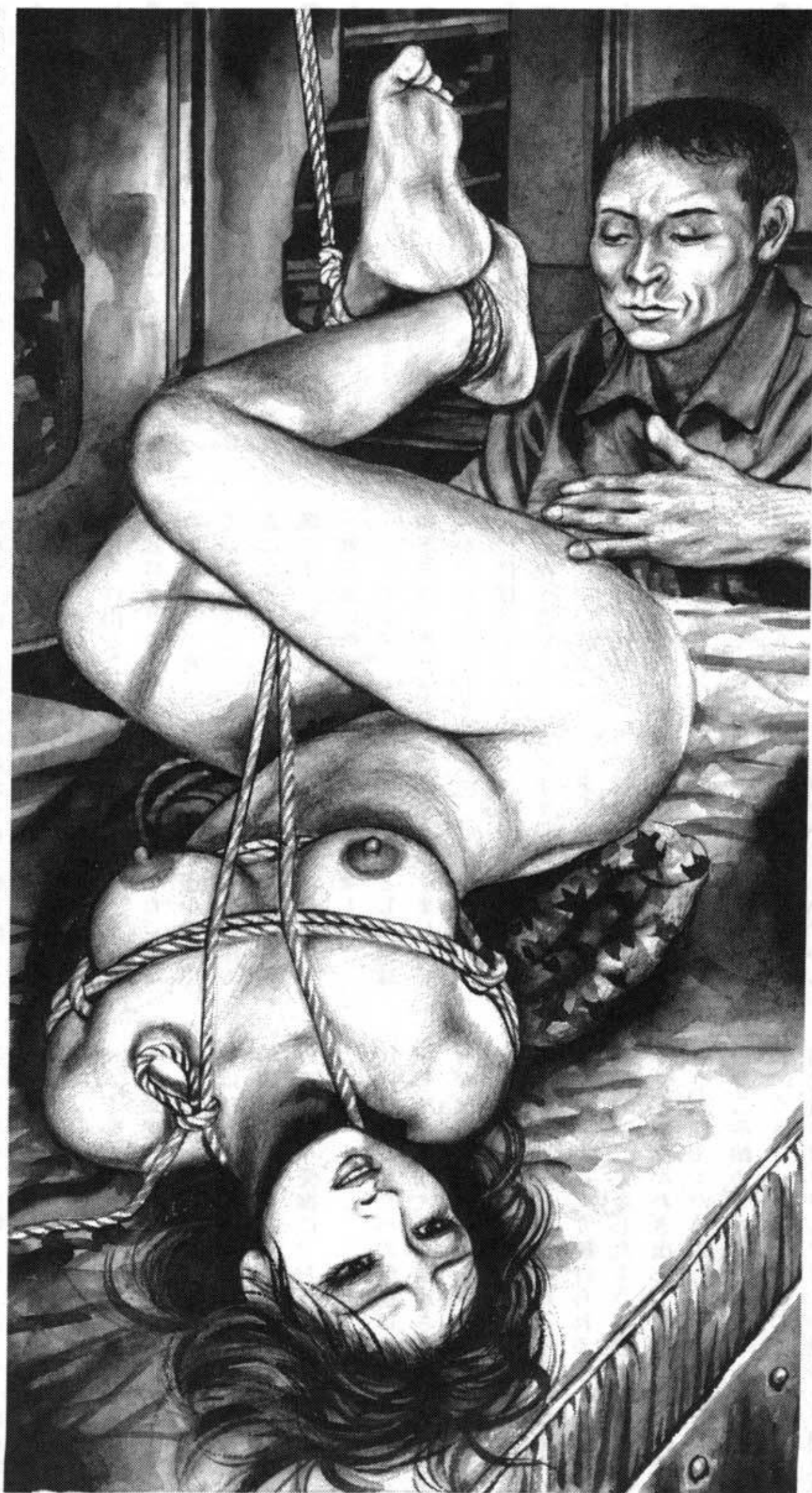
そんな事を思いながら、私はとりつかれたようにのぞき続けました。

私の予想通り、佳代様はみるみる反応なされました。まさぐり続けられるサーモンピンクの肉襷は、充血したように色が変わり、ジクジクと果汁がわき出してきました。佳代様の両手を押えている男も、手をのばして乳房をもみこみ始めます。

「あ、ううッ……かんにんして……」

佳代様の泣き声も、どこか艶めいて聞える





のでございます。

「へへへ、ビチョビチョに濡れてきやがった。

敏感な奥さんだぜ。欲しいんだろ？」

男が指で女の最奥をえぐるようにすると、

佳代様は腰をゆすって、

「あ、ああ……も、もう、かんにんして……」

と、うわずった泣き声をあげられます。

そろそろ犯れよ、と乳房をまさぐる男がけ

しかけます。

「それじゃ、ぶち込んでやるか」

男はゆっくりとズボンを脱ぐと、佳代様の  
上へのしかかっていったのでございます。

## 肉盗に犯される 若妻の甘い吐息

その瞬間、佳代様は齒をかみしめたままうめき、顔をのけぞらせられたのです。

「大きすぎるわッ」

そううめいたような気がしました。

男は腰をよじって進めていくようでした。

男の腰がとまった時、私は佳代様が深々と貫かれた事を悟りました。

「う、ううッ、きつい……大きすぎるわッ」

佳代様は唇を開いたまま、顔をふりたてるのでございました。

「たまらねえ、しめつけてきやがる……奥へ吸い込まれるようだぜ」

「ああ……あうッ、い、いやあ……あうう」

「いやじゃねえぜ、奥さん。こんなにしめつけてよう、へへへ、亭主に満足させてもらってねえのかい？」

男がゆっくりと腰をゆすり出しました。ひいッと佳代様は弾かれたように、悲鳴をあげたのでございます。

「ひッ、ひいッ……う、うごかないで……」

男は動くのをやめはしません。押し入った家の若い女を強姦するだけあって、憎いまで

に巧妙な衝動を送り込むのです。こねくりまわし、回転させ、突き上げる……それは若旦那様の単調さとは、比べようもございませんでした。

「奥さん、強烈なのをごちそうしてやるからな。これはいただいた金の礼だぜ」

男は佳代様の太腿を両わきにかかえ込むと、乳房へ押しつけるように倒しました。ちようどからだを二つに折りたたむようになかったのでございます。その上で、男は腰をゆすり続けます。

二つ折りにされたことで、突き上げてくる感触と感覚が、すべて内へこもるせいでございましょうか、佳代様は声をあげて泣き出されました。

「こんな……い、いやあ……あううう、あうッあうッ」

それは、はっきりと啼き声とわかる泣き声でございます。若旦那様との時とは、人が変わったようでございます。

「ああ……あうッ、あうッ……か、かんにんして……」

もう、押えがきかなくなったように鳴き悶えられるのです。まるで堰を切ったような、満たされなかった女体が花開いたような激し

さでございます。佳代様の顔は、めくるめく恍惚にひたるように、歓喜させ見せていられるのです。

（そうですよ、佳代様。思いきって満足されるんですよ……）

もう、私の頭の中には、佳代様が押し込み強盗に犯されている事など、どうでもよくなくなっていました。生々しい啼き声をあげて、身悶える佳代様のからだの事しかありませんでした。

「いいだろ、奥さん、へへへ、それ、それッ」

「ああ……あうッ、あうッ」

「気分だしてやがるぜ。たいした女だ」

男は、私が見えていても驚ろくほどの荒々しさで佳代様を責めさいなむのでございます。佳代様のからだは、匂うような色にくるまれ汗でヌラヌラと光っていました。

「あああ、も、もう……あうッ、あううッ」

生々しいまでの佳代様のりようでございます。啼き声を昂ぶらせながら、ひいッ、ひいッという悲鳴さえあげ、快楽の絶頂へ向けて登りつめていくのです。

「へへへ、遠慮なくいいんだぜ、奥さん。何度でも犯ってやるからよう」

男の声も聞えないのか、佳代様は泣きわめ



き、全身を激しく痙れんさせたのでございます。さん」

何度も痙れんを見せながら、両脚を突っ張らせ、とても上品でやさしい佳代様とは思えない生々しさで登りつめたのでございました。

しかし、それでも男は腰をゆさぶるのをやめようとはしませんでした。

「あ、ああ……か、かんにんして、も、もういやあ……」

グツタリと余韻に沈むことも許されず、佳代様はひきつった悲鳴をおあげになります。続けざまに責められるなど、若旦那様では考えられない事でございます。

「あ、ああ……いやッ、あう、あうッ」

佳代様は再び追いあげられ始めたようでございます。

男の責めは、実に変化に富んでいました。

乳房へ押しつけるように折りまげている佳代様の両脚を左側倒しながら、腰を持ち上げようとするのです。結ながつたまま、佳代様をうしろ向きに、体位をかえようというのでございます。

「あ、あううッ……いやッ、こんなのはいや、き、きついわッ」

「亭主じゃ、こんな芸当は出来ねえだろう、へへへ、ほれ、よっん遣いになるんだよ、奥

さん」

男は佳代様をうしろ向きにまわすと、腰をもち上げ、かかえ込んでしまったのでございます。獣交の体位でございます。

「あ、ああ……あうッ、あうッ」

始めてとらされる刺激的な体位に気持ちがいそがしかったのでしよう。佳代様は激しく没入される様子でございます。先程よりも更に激しく、生々しい啼き声をあげ、自分から腰をゆすり出したのでございます。のけぞらせた美しい顔はめくるめく恍惚に輝やくばかりで、しきりに両手でシーツを握りしめておられます。

「あうッ、あううッ……ま、また……」

女体とは貧欲なものでございます。佳代様は、たちまち絶頂へ向けて登りつめたのでございました。絶頂を物語るように総身を絞ったのでございます。

驚ろいた事に、男はまだ責めをやめようとしません。

「へへへ、またいっちゃったのか、奥さん。

欲求不満だったらしいな。よしよし、俺達がたっぷり満足させてやるぜ」

そんな事を言いながら、絶頂感がおさまる余裕も与えずに、衝き上げるのでございます。

それどころか、今度は佳代様の乳房をまさぐっていた男が、

「俺も仲間に入れてもらうぜ、へへへ、上の口がさびしいだろうからよ、奥さん」

佳代様の黒髪をつかんで顔をあげさせると、いきなり固くそそり立った自分の肉を、佳代様の唇の中へ押し込んだのでございます。

「ううッ、うッ……うぐッ、ぐッ」

佳代様は、この思いがけない責めに激しくせき込み、ガクガクと全身をはね上がられました。

上と下の唇を二人の男に同時に……それはこの私にとっても衝撃的な光景でございました。成熟した佳代様の女が匂うようで、こうも妖しい美しさにつつまれた佳代様を、私はこれまでに見たことはございません。もう、かた時も眼を離せない私でございました。

### 若奥様の裸身を 前に勇躍する下男

二人組の押し込み強盗が、ようやく引き上げていったのは、もう夜明け近くでございました。その間中、男達は佳代様を休ませることなくもてあそび、次々と様々な体位を強い

たのでございました。

私は天井裏から降りると、そっと佳代様に近づきました。佳代様はうつぶせに横になられたまま、身動きひとつされません。

「奥様……奥様、大丈夫でござえますか」

私は佳代様の身を案じるふりをして、顔をのぞきました。

佳代様は口の端から白い泡をふいて、気を失なっておられました。無理もございません。二人の男にかわるがわる、あるいは上と下とを同時に、ぶっ続けで犯されたのでございます。

「奥様、奥様……大丈夫でござえますか。しつかりしてください」

私が佳代様のお尻にさわってゆさぶっても反応はまったくございません。白くムッチリと、ムキ玉子のようなお尻をなされています。悪魔が突然、私にささやきかけたのは、その白く張ったお尻を見ている時でございました。（二度とないチャンスだぞ……佳代を自分のものにするんだ。何をしても強盗の仕わざとしか思われない。やるんだッ）

そう悪魔がささやくのでございます。

佳代様の妖しいまでにムッチリと、あまりに見事なお尻を眼の前に、私は悪魔のささや

きに抗せるはがありません。欲望の命じるままに、私は佳代様のお尻を撫でまわしたのでございます。

撫でまわしながら、佳代様の唇丘を割り開きます。佳代様の神秘のベールが、今眼の前ではがされるのでございます。スベスベと白い佳代様のお尻に比べ、シワだらけの自分の手が、やけにきたなく見えました。

割り開いた谷間の底に、佳代様の可憐な菊の花が、ひっそりとのぞいておいでになります。それは、そのわずか下、生々しいまでに口を開いて男の精をしたたらせている女の最奥とは比べようもなく、いじらしいまでに、すばまっておいででした。

「奥様のお尻の穴……」

私はつぶやいてみました。

若旦那様はもちろんの事、強盗の二人さえ手に触れなかった禁断の処女地でございます。そう思うと、そこが何か私のものであるように思われてきたのでございます。

（そうだ、そこはお前のものだ……まだ誰れも手を触れた事のない佳代の肛門を、お前のものにするのだ）

また、悪魔がささやくのでございました。

私はその声にあやつられるように、指先を

のばしたのでございます。菊の花の粘膜がシットリと湿り、指先に吸いつくようのでございました。ゆるゆるともみ込んでみます。

気を失なっているても、もみ込まれるのがわかるのでございましょうか、佳代様の菊の花がキュツとすぼまるのでございます。

（指を入れる、入れるんだ。まだ何も入ったことのない佳代の肛門だぞ）

悪魔がけしかけます。いや、その声はもう、私自身のものとなって、口からとび出すのでございました。

私は佳代様の菊の花をもみほぐすようにして、指先を埋めこめにかかったのでございます。佳代様は、拒むようにしめつけてくれます。キュツ、キュツとすぼめるのでございます。

それをもみほぐしながら、指先を進めたのでございました。指先がゴム輪でしめつけられるみたいです。指の動きをとめると、フツと抵抗が弱まるのです。その瞬間を狙って、更に指先をもぐり込ませるのでございます。それをくり返ししながらジワジワと拡張し、指を進めると、その奥が急に展けたのでございます。佳代様の秘められた禁断の世界が、ひろがっていたのでございます。私は指の根



元まで、一気に押し入れました。

(すごいぞ……とうとう佳代様の肛門に指を入れたんだ。これが佳代様のお尻の穴……熱い、なんて心地よい熱さなんだ)

もう、悪魔と一体となってつぶやく私でございまして。

感激にも似た興奮が、淫らな熱となって、私のからだ中を駆けめぐります。血が騒ぐともうすのでしょうか、押えに押えてきた男の欲情が、メラメラと燃え上がるのでございます。

指先で禁断の最奥をまきぐり、指を上下に動かしますと、佳代様はうめき声をあげ、キュッ、キュッとすぼめようとなさいます。

まさぐり続けながら、私はこれから先の佳代様のことを思いました。佳代様が強盗に凌辱された事を知ったら、若旦那様は逆上されるにちがいありません。御自分は佳代様を満足させる事も出来ないくせに、人一倍嫉妬心の強い若旦那様なのでございます。それではあまりに佳代様がおかわいそうでございます。(そうだ。佳代のからだを満足させてやれるのは、今となつてはお前だけだ。佳代を自分のものにしろ。その方が佳代も喜ぶぞ) 悪魔があおるようにささやくのでございま

した。

もう、迷っている時間はありません。外がうっすらと明るくなり、グズグズしていると離れの他の使用人達が起きてくるのです。

私は思いきって佳代様の裸身を肩にかつぎ上げたのでございます。そのまま、裏にある古い土蔵の中へ運び込んだのでございます。

その地下には、今では大旦那様と私しか知らぬ戦争中につくった防空壕がございました。

(いいぞ。その防空壕なら誰れにも気づかれやしない。そこで佳代を飼うんだ。そうすれば、佳代はお前だけのものだ)

悪魔が、地下へおりの私にヤンヤと喝采をおくり続けるのでございました。

佳代はもはや

俺の牝奴隷だ

私は佳代様を地下室へ連え込むと、古びたベッドの上にあお向けに横たえたのでございます。裸電球のうすぼんやりとした明りが、佳代様の白い肢体を、妖しく浮びあがらせています。

もう、強盗にさんざんもてあそばれた佳代様のからだは、汗と男達の唾液がまだかわかずに、ヌラヌラと光って、いたる所に痛々し

い凌辱のあとがございました。それなのに、佳代様のからだは一層美しく、妖しいばかりの悩ましさでございました。犯されたことで何か脂がのりきった感じさえするのでございます。

私は恋人を見るような気持ちで、佳代様のからだをながめ、手を這わせてその感触を味わったのでございます。キメの細かい肌は、ヌルヌルと指先に心地よく、私は天にも昇る気持ちでございました。

唇を指先でなぞり、首筋から乳房へ……はちきれんばかりの乳房をヌルヌルともみ込み、その可愛い乳首を口にふくみ、吸い、舌先でころがし、ガキッと歯でかみついてさしあげたのです。

「うッ、うむむ……」

まだ意識のもどらない佳代様が、本能的にうめかれます。

(その調子だ。少し手荒らく可愛いがつてやるんだ。その調子で少しずつ、佳代の生娘……肛門へ向って進むんだ)

夢ではない、今は自分は佳代様を愛撫しているんだ……そう言いかけながら、ガキッと乳首にかみつく私は、もう、悪魔そのものでございました。

## あぶちすと激白

### 剃毛

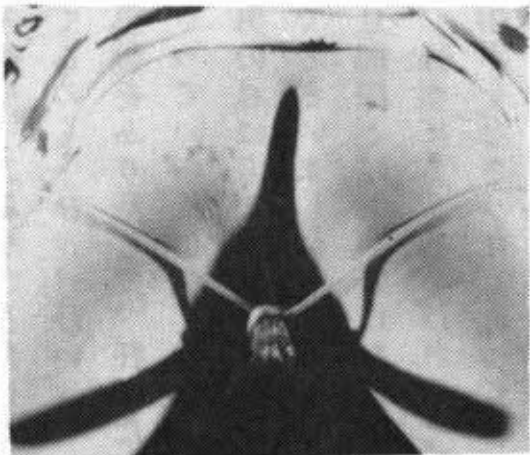
私の恥部の毛を彼に剃られることは、もう習慣のようになっていきます。

昨夜も、一センチほど伸びてしまった恥部の毛にそろそろ剃り頃だと、私に女性用のT型カミソリと、ひげそり用のシェービングフ

ォームを持ってこさせ、触れると気持ち良いほどつるつるに剃りあげたところでした。

そして、幼な子のようになったむき出しの恥部を、可愛い可愛いいと言ってじっくり鑑賞しながら、指で大きく開いたり、口に含んで舌を這わせたりして、楽しんだのです。

私も見られていると思うと恥ずかしくて、空気の流れさえもわかるほど恥部が敏感になり、たっぷりあふれさせてしまったのでした。もっともっと、と自分から両足を大きく開いて催促してしまうほど、もう恥も外聞ありません。こんな私と彼とは、お似合いのカップルだと思っんです。(A子)



片手を乳房から這いおろすと、ヘソのまわり、腰のくびれへと撫でまわし、やがて太腿を割ってもぐり込ませたのでございました。夢にまで見た女の肉の合わせ目へ、指先をもぐり込ませたのでございます。奥はおびたらしい男の濁液と、佳代様自身の果汁が入り混じってたぎり、ビチョビチョでございました。それをかまわず、指を埋め込んでまさぐると、ネチャネチャと淫らな音がいたします。

「う、ううッ……」

佳代様はまた、うめかれます。無意識に腰をよじろうとなさいます。ヌラヌラと光る肌が、匂うようなピンクに染ってきたのでございます。気を失なっているほど犯されたとい

うのに、佳代様のからだは、私の指に反応を見せ始めたのでございます。そこだけは、まるで別の生きものみたいにヒクヒクと蠢めき、私の指先に妖しい反応を伝えてきます。(もういいだろう。そろそろ佳代の肛門にとりかかるんだ)

悪魔にささやかれるまでもなく、私は佳代様をうつぶせに引っくり返したのでございしました。手足をいっぱい開かせ、鎖でベッドの四隅につなぎました。眼をきまして、逃げられない為でございします。

佳代様のお腹の下にまくらを押し込み、お尻を高くもたげさせておいてから、佳代様の菊の花をのぞき込んだのでございます。

「うむむ……あ、ああ……」

私の視線を感じたのか、うめき声をあげて、佳代様は意識を回復なさいました。うつろな瞳は、焦点が定まらない様子でしたが、すぐにハッとして、うしろをふり返られました。二人組の強盗のことを思い出されたのでございましょう。

「爺、爺や……」

まったく予想もしなかったのでございしました。私の姿に驚ろいた様子でございました。「気がつかれましたか、奥様。強盗はもう、帰りましたです」

「爺や……」

佳代様はすぐには事態をのみ込めない様子



でしたが、手足に巻きついてゐる鎖、大きく  
割り開かれてゐる両脚、窓ひとつない不気味  
な部屋……それらに気がつい、驚愕の叫びを  
あげられました。

「ひッ、見てはいやッ……爺や、早く鎖を、  
鎖をといてッ」

「それは駄目でござえます、奥様、フッフ……  
……だいぶお楽しみのご様子でござえましたか  
らね。今度は、この私が、奥様を喜ばせて  
さしあげますだ」

「そ、そんな……」

佳代様は信じられないといった顔で、私を  
見られました。すぐに、佳代様のお顔が恐怖  
に凍りつかれたのでございます。

「爺やッ、バ、バカなことを言わないでッ……  
……気でも狂ったのッ」

「正気でござえます。奥様に女の喜びを教  
れられるのは、この私だけでござえますよ、  
奥様」

佳代様はあいつぐショックに、言葉も続か  
ない様子でございました。

私が佳代様のお尻をゆっくり撫でまわしま  
すと、佳代様は弾かれたようにからだをはね  
上げ、鎖に結ながれた手足をくねらせるので  
ございます。

「どうして、どうしてこんなまねを……爺や、  
私が何をしたというのッ……ああッ、やめて、  
やめてッ」

「フッフ、私は奥様にはよくしていただきま  
した。ですから、欲求不満のかわいそうな奥  
様への御礼でござえますだ。私なら、こんな  
こともしてさしあげられます」

私はいきなり手をのばすと、佳代様の菊の  
花を指先でまさぐったのでございます。ゆる  
ゆるともみ込んで、ほぐすのでございます。

「ひいッ……そんなところを、いや、いやあ  
ッ……爺やッ、やめてッ」

佳代様はにわかにおびえられ、甲高い悲鳴  
をあげて、顔をのけぞらされました。

先程の、人形のような佳代様とちがって、  
泣き叫ばれると、なにか佳代様の美しさに圧  
倒されるようで、指先の動きににぶりがあら  
われがちになるのでございます。

（何をビクついているだ。佳代はもう、お前  
のものなんだ。奥様って顔をぶちこわしてや  
るんだ、へへ……それには肛交をやるしか  
ない）

悪魔が、あおり続けます。悪魔にはげまさ  
れ、あおられて、私の淫らな炎は一層激しく  
燃えさかるのでございました。

「い、いやあッ……爺や、こんなことをして、  
タダですむと思ってるの……ひッ、ひいッ」  
佳代様は美しい黒髪をふり乱して、狂った  
ように顔をふりたくっていられます。強盗に  
犯されるより、下男の私にもてあそばれる事  
の方が屈辱的なのでございましょう。

「奥様はもう、若旦那様とはお会いになれま  
せんです。フッフ、強盗にもてあそばれ、そ  
の上、この私のお相手をなさったとあつては  
若旦那様に会わす顔がなくなるはずで、ござ  
えます」

「い、いやあ……そんなことはいやあッ」

「さあ、奥様。若旦那様のことなんぞ、忘れ  
させてあげます」

私は佳代様の臀丘をいっぱい割り開くと、  
その上へのしかかっていたのでございます。  
狙うのは処女地、肛門でございます。

佳代様の性を花開かせ、成熟させ、この私  
好みの女にしこむ自信はございます。肛交は  
その序曲でございます。

「奥様……いや、佳代ッ」

そう叫ぶなり、私はゆっくりと腰をつき出  
していったのでございます。

傑作秘画選  
(緊縛秘画十二月ヨリ)





# 生人形地獄

□没落貴公子の竜二郎は好色家の須黒男爵に美しい女をとりもって生活の足しにしている。今日も男爵邸前にうずくまる乞食娘に目を付け屋敷に入ると地下室では奥女中のお小夜が裸にされて縛られ、男爵の責檻を受けている

## 連載第2回

## 美保戸 実彦



物すご  
い淫薬  
の効果

男爵はマニキュアのゆきとどいた白い手で、うっすら汗をかいいたお小夜のあごをしやくり上げ、しげしげと覗き込んだ。

「……お、おゆるし下さいまし……おゆるしを……」

細い眉をたわめ、花びらのような唇を喘がせるそのさまは、きざしはじめた女のそれそっくりだ。女の顔が一段と美しくなって男の好き心をそそりたてずにはおかぬ貌である。

「……な、なんとかして下さいまし……おねがいでございます……」

羞ずかしい顔を見つめられるつらさにこたわる余裕もなく、ひたすら慈悲を訴えかける。椅子のレザーをきしませて白い腰がよじれ、朱塗りに竜の彫りものをした肘掛けに乗せ上げられたほっそりかたちのいい下肢が宙を蹴り、爪先が反り返る。

「男が欲しいか」

男爵は眉毛や鼻すじを指でなぞりながら、十六七の少女が答えることなどできない問いを発する。

「男が欲しい、男のもので痒い所を思い切

り掻きたててくださいと言うまでは、このままだぞ」

「でも、男爵」

お小夜の前にしゃがんで、股ぐらをしきりに覗き込んでいた竜二郎が口をはさんだ。

「お小夜坊がまだおぼこなら、男のものがどんなものか、いや、男と女のすることも知らないかもしれませんぜ」

世はあげてエログロナンセンスの時代で、浅草界限ではズロースも着けない踊り子のシヨ一すら見られるという時代なのだが、むろんそれは良家の子女とは無関係の世界である。

「ふむ」

男爵は髭をひねった。

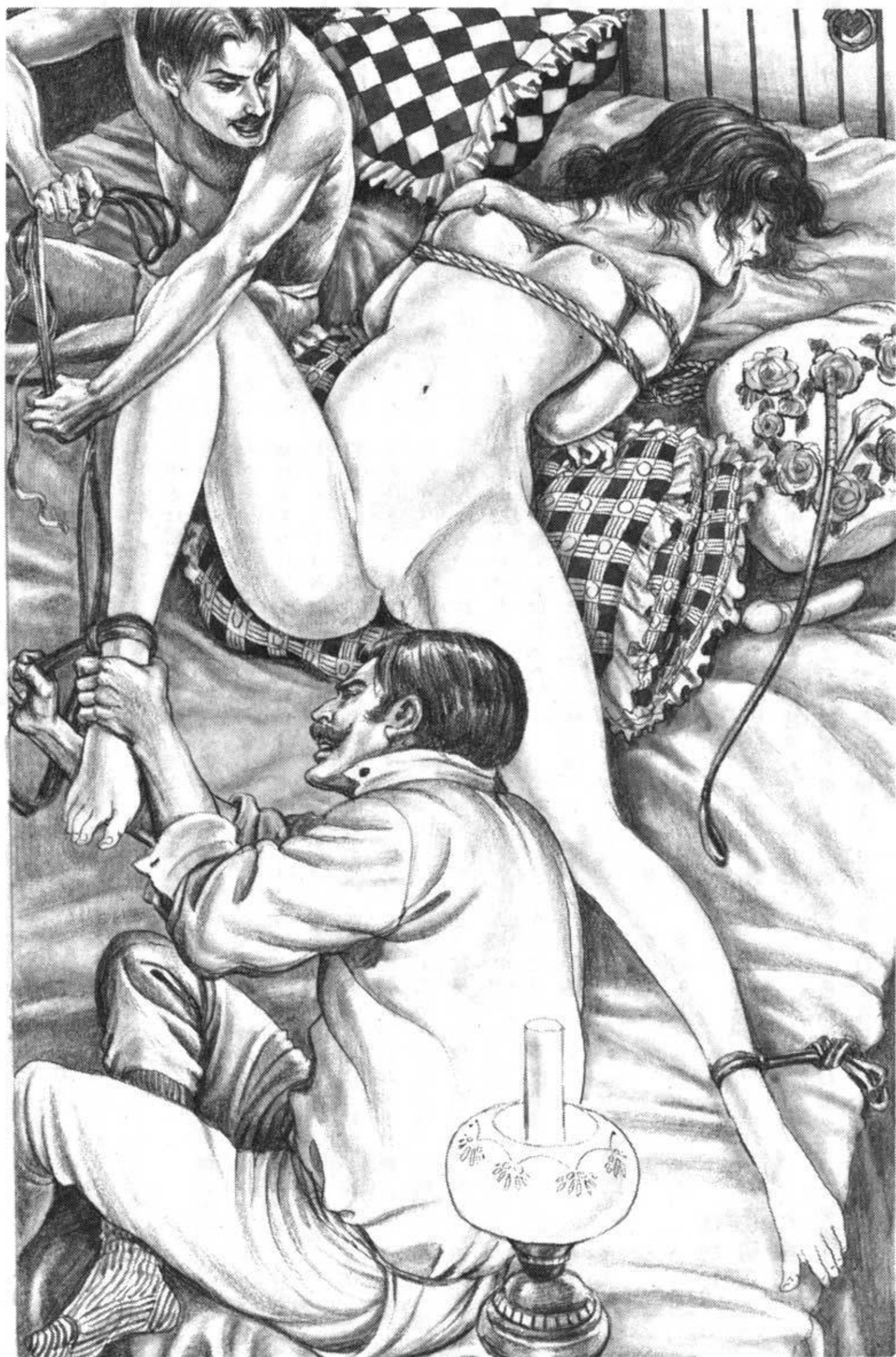
「のっけから男爵のものを見せたのじゃもったいなさ過ぎるでしょう。牛太のどうです。もっとも奴のはちとデカ過ぎて、おぼこにやむごいかもしれませんがね」

「お前のはどうだ」と男爵は眼鏡の奥にいたずらっぽい眼を光らせた。

「わたしのは商売道具でしてね。これがお小夜坊のおぼこを頂けるんなら、けっこうお見せしましょうが」

「牛太」

男爵は、寺田を檻に入れ終った啞の牛太を





手招きした。

「お前のものをお小夜に見せてやれ」

牛太はうなづいて、西洋中世の刑吏まがいの服装の前をくつろげだした。牛太は小学生の頃何かの事故で発声器管をつぶしたので口はきけないが耳は聞こえる。曲馬団に売られたのもその不具のせいなら、男爵がそこから買い取ったのも、その都合のいい不具のせいであつた。

牛太が黒のタイツの間から引きずり出したものは、まだ中途半端な状態にあるというのに、常人の眼をそば立たせるのに十分だつた。

その節くれ立った茎胴の長さ太さはもとより淫水焼けて黒光りする先端の張りは、どこか別世界の異形の生物を見る思いにさせる。

事実牛太はこの一物で夜の座敷をつとめていたのである。シロクロは当然ながら、鉄瓶吊り、糸切り、襖破り等々、この一物が彼のいのちを支える足しになつた。

が、吉原の女郎ならよだれを垂らすかもしれない代物も、おぼこのお小夜にとっては恐怖を起こさせるばかりであろう。

男爵がお小夜の髪を掴んで正面に引き向けた。

「お、おゆるし……」

ガチガチ歯を鳴らしつつ、しっかと眼を閉じているその臉をもう一方の指で引きめくつた。

「ヒイ」

牛太は眼ばかり出した頭巾の奥から、そんなお小夜の悶えようを食い入るように見つめながら、ゆっくり自分のものをしごきだす。奥仕えの女中という存在は地下室暮らしの牛太にとっては高嶺の花、その花が全開で泣き悶えているのだ。これは少し愚鈍な所のある牛太にとってもよだれの流れてやまない眺めだろう。

擦られるにつれて亀×はさらにエラを張って赤黒い輝きを増し、はやトロリとしたものを鈴×から垂らしはじめた。

竜二郎はただれたように色を濃くしてとめどなく蜜をあふれさせているお小夜坊の股ぐらを、しげしげと覗き込んでいる。おぼこ娘が欲情して濡れそぼるさまを見るのは、女衞という商売をしていても、なかなか見れるものではない。ましてお小夜坊は奥女中で、数いる女中の中でもひとときわ抜きんでた存在だ。それに内気でなよなよした風情が男の嗜虐欲をそそるところがあつて、かねて眼をつけていた女でもあつた。

その女——といってもまだほんの小娘だ——が股を上げられるだけ上げて、牛太のドス黒いものと向き合わされたのだ。そのことでお小夜のういういしい女の道具がますます可憐に見えてくる。

溢れるお露はうつすら開いた閉じ目の左右の柔肉までベツトリ濡らし、尻の穴にまで溜まって、ぬらぬら光っている。薬の作用で無理やり絞り出されたために、普通の昂ぶりで洩らすのよりよほど粘度が高い。充血してくれた贅肉のあわつから絶えずジクジク溢れ身をよじるたびに、ツ—と蟻の戸渡りに流れる。細長い三角の莢にくるまれた核が頭をもたげて、チョッピリ赤い頭をのぞかせて喘いでいるのが、薬の効果のすさまじさをありありと物語っている。

「こっちも剥いて対面させてやりますかね」  
「面白いな」

男爵もしゃがみ込んできた。



妖かし  
い破瓜  
の祭壇

お小夜の恥毛は掻き上げる必要もないほど淡くはかなげだ。それと対照的にそこに開いた花びらは毒々しいばかりだった。それを竜

二郎の指がさらに押し拵げて奥まで曝し上げ  
莢を押し上げて木の芽のような赤い肉の塊を  
粘液の中からまさぐり出すように剥き出しに  
した。白くかぶさった恥垢がツンとした匂い  
を伝えてきた。

「こら真正銘の生娘ですな」

長く伸ばした小指の爪で恥垢を掻き落とさ  
れつつ、お小夜は悲鳴をあげ続けている。彼  
女としてはそんな所をなぶられるなど生まれ  
て初めてのことなのだ。そしてそこから生じ  
る感覚も――狂いだすような痒ゆみが遠のい  
て胸ぶるいしたくなるほどの快感が生じるの  
をどうしようもない。

それと見てとった竜二郎は、恥垢を掻き取  
られてつややかに光る地肌を剥き出しにした  
肉芽に、お露をたっぷり盛った指を当てがい  
クリクリさすってやった。

「ああ……」

たまたらずにお小夜は淫声を洩らして開き切  
った腰をよじった。

「どうだ、男のものを啜え込むと、これとく  
らべものにならぬほど心地よいぞ」

男爵はふたたびお小夜の顔をしゃくり上げ  
て牛太のものを見せつけつつ、自分もポッチ  
リしこらせた乳首を揉みはじめた。

お小夜は髪を掴まれて突き出したあごをヒ  
ッヒッと喘がせながら、トロリとけぶる瞳を  
うつつなく牛太の股間に向けている。半開き  
の口にいったいしばきを溜めてそんな眼つき  
で腰をゆさぶっている図は、男が欲しくてた  
まらないといった恰好である。

「あれが欲しくないか。痒くてたまらぬ所  
を思い切りあの太いので掻きまわされて、慰  
めて欲しくないか」

「ああ、おゆるし……」

その声が悩ましげに えた。

「お小夜ちゃんだって、こんなにお露をいっ  
ぱい出して欲しがっているんだよ」

ホレと竜二郎が指ですくったものを見せら  
れて、お小夜は慄えがとまらなくなった。生  
娘にとっては苛酷過ぎる責めに、あくまで操  
を守り抜こうとする決意も崩れた。

「も、もう……どうにかして、下さいまし……」

……

ほむけたような貌を打ち振って口走った。

そしてあふれるものをこらえかねたように、  
激しく泣きむせびつつ身悶えた。そんなお小  
夜を間にして男爵と竜二郎はニヤリとほくそ  
笑みを交わし合うのだ。

「男が欲しいんだね」と竜二郎が、ヒクッヒ

クッと羞ずかしげに反応する核をもてあそび  
ながら、さらに追いつめる。

「……」

お小夜はきつくいましめられた乳ぶさを喘  
がせ、シクシク泣きながら、消え入りたげに  
うなづき返した。

「きまりですよ、男爵」

「うむ」

縁なし眼鏡を光らせながら、男爵はむせび  
泣くお小夜の屈服の姿に惚れぼれと見入った。  
操を捨てる決心をしたことで一層と女っぽく  
なったようなその風情が、いたく男爵の欲望  
をくすぐるのである。

牛太はよだれをしたたらせているものを引  
っ込めさせられた。常人ならとてもこのまま  
ではおさまらない所だが、そこは男爵の忠実  
な僕だ。命じられるままにお小夜の下肢のい  
ましめも解いた。

「向うのベッドに運べ」

拷問部屋に隣合って一段高く造られている  
居間に据えてあるベッドに運んでゆっくり処  
女を賞味しようというのだ。

「お小夜さん」

檻の鉄格子をゆさぶって寺田が泣き声をあ  
げた。愛する少女を眼の前で奪われる口惜し





さとは裏腹に、股間をおえ返らせてブルブル  
慄わせている。

「お小夜ちゃんが女にされるよがり声を聞き  
ながら、そこでせんずりでもかいているんだ  
ね、寺田くん」

嗤いながら竜二郎はふたつの部屋を仕切る  
緞子のカーテンを閉じた。

拷問部屋で血と汗と絶叫とを絞り抜いた女  
を最後になぶるベッドである。そのダブル幅  
いっぱい、お小夜の下肢が引きはだけられ  
足首を取りつけた革紐に縛りつけられた。つ  
ながりやすくするために腰の下にクッション  
が押し込まれ、破瓜の祭壇に汚れない肉唇  
がくまなくさらけ出された。お小夜はシーツ  
に顔を埋めてかぼそく泣いている。その間に  
も消えない痒ゆみに、高々とせり上げさせら  
れた腰をよじっているのが、どこか破瓜を待  
ち切れずにせがんでいるように思える。

「邪魔者は退散いたしますかな」

服を脱ぎはじめた男爵に竜二郎は言った。

「小夜が女になるのを見たくなはないのか」

「そりや見たいですよ。生娘が女になるとき  
あげる悲鳴やら泣き声というのは、何度聞い  
てもいいもんですからな」

「じゃ、見ていけ。よければ後で抱いてもよ

い」

「これは有難い」

竜二郎は二重回しを脱ぎ、袴も脱ぎ放って  
下帯ひとつになると、図々しくベッドに上っ  
てお小夜の傍にあぐらをかいた。

貴族のらしく色は白いが逞しく肉をつけた  
毛むくじやらの体だ。

男爵の方もやや中年太りのきざしは見せて  
いるもののガッチリした骨組みの体つきで、  
艶のいい肌には毛がほとんどないのが竜二郎  
と対照的だった。

「こうやって二人で一人の女をなぶるのは久  
しぶりだな」

「さよう。あれはたしか柳橋の何とかいう芸  
者でしたな」

「途中でお前が入って来たのに眼を剥きおっ  
たが、しまいには自慢の鬘も根からグラグラ  
に崩してヒイヒイよがりおった」

男爵は、牛太のものには一歩ゆずるとはい  
えどこへ出しても恥ずかしくない一物をしご  
きつつ、しらじらと剥き出しのお小夜の股の  
間にドッカとあぐらをかいた。



血ぬら  
れた処  
女の涙

内股と内股の肌をすり合わされて、お小夜  
は胸を反り返した。その胸には竜二郎の手が  
あつて乳首を揉んでいる。

男爵は自分のものを握って、そのテラテラ  
光る先端で柔らかな肉の合せ目を分け、浅く  
沈ませて上下に柔襲を掻き探った。お小夜は  
はあっと大きく胸を喘がせて、応えるように  
腰を上下にゆすった。そうされただけでたま  
らぬ痒ゆみが癒されて、身ぶるいが出るほど  
の快感に変わるのだ。それは操を奪われる精神  
的な苦痛、処女を破られる肉体的な激痛すら  
も上まわる、とろけるばかりの快感であった。  
こらえてもこらえても声が出て腰がよじれる。

その汗をかい喘ぎ悶えるさまがまた男爵  
にとつてはこよない眺めになる。蜜にまぶさ  
れた先端で、引き剥いた核の小さな瑪璃の玉  
を嵌め込んだようなのを、クリクリもてあそ  
んでやると、ヒイヒイ喉を絞って腰を衝き上  
げてくるのが面白い。生娘をいたぶる楽しみ  
は、いつあの太いので貫かれるかとブルブル  
おびえているのを、こうやってジワジワなぶ  
りものにして身も心もクタクタにしてしまふ  
ところにある。おぼこといつても木石ではな  
いから、そうやってなぶりものにされている  
間に我にもなく感じだして、果てには早く犯



してと言わぬばかりの狂態を見せるようになるのだ。

「どうだ。お小夜、男と女の遊びは腰が抜けるほど楽しかろうが」

瑪璃玉を鈴×でなぶりながら男爵は白いあごを見せたまま喘ぎ泣くお小夜に声をかけた。

「ほら、御前さまにより顔をお見せしな」

竜二郎が肩ごと抱き起こして貌を曝した。

「お、おゆるしを……」

竜二郎の胸に上気した頬をすりつけて羞ずかしい顔を隠そうとするのを、あごに手をかけて男爵の方に向けた。

「すっかり女っぽい貌になったな」

満足げに眺めやりながら、男爵はなおも核の愛撫をやめずに、その表情の切なげな変化と薄紙を顫わすような啼き声を楽しんだ。

「どうやら痒ゆみは御前さまのおかげで無くなったようだな。お小夜ちゃん」

竜二郎は乳首を揉みつつ、頬ずりした。

さっきから寺田のお小夜を呼ぶ泣き声がかーテン越しにしきりに聞こえるのだが、お小夜の耳に入るのか、もう入らない情態になっってしまったのか。お小夜は薄く閉じた眼に綺麗な睫毛を顫わせて、竜二郎の髭面に頬ずりれるがままになっている。

男爵はすっかり男のものになじまされてしまったおぼこの肉を大きく引きはだけて戸口を剥き出しにした。濡れそぼった綺麗な秘肉が、膜をおののかせて喘いでいた。

「おゆるし……」

最後の時が迫ったのを覚ったお小夜は顫え声にかぼそく訴えて腹を激しく波打たせる。

男爵はじわりと腰を押し出した。

「ああッ」

ガクンとお小夜は反った。

「かんにんして下さいまし……い、いたッ……」

硬化させた腰を逃がれようと狂おしくよじりつつ、どう避けることもできず貫かれてゆく。

「うむ」

瘤のような先端が秘肉を巻き込んでズブと収まった。サツと血しぶきが内股に血った。

「ヒィ……い、いたあッ」

狭い未開の肉を引き裂いてくる激痛に、お小夜は を吊り上げ白い歯を剥き出しにして竜二郎の腕の中で反り返る。

「お小夜さんッ」

破瓜の悲鳴を耳にした寺田が、悲痛な声を絞っている。

男爵は、数知れぬ女を犯し泣かせ悶えさせたおのれのものが、いまた新たな獲物の中にのめり込んでゆくのを眼鏡の奥からしかと確かめつつ、処女ならではの痛いほどの窮屈さに、獣じみた呻きをあげている。

節くれ立った脈動が激痛に痺れんする優しい肉に食い込み、きっちり嵌ったあわいから血をにじみ出させているさまは、処女を犯すのならではの眺めだ。

子壺の口まで貫かれ切ったお小夜は、口の端に泡を嚙んで悶絶した。

「御前の逸物はちとお小夜坊には無理でしたかな」

夢うつつの中にも苦悶する貌を抱き上げて男爵に見せながら、竜二郎は言った。

「生ゴムで全体を締め上げられている感じだそれがヒクヒクうごめいておる」

「聞くだけでよだれが出ますな」

竜二郎は地下室に来る前に執事に托してきた乞食の娘のことを思い出した。あの娘はお小夜より年下だろう。十四五か。まだ乳ぶさも固く毛も生えそろっちゃいまい。それを押しひしぐ時のことを考えて、本当によだれを髭にあふれさせた。

男爵がゆっくり動きだした。お小夜はうう

むと唇を噛んでのけぞった。額の生え際からフツフツと汗の玉を噴いて、よほどの苦痛なのだろう。だが、それが男爵にとっては生娘を犯す醍醐味なのだ。苦悶しのたうちまわるなよやかな白い肉を見降ろしつつ、窮屈にまつわりついてくる肉を抉りたてる。血が内股を染めてゆく。噛みしばったお小夜の唇も破れて血をにじませている。

竜二郎はそんなお小夜の顔を膝に乗せ上げて、おどろに乱れた髪を梳きやり、汗まみれに喘ぎ呻く横顔の美しさ、桜色に染まった耳朶の可憐さなどを眼を細くして眺めやっていた。

そのいまにもこわれてしまいそうな繊細な美しさが、とある連想を生んだ。

「子爵はもういかにそうすな」

「うむ」

男爵はお小夜を衝き上げ抉りまわしながら答えた。

「今日か明日かということで、奥もさつき見舞いに病院へ行った」

「その留守にこれですか」

竜二郎は、苦悶するお小夜の吸いつきたいほど美しいうなじに指を這わせながら笑った。「老公が亡くなれば、若夫人と令嬢はど

うなります。子爵家が破産状態にあることは公然の秘密だし……」

男爵はお小夜を犯しながら、気をまぎらしてくる話題に乗ってきた。

「天狗楼あたりに二人とも身売りをさせてもいいのだが」

「悦んでお世話させていただきますよ。おやじが聞けば飛び上って悦ぶでしょう」

竜二郎がお小夜のほっそりとしたうなじを見て連想したのは、子爵家若夫人とその令嬢の匂うような美しさだったのだ。二人の高貴の美女がこうやって男に押しひしがれて喘ぐ姿を連想したのである。

「しかし、どうやらその話素直には受け入れられないですな」

「フフ」

男爵は額の汗を押し拭って含み笑った。

「推察するところ、子爵家の債務は全部あなたが引き受けているんでしょう」

「なにしろ、わしの義姉であり姪だからな、路頭に迷わせるわけにはいかん」

「つまり屋敷ごと引き取ったというわけで」

「ハハ」

男爵は満足げに笑うと、ひととき強くお小夜を責めだした。

加賀見子爵の老公は、男爵の妻敦子の実父に当る。子爵家には男子がなく敦子の姉涼子が養子を迎えて後を継いでいたのだが、この養子が若くして亡くなった。残した一人娘が百合子で現在華族女学校の四年生である。

子爵家は公卿華族で元来あまり裕福ではなかったのが、近年の金融恐怖で他の弱少華族同様大打撃を受けて没落寸前の状態に追い込まれていた。明治の政商あがりの須黒男爵家に次女の敦子を嫁がせたのも、追いつめられた果てのことであり、男爵の援助によって今日まで子爵家の体面をつくらってきたのである。それが今また老公の死を迎えて、残された涼子も百合子も完全に男爵の庇護のもとに置かれることになった。

「遂に目的達成ですな」

男爵が妹の敦子より姉の涼子の方に気があったことを知っている竜二郎が言って、自分の方は百合子姫の美貌をお小夜の悩乱する貌に重ね合わせようとしたとき、ドアが激しくノックされた。



変りは  
てた花  
苑の惨

「わたしが出ましょう」



そう言つて竜二郎は袷を着、帯を巻きつけながらドアに向かった。

老執事がおびえた顔で立っていた。

「殿様がここにいらっしゃる間はうかがつてはならぬことになっていゝるのですが……」

「何が起つたのだ」

「実はあなたさまのおっしゃつていかれたあの乞食のことなのですが……」

「金が不足だとぬかすのか」

「いえ、短刀を抜いて暴れ出しましたのです」

「ホホウ、乞食が短刀を呑んでいたか。物騒な世の中だな」

「殿様に恨みがあるとわめき立てまして」

「おだやかでないな」

「どうにか取りおさえましたが、警察を呼びました。その警察が殿様にお会いして事情を聞きたいと申しておりますのです」

「よし、おれが行つてやろう」

玄關のホールではまだ騒ぎの興奮がおさまり切つていなかった。腕まくりの下男や馬丁たちが何かののしりながら取り囲んだ乞食を小突きまわしている。乞食は観念したようにガンジガラメにされたボロにくまつた体を蹴られるにまかせている。その横顔の意外にととのつたさまが竜二郎の印象に残った。と

同時にそんな父親をかばうように抱きついて周囲の男どもにおそれもなく憎悪の眼を向けている女の子の顔にも眼を瞠った。

（おれの眼に狂いはなかったな）

田舎から身売りしてくる娘にはないキラリとしたものが垢の奥から透けて見えるのだ。

制服の巡査が手傷を負つた下男から事情を聴取していた。その傍にいた私服が竜二郎を見て寄つて来た。

「主人はいま取りこみ中でしてな、代りにわたくしがお用を承わります。この乞食が門前にいるのを見つけたのはわたしだから」

私服は貧相で陰険な眼つきで竜二郎の髯面をジロジロ見ながらポケットから手帳を取り出した。

つい最近も××財閥の番頭格が路上で凶刃に仆れたこともあつて、警察ではテロに對して異常なまでに神経をとがらせている。一介の乞食が白昼男爵邸に乗り込んで凶刃をふるつたとなると、これは特高警察の捜査の対象となる。しかもどうやら乞食をよそおつて門前を徘徊しつつ男爵が出てくるところをねらつていたらしいのである。

（女に眼をつけたのが、とんだ怪我の功名になったもんだ）

竜二郎は苦笑いしつつ、刑事の質問に応じた。乞食父娘を邸内に呼び入れたいきさつについては適当にごまかして答えた。

「いずれ犯人の尋問が進み次第、署の方においでいただくことになるやもしれませんからお住まいを言つていただけませんか」

「この屋敷に寄寓している」

竜二郎は嘘を言つた。ここで天狗楼の名を出したら、またどんな眼で見られるか知れたものではないからだ。近頃の警察ときたら、華族に對しても横柄になつてきている。

娘も父親と一緒に連行されると聞かされて竜二郎はあわてた。怪我の功名が台なしになつてしまふ。

「まさか拘留になるんじゃないだろうな」

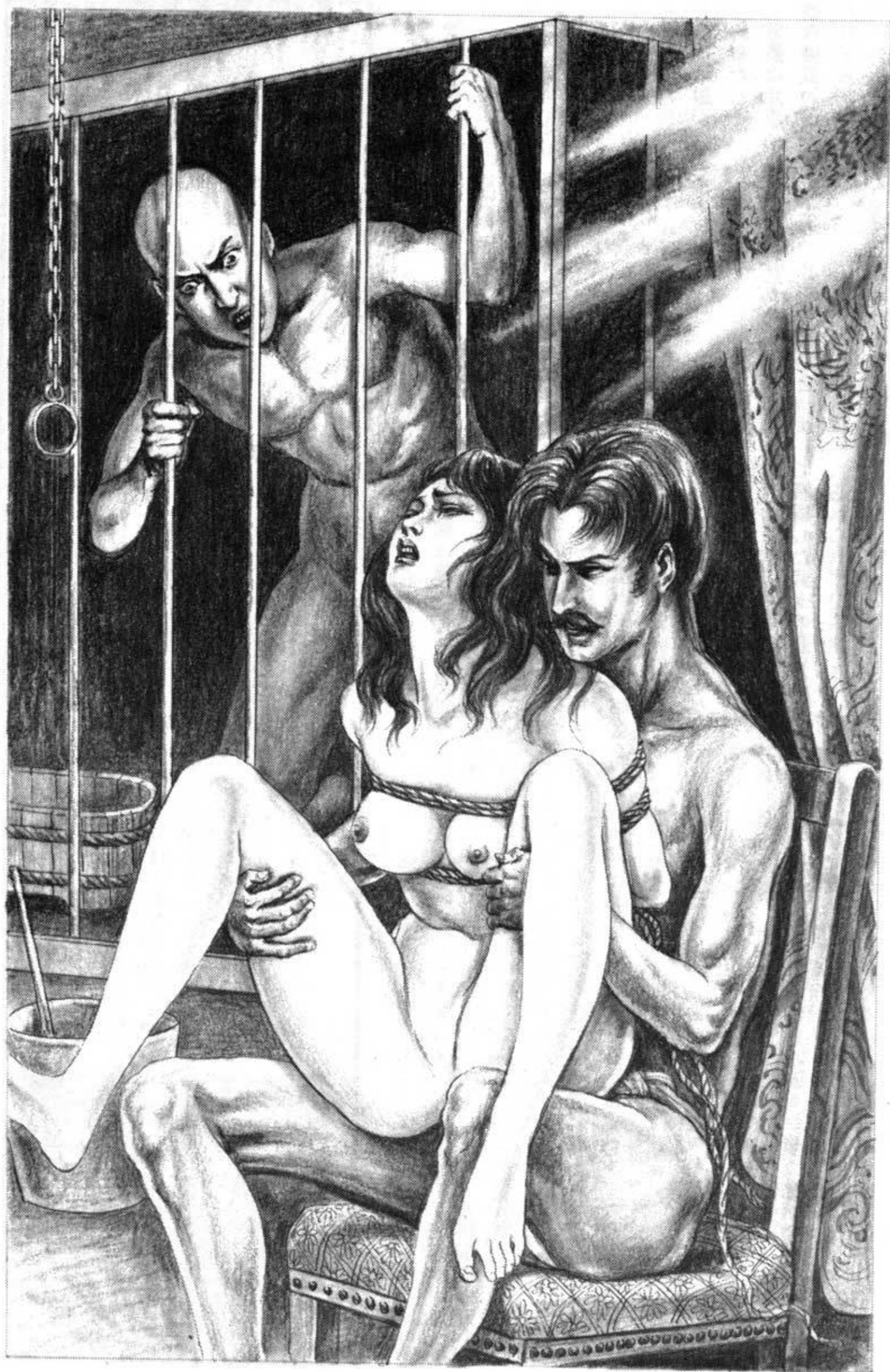
「身元引受人さえいれば、事情聴取がすみ次第帰します」

「おれが身元引受人になろう」

刑事は疑わしげに竜二郎を見た。

「親子を屋敷へ寄び入れさせたのも、娘がかわいそうに見えたからだ。聞けば地元の出身で何か事情がありそうだ。それくらいの面倒を見るよ」

事はシブシブうなづいた。警察としても事情聴取した後の娘の始末が面倒だったのだ





## あぶちすと激白

### コブつき股間縛り

私達夫婦は、以前から縛りに興味を持ち、子供達が寝静まってから、よく縄を持ち出して楽しませます。

中でもよくする縛り方は股間縛りといって、縄を結んでこぶを作り、それが下腹部の中心に当たるようにするのです。

ようにするのです。

丁度、ふんどしをしめるようにし、ついでに乳房や両手も後手で縛り上げてしまおうのですが、妻もこの縛り方は大好きなようでした。

そして少し中年太りの脂肪がつき始めた妻を布団の上に転がして、思う存分責めてやるのです。

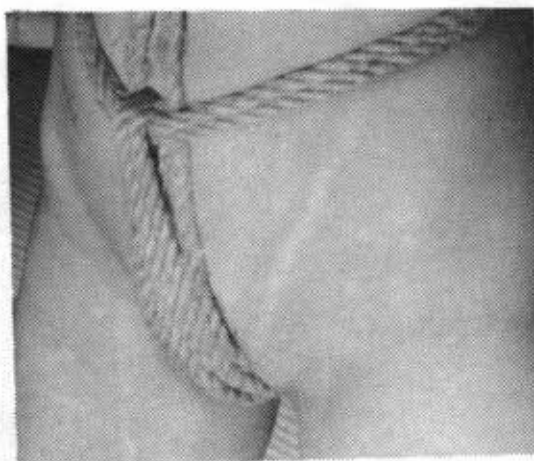
股間に通した縄を上下に引っ張

ると、こぶが増々下腹部にくい込

み、その見た目はゾクゾクするほど淫らなもの。

妻も、こぶが動いて小さな突起物や下腹部全体を刺激され、ヒイヒイ言って身体をよじらせま

す。きつく縛った縄も、白くて柔かい脂肪にめり込み、それも女ならではの風情です。(I・W)



ろう。

腰縄を打たれて曳かれていく父親にすがりつくようにしてついてゆく娘をいまいましてに見送った後、竜二郎はふたたび地下室に降りた。

男爵はお小夜の股の間にあぐらになってひと息入れているところだった。きたならしい乞食を見た眼には、お小夜の抜き切った股の白さは眼が醒めるようだ。

「何事だね」

男爵は片手で血と粘液に汚れたお小夜の無残な破瓜の痕をいじくり、片手で葉巻をつまみながら訊いた。

「いよいよあなたも凶漢に狙われるほどの大

物になったとみえますぜ」

竜二郎は傍の椅子に掛けながら言った。

(が、その凶漢が百姓上りの乞食とあつては殺されてもパツとせんが)

と胸の裡でつぶやいて、執事や下男たちから聞いた話を語った。

乞食は男爵の所有地の小百姓だった。それが近年の凶作やら農業恐慌やらで女房を身売りさせ土地も手離して乞食に落ちぶれたのだという。近頃珍らしくもない話だが、普通と

ちよつと違うのは、この百姓維新の際志あつて帰農した武士の裔で、その誇りが何として忘れられず、先祖伝来の短刀を呑んで、せめて恨み重なる地主の男爵にひと太刀あびせ

たいと、門前をうろついていたのである。邸内に呼び込まれたのをもつけのさいわいとして刀を抜いたというわけだ。老執事に白刃を突きつけてこれだけのことを名乗り、男爵に出会えとわめきたてた。

「近頃剣呑なのは主義者と右翼だけかと思つたら、さむらいの端くれまで飛び出すとはな」男爵、葉巻を横ぐわえにして、汚れた自分の指にしげしげ見入りながら、フンと鼻を鳴らした。

「まさにナンセンスの時代ですな」相槌を打ちながら、竜二郎の関心はもうお小夜の方に移っている。乞食の娘を警察にさらわれた今となっては、中断された欲望の対

象としてはお小夜しかない。

「ところで、お小夜坊の味はどうでした」

「生娘としてはまあまあというところかな。

本当の味が出てくるのはこれからだろう」

お小夜は気絶しているのか、反応を示すには心身ともに萎え果ててしまったのか、いじりまわされても死んだようになっていた。シートに散り敷いた乱れ髪に埋めた横顔は上気の色も褪めて、げっそりやつれたような頬に涙の痕をとどめているのがいたいたい。」「わたしにも味見をさせていただけますかね」

「うむ」

男爵は指の汚れをお小夜の内腿で拭いてベツドを降りた。

竜二郎はお小夜の下肢のいましめを解いた。

「どうする？」

ガウンを羽織りながら、男爵が訊いた。

「寺田くんは無事女になったところを見せてやろうと思ひましてね」

お小夜がヒューッと喉を絞って体をすくめた。

「それだけは……おゆるし下さいましっ」

ベツドから引きずり降ろされながら、お小夜は叫んだ。

「ほい、まだそんなに元気が残っていたとは

頼もしい」

縄尻を絞りあげて立ち上らせた竜二郎は、女になった尻をピシッとしばいた。

「いやあッ」

尻ごみする体を緞子のカーテンの間から拷問部屋へ突き入れた。

「お小夜さんッ」

「みないでッ……おねがいッ……」

ガクッと膝をつきそうになるのを引きずるように檻の前に押し立てた。

寺田は鉄格子を両手でガタガタゆさぶりつつ、口に泡を噴いてわめきたてた。

「ほら、お前のお小夜さんは、男爵のものになったぜ」

片脚の膝に手をかけて高々とかがげて見せた。そこはまださっきの凌辱の痕を拭われもせず、血とスperlマの混じった汚れをベツトリと内股にまで溢れさせ、さらに股を拡げさせられたことで、奥にたまっていたものまでドロリと流れ出している。

寺田は、ついさっき見せられた処女の時のその部分とのあまりの違いに、眼を剝いたままワナワナ慄えている。お小夜も身を慄わせて泣き悶える。

「さっきは痛がってばかりいたようだが、な

に、すぐよがり泣くようになるさ。なあ、お小夜ちゃん」

竜二郎は片脚を降ろしてやると、両手で乳ぶさを抱え込み、うなじに髯面をすりつけた。「今度は恋しい男の前で、このおれとつながって見せてやろうぜ」

「それだけは……」

あまりのことにあらがう気力さえ失せたかのようなお小夜の体をしっかと抱きすくめると、竜二郎はそこにどっかとあぐらをかき、スベスベしたしなやかな体を後抱えにして乗せ上げた。

「よく見ていたまえ、寺田くん」

見るなど言われても見ずにはいられなかった。男と女がこんな恰好でも交われるとは想像もできないことだった。真っ白なお小夜の内股が男のあぐらをまたがされて裂けんばかりに拡がり、その開いた肉の合わせ目をうしろからヌツと伸びたドス黒い肉棒がうかがっている。その眼を剝くほどの逞しさと長さに寺田は思わず自分のものを覆った。

竜二郎はこれを頼もしげに二度三度しごく（第二話了）



# 沢田多恵の青春彷徨

心優しきサディスト・ロマン派  
王氏よりご寄稿を頂きました。  
一時縛りモデルの女王と騒がれた  
美少女への温味豊かな鎮魂歌

沢田多恵嬢は、ホテル・ニュージャパンの火災にて、永遠の眠りにつきました。合掌。

## ロマン 派生

### ■SMモデルとの邂逅

東京近県のある市を歩いていたら、街角の電柱に貼ってあるストリップ劇場のポスターが目についた。

女&女、SMショーという文字の隣にモノクロの写真で猩吊りにされた女を、前衛風のメイクアップをした、多分男だろうと思われる人物が責めているポスターだった。

私はかねてから、SMショーで、女が女を責めるのを見たいと思っていたので、大いに興味を覚えて、そのポスターを凝視した。というのは、女&女、SMショーという文字が女と女の演ずるSMショーという意味なのかそれとも、女と女のショーおよびそれとは別のSMショーという意味なのか確かめたかったからである。こんなことを書くと、ロマン派生とは随分疑り深い人物だと思われるまいそうだが、私だって最初からそんなに疑い深かったわけではない。ストリップ劇場のポスターでは何回も痛い目に合ってたのでついつい、慎重になってしまっただけである。

たとえば、昨年暮れ頃、報知新聞の映画、劇場案内の広告で「前田真理子東京奇談倶楽部」と書いてあった。私は前に東京奇談倶楽

部のSMショーを見たことがあり、これは仲々いけるものだったので是非また見たいと思っていった。前田真理子なる女性には知らなかったが、東京奇談クラブに所属する人物であろうと簡単に考えたのが間違だった。

池袋のスヨイ劇場というのは、ビルの五階か何か高い所にあるのだが、一階のエレベーターの乗り場のあたりには、殆んどポスターもろくに貼っていないので内容はよくわからない。

エレベーターを降りて、切符売場の所には上演時間などが書いてあるが、ソクサと切符を買って中に入ってしまうので、ろくに読まなかった。椅子に坐ってから、もらったパンフレットをよく読んでみたら、なんと、この劇場では昼の部と夜の部では出演者が違い、昼の部のトリが前田真理子のポラロイドショーで、夜の部のトリが東京奇談倶楽部ということだった。生憎と私は夕方そこに入場してしまいい夜は、別の用件があったので夜の部のトリまで見ているわけには行かない。それで着席して十分足らずで席を立ち劇場を出た。

出口の所で見ると「昼の部と夜の部は出演者が変わります」とちゃんと書いてあった。私は入場する時はあわてていたのと、昼と夜で

出演者が変わるなどとは毛頭考えていなかった  
ので見逃がしてしまっただけ。

新聞広告やポスターは字数が限られている  
ので、文意がよくわからないものがしばしば  
あるが、とにかくひたすらにSMシヨウを見  
ようと考えている私には、しばしば肝腎のシ  
ヨウを見られないことがある。

そんなわけで、「女&女、SMシヨウ」も  
一寸心配だったが、いずれにしてもSMシヨ  
ウがあるのは間違いないので、とにかく劇場  
を探して見に行った。

普通、劇場の切符売り場には入場料と上演  
時間が書いてあるものだが、こゝにはそれが  
ない。入口附近に男が二人、三人とウロウロ  
している。

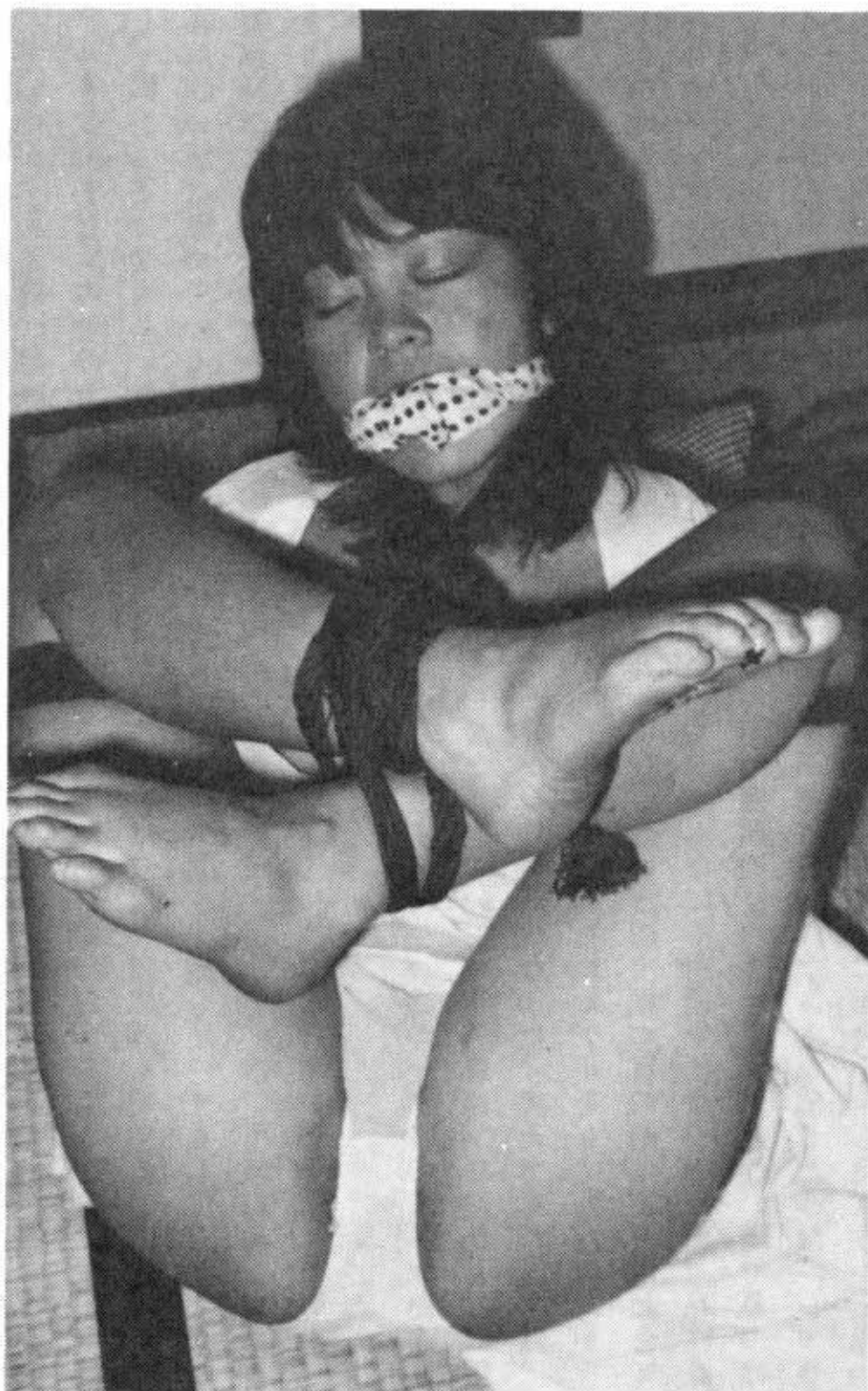
「幾ら？」ときくと

「六千円」とぶっきらぼうな返事が帰ってく  
る。いささか高いな、と思ったが今更引き返  
しにくい雰囲気もあって金を払い中に入ろう  
とすると、男が、

「ちようどSMシヨウをやってるよ」と云っ  
た。

中は三十人足らずのお客が出べそを囲んで  
坐っていた。

男の云った通り、SMシヨウの最中だった。



若い女が、もう一人の若い女を責めていた。  
たしかに、女が女を責めるSMシヨウなの  
で、まず私はホッとした。シヨウの様子は、  
途中から書いたのでは具合が悪いので、もう  
一回最初から見たのを詳しく紹介することに  
しよう。その時は、もっぱら私は責められる  
女の顔をよく見ようと、暗い照明の中で苦心  
していた。

やせ気味で乳房はペチャンコだった。どうい  
うわけか化粧を殆んどしていないので、何か  
素人っぽくも見えるが、それでも垢抜けした  
ところもあって、まず美人と云ってよい。  
私が入場すると間もなくそのSMシヨウは  
終って、休憩時間となった。  
舞台を片付けるため、劇場の男が出て来た  
ので、私はきいてみた。

その女は年令二十四五才、色が白く、やや  
「今のSMシヨウの女の子はなんと云う名前



なの？」

「さて、えーと、ネコの方がマリーと云ったかな、日活の女優だよ」

その男もよく知らない風だった。

マリーと云う名は知らなかったが、日活の女優と聞いて、ふっと私の頭の中に、ある女の顔が浮んだ。

「そうだ。あの娘だ。あの娘に間違いない。ええと何んと云ったっけ。多絵、そうだ沢田多絵だ」私はそれを思い出すと、急に胸がドキドキして来た。

沢田多絵は一時SM雑誌の縛られモデルをやっていたが、その後女優になり、高橋伴明監督の映画などに出演していた。主役とまでは行かないようだし、私の見た範囲では縛られたシーンもなかったから、本誌の読者で御存知の方も少ないことだろう。

その沢田多絵を何故私が知っているかというと、それは次のような事情である。

## ■甦える縄肌の感触

昭和五十二年頃だったと思うが、神田の絃映社という出版社から「SUN AND MOON」と云う名のSMのミニコミ雑誌が出ていた。当時私はせっせと同志に雑文を投稿稿

していたが、ある日、絃映社から、私に「モデルを使ってビニ本を作りたいから、縄師として腕をふるってもらいたい」と依頼された。私は固い所に勤めているサラリーマンなので警察騒ぎにでもなったら困ると思ったが、あまり露出性が強くなくても良いということだったので、引き受けた次第である。

その日の撮影の細かいことは省略するが、その時のモデルが沢田多絵だった。どこかの大学の学生だといっていたが、とても品が良く、言葉遣いもサチンとしていて礼儀正しくどこか地方の良い家のお嬢さんが、こっそりと、アバンチュールを楽しんでいるように思え、とてもお金のためにアルバイトをしているという雰囲気ではなかった。一寸茶目ッ気もあって明るい感じで、その上休憩時間にお茶を入れてくれるなど、とても可愛いくって気分の良いお嬢さんだった。私はビニ本としては異例な文章をその写真集の後の方に載せてもらって、沢田多絵をほめちぎった。

私の縄師としての腕が良かったのか、多絵の縛られ姿が可憐だったのか、露出性はたいしたことがなかったのに、そのビニ本はかなりよく売れたらしい。

SUN AND MOON誌が廃刊され、

私も、絃映社と縁が切れたので、その後沢田多恵とは何んのつながりもないが、沢田多絵のことは、時々頭に浮んで来たものだった。

もう大学を卒業して、すましてOLにでもなっているか、あるいは、もう結婚して銀行員の奥さんにでもなっていると思っていた。

女&女SMショウのマゾ役の女が沢田多絵だと気がついてから、私はソワソワと妙に落着かない気分になった。考えて見れば、四、五年前から縛られモデルをしていたのだから現在こういう形で私の目の前に姿を現わしても、そんなに不思議ではないのだが、私には何か親類の女の子を思いがけない所で見つけて不意打を受けたような感じだった。ショウの合い間に彼女に面会を申し込もうかと思っただが、どうも劇場経営者はゴックって怖し気である。幾らかチップを出せばとりついてもえらるだろうか、などと考えていると、現在目前で演じられている普通のストリップはうわの空で突然目の前に立ったストリップのナニが、私の視野一杯になって、あわてて拍手を送ったりしたものだった。

「次はSMショウです。拍手」という声とともに、一人の男が出て来て、出ベソの敷物を

裏返しにした。ローソクの屑が附着するので、そうしたのだろうが、敷物の裏はザラザラしていて、その上に縛られた多恵の肉体を横たえるのは可哀そうだなと思った。多絵には白い毛の長いムートンの上で縛られるのが似合うのになあ、などと考えるのは、SMすなわち残酷と同じと考えている人には理解出来ない心境だろう。

## ■網タイツにレオタード

さて、舞台が暗くなり、ディスコ調の音楽が流れると、元気よく多絵が登場した。赤く薄い上衣と黒い半分すけて見えるショーツでまだ縛られていない。

出ベソの所で、天井に組んだ鉄パイプの枠から吊り下っているロープを手にして、ひとしきり踊る。その踊りが結講さまになっているのが、あれからの年月を感じさせて、私にはむしろ悲しかった。

「こらっ！ 多絵、そんなに腰を振るんじゃない」私は心の中で叫んだ。

S役の女が、手に縄やら鞭やら責道具を沢山持って無造作に登場した。

引きしまってプロポーションの整った二十五才位の女で、黒い網タイツに黒のブーツ、

そして黒いレオタードをつけた姿は仲々きまっついで、立派なサチスチンと見えた。こちらには濃い目の化粧をして、一寸きつい感じの美人で、その上、両肩、太腿その他に大蛇の入れ墨をしているので、一層S的ムードをかき立てた。

そのサチスチンは、黒い縄をとり出し、多絵の両手を前手にぐるぐると縛る。その縛り方はかなり丁寧でキッチンとしたものであり、縛りのテクニクではかなりうるさい私も合格的をつける程度であった。

多絵の両手を挙げさせて天井の鉄パイプに固定すると、多絵の赤い上衣をまくり上げ、手首の所にまきつけた。

サチスチンは、多絵の後方から、九尾の鞭で数回はげしく打った。それは全く手加減なしに多絵の背中に炸裂し、ビシッと肉を打つ大きな音がした。そばに居た観客が思わず身をそらした。多絵はウツ、ウツと小声でうめいた。

サチスチンは多絵の首から黒縄をかけ、たんねんに菱縄をかけて行く。菱縄では縦縄のコブの位置によって美しくも、だらしなくもなるのだが、このサチスチンは結構よい位置にコブを作って行く。特に三つめのコブが

丁度多絵のアヌスに当たっていて、ショーツをずらせても、アヌスを隠す役目を果たしているのは、意識的にやっているとしたら仲々の腕前といつてよい。

縦縄に横縄をからませて菱縄を作るのだが残念なことに、両手を万才してあるので、横縄は腕にかかっていないのは私の云う死に縄となつてゐる。しかし、これはショーの進行上止むを得ない、とものわりの良い所を示しておこう。

菱縄が完成すると、多絵の右足首に縄をかけて後方に引き上げ、斜み弓吊りのような形になる。

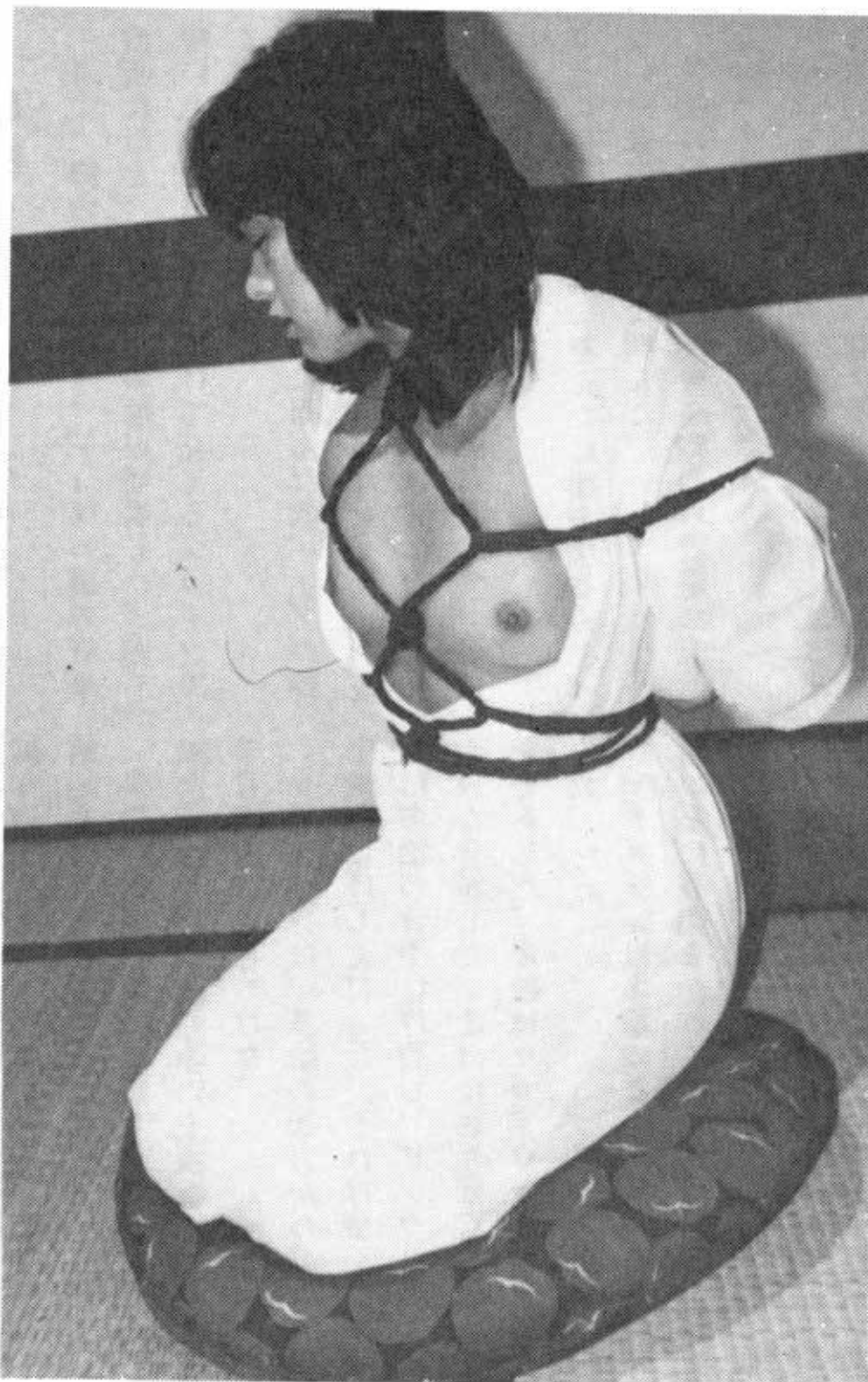
サチスチンは、赤く太いローソクをもって来て、多絵の背中や横腹にポタポタと落す。

ローソクは、周囲は赤いが、中は白いローで、赤大根のようなものである。したがって多絵の肌についたロー涙は赤ではなくて白いで、あまり目立たない。

ひとしきりロー責めが終ると、多絵の両手首の縄をほどいた。

崩れるようにへたり込んだ多絵の両手を後手に廻すと、その細い手首を黒縄で縛り、二の腕の上から乳房の下を通して縛った。これで、このショーの中で、最も美しい形の縛り





になった。このままその縄目をしばらくの間鑑賞したかったが、サチスチンは多絵をうつ伏せに押し倒し、両足首も墨縄で縛って手首と結びつけ、逆エビ縛りの形にした。

次いで例の赤大根のローソクをとり出し、またロー責めを加える。

その間、サチスチンは無言で表情もあまり変えない。それは冷たい表情というのとは少し違って無表情というのに近い。あまり力み

返ったオーバーな表情は、むしろ白けるし、特に女の場合ヒステリックに見えるから、あまり派手な表情はいらないが、一寸意地悪そうにニヤリと笑ったり、逆に怖い顔をしたり少しは言葉を発してくれた方がもっとショウとして優れたものになると思う。冷酷な表情はよいが、無表情はよくない。

多絵は結講苦しそうな表情をしているが、声が小さくて、音楽に打ち消されて聞きとり

にくい。サワリの部分では音楽はとめてしまつて、多絵の悲鳴をタツプリと聞かせる方が、はるかに迫力を増すであろう。

逆エビに縛られてうつ伏せになっている多絵を、サチスチンが黒いブーツの先で仰向けにしようとするが、矢張り足だけでは無理で手をそえて引き起した。この際ブーツの底に柔らかいスポンジでも貼っておいて、それで多絵の身体をふみにじったら、そんなトリックを知らない観客はドキッとするだろう。

多絵を引き起したサチスチンは、後手の縄をほどくと、すぐさま前手に縛り直し、足首とつなぐと、いわゆる猩吊りの形にして、滑車で吊り上げた。いくら滑車が使つてあつても女の体力で、一人の女を吊り上げるのは仲々大変だと思うが、このサチスチンは、自分の身体をしなやかに、たくみに動かして、手際よく吊り上げた。滑車を通したロープの長い縄尻を鉄パイプに縛りつけて固定するのは技術的にかなりむずかしいもので、私が見た多くのSMショウで、皆、苦心をしていた。これはヨットなどで使うクリートという金具を設置しておけば簡単なのだが、そうでないと、長い縄尻を何回も鉄パイプに巻きつけたりしているうちに、どうしてもゆるんでしまう

ものである。

ところが、このサチスチンは、そのむずかしい縄尻の処理を、他のSMショーの誰よりも手際よくやってのけて、私は感嘆させられてしまった。

恐らくこのサチスチンは、どこかのSMクラブなどでかなり経験を積んでいるのである。とにかく縛りはかなり上手である。

さて、猩吊りにされた多絵を、前後にブラブラゆすぶったりゆるく回転させたりする。

この辺は他のショーより特別迫力があるわけでもない。多絵の悲鳴も、もっと派手な方がいい。しかし、ここで多絵のショーの尻の方をまくって、小さなアヌスに、造花の根本を挿入して責める所は仲々エロチックであった。造花の根本には多分コンドームと思われるものがはめてあって、それがゆれ動く所が大変刺激的であった。

しかし、前に書いたように、丁度アヌスに当る所に、縦縄の結び目が当たっていて、アヌスは殆んど見えない。そして、その前に続く部分は、そこだけ不透明の黒布になっている。ショーのために見えない。観客は、その見えない所を見ようと目をこらしていたが、私は彼等に多絵のあそこを見られないことをむ

しろ嬉しく思った。別に私は多絵の伯父さんでもパトロンでもないのに、妙な心配りではあるが。

多絵に限らずSMショーに登場する女達はいし合わせたようにショーをとらない。稀にとることがあっても、すぐに何かを当てて股縄をかけたりして、まともに露出することはない。同じストリップ劇場に出演する女達が全員露出するのと好い対照である。それは多分、ストリップとの間に労働協約があるわけではなく、SMショーの女達のある種のプライドから自然発生したものであろう。ストリップからすれば、私達は、あんな変態ではないというプライドがあるかも知れない。この点に関しては、私はこれでいいと思っている。SMショーは、必らずしもそのものズバリの露出がなくても、別な魅力があるのだから。

## ■能動的なレズ行為

さて、猩吊りから降ろした多絵を、一息入れることも許さず、今度は右手首と右足首、左手首と左足首とを別々に縛り合わせ、いわゆるカニ縛りの形にした。これで、左右に大きく広げて縄尻を固定すれば随分魅力的なス

タイルになるので、大いに期待したのだが、そういう具合には縛らず、左右の手足は接近して縛ってしまった。だから、前の猩吊りとあまり変らないスタイルになってしまったのは残念である。このスタイルで、また何回か九尾の鞭で打ちすえたようだが、この辺の記憶は定かではない。

この姿で仰向けに寝かせ、またローソク責めにしたが、今度は、白く細いローソクを二本持ちだし、多絵の足の趾の間にそれをはさんで火をつけた。水平に趾にはさまれたローソクの先からロー涙がしたり落ち、それが多絵の小さく整った尻の上に落ちた。多絵が「アッ、アッ」と声をあげた。やっとその頃になって出ベソが廻転し始め、あらゆる角度から、多絵の姿態が見られた。私はさらに者になっている多絵を見ているうちに、いつの間にか小声で、

「多絵、多絵」と呼んでいたが、騒々しい音楽にかき消されて、多絵の耳には届かなかったことだろう。

最後にカニ縛りから解放した多絵の両手首を前手にしぼり、へたりこんでいる多絵を舞台の方へと引きずって行った。

多絵はズルズルと引きずられながら、途中



から弓反りになって立上った。

サチスチンは、多絵の手首を頭上に挙げて鉄パイプに縛りつけた。この時も多絵の手首を傷けないよう配慮して縛っているようだ。

次に左の膝を曲げ太股と脛とをひとまとめにしてかなりきつく縛った。そして、そこから長い縄をつけて、出ベソの上にある鉄パイプに引っかけて、一気に引っばった。多絵は手首と、左の太腿との二ヶ所で斜仰向けに吊り上げられた。右の足首も一旦は床をはなれて吊り上ったが、サチスチンが縄尻を処理している間に、身体を斜めにして右足がやっと床にふれた。つま先立って体重の一部を支えている多絵の身体がとても綺麗に見えた。サチスチンは、その多絵の右足首にも黒縄を巻きつけると、その縄尻も前方の鉄パイプに通して吊り上げてしまった。

多絵は、一寸ねじれた形で仰向けに水平吊りにされてしまった。この方が体重がモロにかかるので多絵に与える苦痛は大きいだろうとは思うが、仰向けの水平吊りはあまりよい形とは云えない。右足が僅かに床についていたその前のポーズの方が美しいと思う。

水平吊りの多絵にサチスチンは、大きな羽毛のはたきをこすりつけて刺戟する。多絵は

身をよじらせる。なかなか良い表情を浮べるが、相変らず声はあまり出さない。

サチスチンも無表情のまま、さっさと自分の仕事をすすめている。

多絵の両股の間にサチスチンが顔を入れてなめているようだが、蔭になってよくわからない。やっと多絵の足を降ろし、手首は挙上したままゆっくりと黒縄をほどき始めた。

私はてっきりこれで終わりかと思った。一切の縄をとり外された多絵は、グッタリとノビてしまうのかと思ったら、そうでなくサチスチンにからんで行った。多絵はサチスチンの網タイツの上からその太腿にキスをし、うやうやしく、ブーツを脱がせる。そして、サチスチンの黒いレオタードも脱がせる。サチスチンは、黒い網タイツだけの姿になり、もちろんあそこもすけて見える。ブーツを脱ぐと、それまでのやや生意気な感じから、急に女っぽくなり、むしろ多絵よりも大きな乳房も可愛らしく見え、怖ろし気な蛇の入れ墨も気にならなくなる。

回転する出ベソの上で、二人のシックスナインや、むしろ多絵の方が能動的に攻撃する所は仲々ムードのあるレズショウだ。多絵はサチスチンの網タイツの上から彼女の局所を

責めるのだが、それでも確かに舌はあそこに届いているようだ。サチスチンも、それまでの無表情とは一変して、うめき声をあげ、眉をよせて恍惚の表情を浮べる。それが演技だとしてもなかなか素晴らしい。

二人で抱きあってキスする時には、確かに一方の舌が一方の口の中に入っていた。

観客は、SMショウの緊張感と、ある種の後ろめたさから解放され、ややなごやかな気分となって私語などを始めた。

「おいっ見ろよ。本当になめているよ。こりや本物のレズだな」などという声が耳に入ってきた。

二人は立ち上って横に抱き合ったまま一礼してショウが終わった。観客はおつき合いでない本当の拍手を自発的に送った。

### ■私の多絵は何処に

このショウは、私が今まで数多く見て来たSMショウの中で一位か二位にランクしてもよいと思われる素晴らしいものだった。

もちろん私の沢田多絵に対する好感から甘い点をつけている点もあるが、それを除いても、幾つも優れている部分があった。

まず、女同士のSMというのが珍しい。

そして、沢田多絵はもちろん、入れ墨のサチスチンも若くて美しい。

次に、サチスチンの衣裳もなかなかセンスがよいし、使用する縄も黒一色に統一してあるのは、美的な感覚が行き届いている現れである。

また肝腎の縛りの技術もかなり良い線を行っていて、十分に合格点をあげられる。

とにかく、SMの美的感覚、私の云う縛りの美学のセンスが、一貫しているように見えた。これはサチスチンが考えたのか、多絵の方が考えたのか気になったが、私にはどうも多絵のセンスではないかと思えて仕方がなかった。

というのは、数年前に私が多絵を縛った時に黒い縄を使い「一つの縛りは一種類の縄で完成しなければ美しい」などと説明したことがあるのと、当日ショウの中では使われなかったが、舞台の鉄パイプに飾りのように吊り下げられていた黒革の首枷、手枷などは、以前私が多絵に装着させたものと同種のものであった。そこで、勝手な想像をたくましくすれば、数年前の私の縛りを覚えていて、それを今回のショウを考える折に参考にしたのではないか、などと思っても見た。

多絵は一日四回、十日間連続してこんな風に責められていて身体がもつのだろうか。ギヤラは一体幾らもらえるのだろうか。夜はホテルに泊るのか家に帰るのだろうか。相手役のサチスチンは一体どんな生活をしているのだろうか。そして、ヒモのようなものはないのだろうか。

私は多絵のことを次から次へと色々と想像しては、余計な心配を募らせていた。

思い切って面会を求めに行く勇氣もなかった私が、ここで、その心配の一端をはき出しているのだが、一番気にしていることを最後に書いておこう。

「こらっ！多絵、お前はその右の尻に小さな刺青を入れたな。ガーゼで覆ってバンソコウで止めて隠してあったけど、俺の目は誤魔化せないぞ。誰れかに無理に入れられたんだと思うが、今度どこでお前に出会った時、あの刺青が大きくなっていたら承知しないぞ。幾らお前がマゾでも、身体を傷つけることだけは止めてくれっ！おい、わかったか多絵っ！

挿入の写真は五年前のもので、まだ少女らしい可憐な多絵は、現在でもそんなに変わっていない。

## 新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集長宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

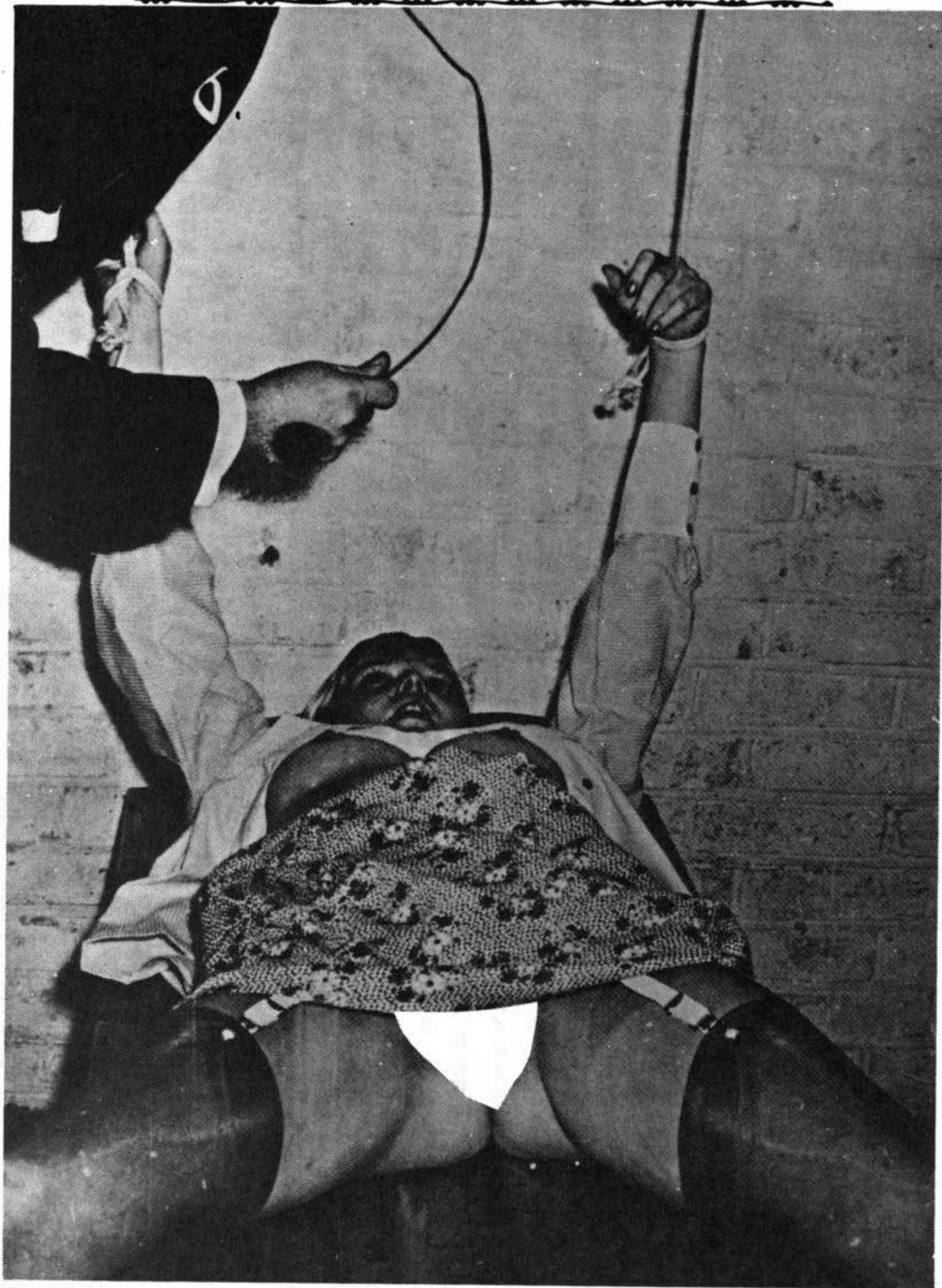
〔宛先〕

東京都中央区銀座1の22の10  
銀座ストークビル・5F

芳友社・編集長



## 外国のSMマニア写真









# 妊婦ハント 膨満の快樂(一)

前田八郎

## プロローグ

私が、妊婦に興味を持つようになったのは、数年前、東北のひなびた山村の温泉宿で出産間近い臨月腹の若妻とふとしたきっかけからセックスをしてしまい、その味のよさに驚いたことから始まったのです。あの丸々と膨んだ臨月腹を抱えてセックスする時の異様な快感は普通では味わえず、それ以後、私は妊婦以外に興味を持たなくなってしまうのです――

## 初産・美子の臨月腹

私は、宝石のセールスマンをしており、各家庭を訪問するので、町中ではあまりみかけない妊婦にも接する機会が多く、ハントのチャンスにも恵まれることがあります。二十四才の若妻、美子をハントしたのも、ある団地へセ

ールスに出かけた時のことでした。訪問販売というのは、売る商品がなんであれ、あまり信用されず、剣もホロロに追い返されることが多く、そんな時には、

（チエツ、スマシこんで、どうせ昨夜は亭主とイイ事したんだろうに……）と、内心、腹を立てるのですが、そんなことはおくびにも出さず、根気よくセールスして歩くほかはありません。

団地のようなところで、セールスを成功させるには、世話好きの奥さんを安物のアクセサリなどで買収（？）

しておいて、あちこち口をかけてもらうほうが手つとり早いものです。そうやって集めてもらった奥さんたちに宝石やらアクセサリやらを売りつけるわけですが、団地の人妻たちというのは噂話が好きで、いろいろと興味を引く情報を提供してくれます。

例えば、何号室の奥さんは四〇を過

ぎているのに毎晩セックスする、とか何号室の誰れそれさんは男好きで、旦那の宿直には若い男を引っぱり込んでいる、とか、それはもう嫉妬まじりに言いたい放題です。

そんな噂話の中で、妊娠している若妻の話がでると、私はつい耳をそばだてずにはいられません。それに、他人の噂話に余念のない、おしゃべりな奥さんたちにしたって、いずれ妊娠することもあり、私のハントの対称になることだってあるのですから、適当にお世辞をいいながらおつきあいしておくにこしたことはありません。

宝石やアクセサリのほうも、三、四人の奥さんたちにローンで買ってもらい、妊娠中の若妻の情報も仕入れて私は、月末にまたその団地へ訪問することになりました。

月末になって、集金を済ますと、私は早速、妊娠中の若妻のところへ出か

けてみました。その時はもう、その若妻をハントしてやろうという下心があったので、私がコレクションした妊婦写真の中から、出産場面の写真を数枚カバンに入れて行ったのです。

一目で妊婦と判る体つきになっているその若妻は、苦しそうな顔つきで応待していました。私が、

「オメデタのプレゼントをお持ちしたのですが……」

という、途端に表情が柔くなり、部屋へあげてくれました。

安物のアクセサリをプレゼントしてから、おもむろに妊娠の話を始め、その知識を披露すると、美子というその若妻は感心した様子で私の話を聞いていました。

美子は小柄ですが、顔立ちは女優の関根恵子に似ていなくもなく、ちよっという女です。どうやら気を許し始めた頃合いを見計って、お祝い用にと持ってきた人工石のネックレスを差し出すと、

「アラッ、すてき、わたし、こんなのが丁度欲しいと思ってたところなの」と、すっかり気に入った様子です。

そこで、膨らみ始めた彼女の腹をさりげなく眺めやり、

「奥さん、だいぶ苦しそうですね」と、声をかけると、

「5カ月位いではそう目立つほどじゃなかったんだけど、最近、急におナカが膨んできて、慣れないせいか苦しくて……」

と、ホーッと溜息をついています。

そこで、私はこの時とばかりに、

「実は、私の実家は産婦人科の医者をして……」

しているんで、私も診察ぐらいはできるんです。よかったら診てあげましょうか」

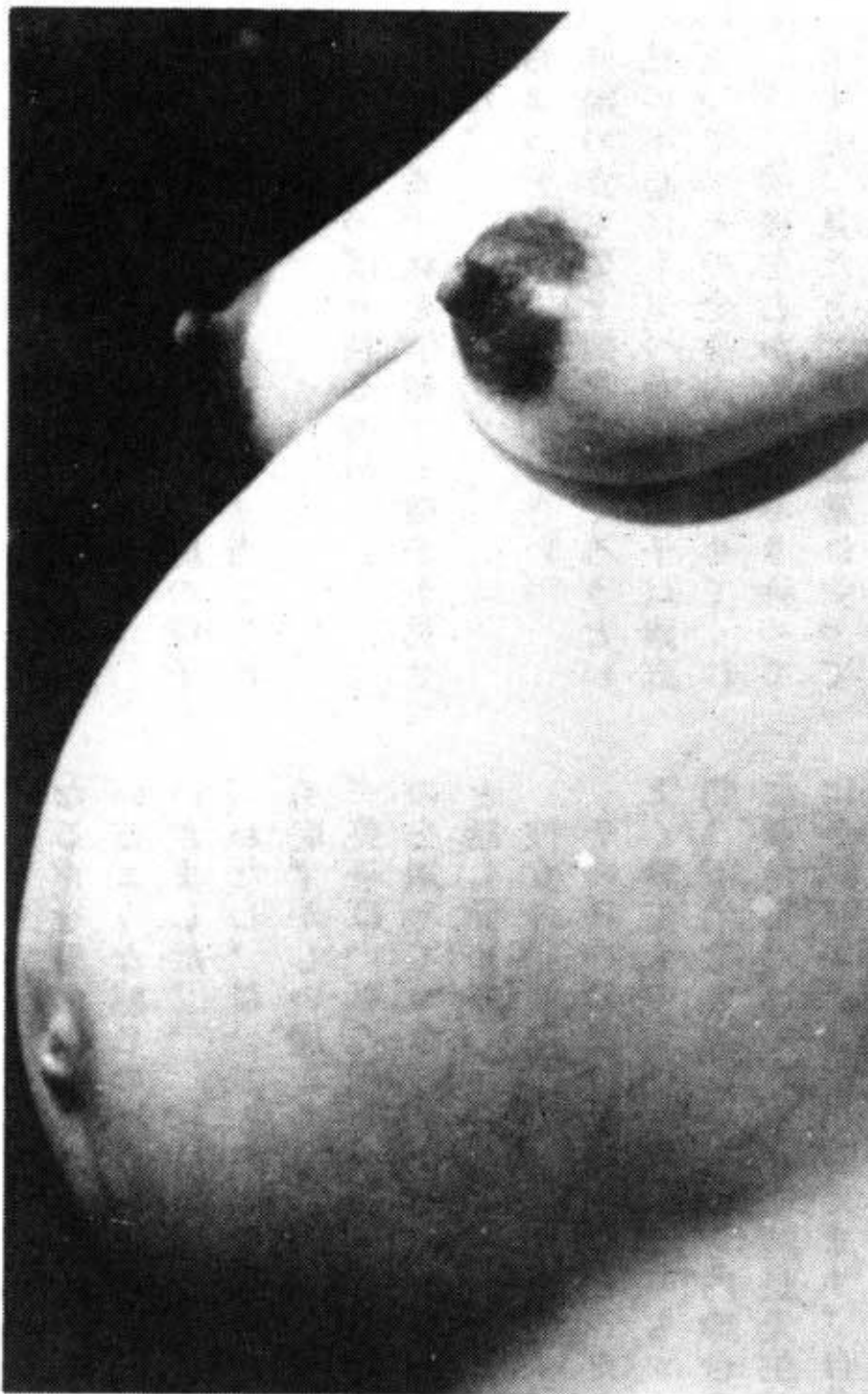
と、口から出まかせをいいますと、

「そんなこといったって……、わたし恥ずかしいわ」

などと、一応恥ずかしがってみせるのです。

私は心の中で、

（なにを気取ってるんだ、産婦人科へ行けば、両足をおっぴろげて医者を目



巨大な臨月腹



それでも、美子はよほど苦しい思いをしているのか、とうとう、

「この前、お医者さんに診てもらったばかりなんだけど……じゃ、内緒にしておいてね」

と、承知してくれたのです。

私は、彼女の考えが変わらないうちに、早速、肌着だけになってもらい、すました顔で診察を始めました。

美子は診察に便利なように前開きの肌着を着けていたので、シャツのボタンをはずし、岩田帯をとると、ぷっくりと丸く膨んだ腹がむきだしになりました。念願の妊婦腹を目の前にして、私の心臓はドキドキしていましたが、気取られぬように、

「やはり、裸になってもらわないと診察がやりにくいですね」

といい、パンティも取ってもらいました。裸で横たわる彼女の膨んだ腹を撫ぜまわしながら、下腹部の三角地帯を横目で見やると、黒くてふさふさした恥毛がかなり濃く茂っています。

美子の肌はホルモンに作用されてか、ツヤツヤと白く艶光りしており、肌理も細やかです。

「ウーン、妊娠6カ月ですね、これは……」

腹の膨らみ具合いや、正中線の様子で大体判るのですが、ズバリ当てられた美子は、

「へエ、やっぱり判るのね」

と、ますます私を信頼する様子を見せました。

「ちよっと立ってみてください」

妊婦の立ち姿を觀賞してやろうという私の下心にも気づかず、美子は素直に立って、その全身を眺めさせてくれました。前後左右からたっぷり眺めて「大丈夫、見たところ、正常に育っているようです」

というと、彼女は安心した表情を見せて、

「でも、不格好でしょ、こんなにおナカが出てるんだもの」

と、自分の腹をさすっていました。

そこまでいけば、指を入れて内診させてもらっても大丈夫だろう、と私は彼女をベッドへ寝かせ、両膝を立てさせました。

「さア、少し中也診てみましょう」

興奮で、つい上ずってしまいそうに

なる声を懸命に抑えながら少し濡れているような感じの花唇を両側へ開いていきました。

「わたし、ね、この前の診察でとっても恥ずかしい思いをしたのよ……」

美子は、私の指が内部を探り始めたのを知って、意識的に気持をそらそうと話し始めました。

彼女の話というのは、こうです。

その日の診察は院長先生だったのでよく診てもらえると思ったのもツカの間、下半身丸出しの姿で、内診台の上に両足を広げていると、院長先生がなにか話している声が聞えます。自分にか話しているのではないので薄目を話しかけているのではないので薄目を開けて見ると、院長先生が指を入れて内診をしながら、四、五人のインターンに説明しているのです。

インターンたちによく見えるようにならしく、美子の恥部は思いきり開かれ、それを次々と顔を寄せて覗きこんでいるのでした。

いつもは、ほんの2、3分で済む内診なのに、20分以上も思いきり開かれ、指でグルグルとかきまわされ、おまけに若い男たちが好奇心をかきたて

られたような熱い視線でアノ中を覗き込んでいたので、体がカーッと熱くなり、いつのまにかたっぷりと濡れてしまった、というのです。

「女って、いったんそうになると、もうなにをされても感じるだけなのね……」

院長だけでなく、インターンたちにも次から次へと指や器具を差し込まれ、呻いたり、喘いだりしているうちに、まるで、夫の前技を受けているような感じになり、美子はとうとう氣をやってしまったらしいのです。

診察が終ったことを看護婦に告げられて、ようやく我にかえった美子は、氣をやったことまで看護婦に知られてしまったと思い、恥ずかしくて、「穴があったら入りたい、とはあのひとだわ」といつてました。

「たとえ、相手が医者であろうと、ここをいじられて快感があるというのは正常で健康な証拠ですよ」

私の指先へ伝わるほどの愛液をあふらせている美子に、なおも攪拌してやると、彼女はフンフンと鼻息を荒くさせ、腰を持ちあげてきました。

それまでの経験から、ほとんどの妊婦は、セックスに飢えているのを私は知っていました。

妊娠すると、大抵の夫は、妻の体や胎児のことを考えてセックスを控えるようになるのですが、妊婦がセックスを欲しがらない時期はツワリの時だけで、あとは出産間際まで普段と変らない性欲があるものです。

それどころか、妊娠のせいで分泌物も多く、いつもアソコが濡れてムズムズしている上に、夫がぜんぜんかまってくれないので、普段より性欲が高まっています。

そんな時に、いったん体に火がつけば、あとはもう前後の見境もなく、されるがままになってしまいうのです。

「悪い医者がいるもんだなア、それはきつと、奥さんが美人なんでカモにされたのかもしれない……」

「まさか……」

美人といわれて嬉しくなったのか、美子は私の指をキュッと挟みつけてきました。初産ですから彼女のソコはまだゆるんではいません。締めつける力も相当なものです。

「だって、そうでしょ、医者だの、インターンだのがグルリと取り巻いて、奥さんのココをみんなでいじくりまわしたんだから、輪姦と同じだ……」

「輪姦？　そ、そうかもしれないわ、だって、次から次へと……、アアッ」  
ドギつい話についてしまったのか、美子に感度があがってしまったのか、美子はピクンと体を震わせたかと思うと、いきなり私にかじりついてきました。

こうなれば、もうなにをしても大丈夫と思い、美子の口を吸ってやりますと、待っていたように私の舌をチュウチュウと吸ってくれます。その間にも私の指は彼女のソコをまさぐっていたのですが、だんだん手が届かなくなり、仕方なく抜いた指でふさふさした茂みを愛撫してやりました。

「さア、今度は子宮鏡を入れますよ」  
しがみついてくる美子を放し、清潔なガーゼにくるんでカバンの奥へしまっておいた子宮鏡を取りだすと、彼女は、

「あなたって、ほんとのお医者さんみたいね」  
といていました。



私は産婦人科の医者ではありませんが、本物の医者以上に妊娠や出産についての知識があると自負しています。

世間にだって、本物の医者よりニセ医者のほうが評判がいい、ということがよくありますが、丁度そんなものです。ニセ者は本物より勉強しなくてはすぐ見破られてしまいます。

もっとも、私の場合、本物の産婦人科医だとはっていないので、気は楽です。妊娠や出産について並の男性以上に興味もあり、好奇心もあるのは確かですが、私の目的はなんといっても妊婦とセックスすること、あとはその為の口実でしかないかもしれません。

子宮鏡を入れて内部を覗くには、女の尻の下へ腰枕をさせたほうがよいので、ベッドの枕を使いました。腰枕をすると、美子の下腹部がよく見えるようになります、妊娠中の女性器がどんなものか、よく判ります。

全体にひと回りも大きくなって、陰裂はもちろんのこと、花唇も大きくなっています。また、女性器全体がプツクリと膨んでいる印象があり、厚みや大きさも増した花唇は両側へひろがり

加減になっています。小蕾は女によってまちまちですが、包皮から突出している女なら、ひどく敏感になっているのが普通です。

美子はどちらかというと、小蕾も小さく、包皮にくるまっついていて、指先でめくらないと姿を現わしませんが、鈍感というわけではありません。ずっと後に、夫はクリトリスを愛撫しないのかどうか訊ねたところ、

「そんなところは触ったことがない」ということで、彼女自身、クリトリスという言葉すら知らなかったようです。

彼女の茂みは濃くも薄くもない平均的なものですが、縮れかたはひどく、ほとんど一本一本が渦を巻いたようにクルクルと縮れていました。私が感心したのは、美子のアヌスがとてもキレイだったことです。普通、妊娠6カ月ぐらいになると、いつも下腹に力が入っている感じになり、その圧迫でアヌスが少し出ているようになるのですが、彼女の場合、ピッタリと閉じていて痔疾もなく、薄茶色の健康そうなアヌスでした。私は、アヌスにも興味があるので、指で触ったり、舐めてみたい衝

動に駆られました。最初からそんなことをして、美子を驚かしてもいけないと思い、次の機会にすることにしました。

子宮鏡は腰枕をさせたお蔭でらくらくと美子の体内奥深くへ没入し、私はさっそく全開にして内部を覗いてみました。

クスコ式子宮鏡には、大中小とありますが、大型は長さ十三センチ、全開にすれば直径五センチに開きます。これは、出産経験者（経産婦）に使い、中型、小型は初産の女性や膣口・膣部の小さめの女性に使います。妊娠すると、普通、膣内部は鮮やかなピンクからやや赤味を増し、出産が近づくにつれてますます赤味が濃くなるようです。

美子の膣内部もかなり赤味を増してぬめぬめと光っていました。女性の膣内部は普段でも濡れてるような状態なのですが、美子は妊娠して分泌物も多くなっている上、最前からの私の愛撫や子宮鏡を入れられ、内部を覗かれていたのでひどく興奮して愛液も出ているのでしよう。

丸々とした腹を突きだした妊婦が、

ひろげた両足の中心へ子宮鏡まで入れられている姿は、不様としかいいようがありませんが、その不様な格好が私をますます興奮させるのです。

両手で顔をおおって恥ずかしがる美子の姿をたっぷり觀賞してから子宮鏡を抜き取ってやると、愛液がべつとりと付着しており、彼女がセックスの前技と同様な快感を感じていたことを物語っていました。

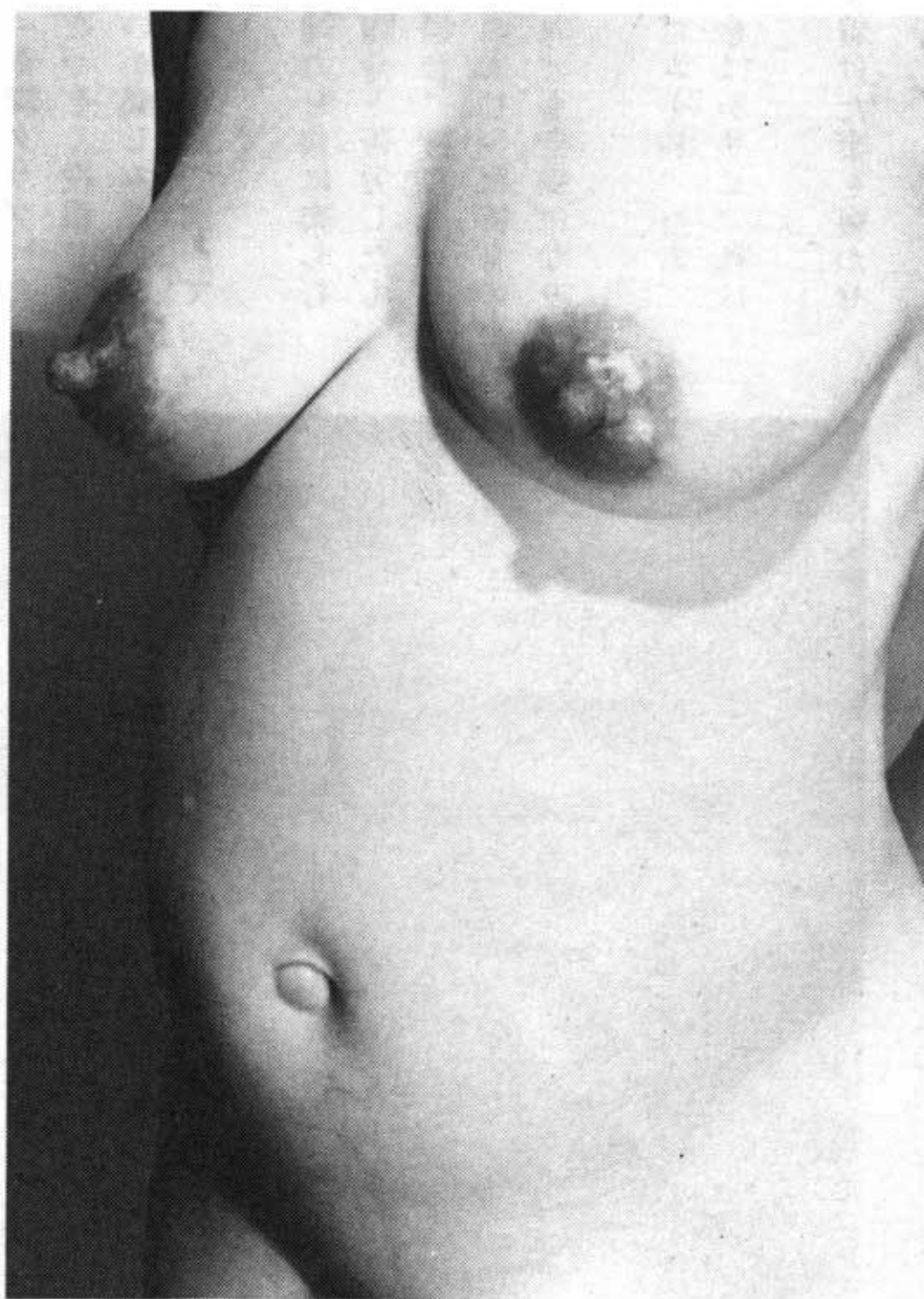
「はい、終わりましたよ。母体も健康だし、赤ちゃんも順調に育っています。今、6カ月中程だと思うけど……」

というと、産婦人科医がいったこととピッタリ同じだったらしく、美子はますます私を信用した様子でした。

そんな彼女がたまらなく可愛いく思えて私もベッドへ横になり、添い寝をしながら彼女を片腕で抱いてやると、口を押しつけてきました。しばらく、そうやって口をつけ合い、舌を吸い合っている、

「あなた、ひどく熱いわ、熱があるみたいよ」

と、ワイシャツのボタンをはずして首や胸にさわってみたり、ズボンの上か



妊娠6カ月の美子

ら太腿にさわったりしました。その様子から、ハハア、これはセックスをしたがっているな、と判断して、せっかくのチャンスだから、この際、最後まで行ってやろうと決めたのです。

そこで、急いでズボンとパンツをさげて、すでに硬くなっているものを美子の太腿へこすりつけると、彼女はすぐに握りしめてきました。しめた、と

思い、力を込めてヒクつかせると、彼女は、しばらく押し黙ったまま手の中のものをもてあそんでいましたが、やがて身悶えしながら、

「熱いわ、すごく熱いわ……」

と、呻くようにいいながら、熱く膨んだ先端を自分の太腿へ押しつけたのでした……（次号へ）



# 生ゴムに憑かれて

別府・仁志木 好美

近頃のSMマニアというと、すぐに女を縛ったり叩いたりするのが多いようだが、私のように生ゴムの妖しい魅力に取り憑かれたというようなのは少ないらしい。

私の、そんな性癖を育ててくれたのは「奇譚クラブ」だが、今度その復刊号が出るというので、さっそく投稿してみた次第である。どのような誌面になるのか楽しみだが、昔のようにいろいろな方面のマニアの文章や写真で飾ってほしいものだ。

私の場合、妻を口説き落して生ゴムの魅力を共に楽しむようになったのだが、そこへくるまでは随分と苦労したものである。プレイといっても、生ゴムの場合、身につけてそのピッタリと締めつけてくる感触や汗のまじった特有の匂いがいわけ、プレイをする時は二人とも全裸になり、生ゴム製品をじかに着ける。

妻には生ゴム製のホルセツトのほか、ゴム手袋、ゴム靴下などを着けさせ、その上からオシメをはかせる。私はオシメだけである。

ゴムシーツの上へ全身に生ゴム製品を着けた妻を寝かせ





て抱き合い、ビッシヨリと汗をかいたところで妻のオシメをはずして電動パイプで秘所を責める。汗でグッシヨリ濡れているから感度もよく、妻はたちまちアクメに達してしまふ。2、3回、容赦なく追いあげておいて、今度は、カテーテルで妻の尿道を攻める。ネラトンカテーテルの7号ぐらいはらくに入ってしまう。尿道には途中に弁のようなものがあって慣れないと挿入がむずかしいが、コツがわかってくれば簡単だ。

カテーテルが入ると、妻は、熱い熱い、といって身をよじるが、すぐに尿を噴出させるので、カテーテルは尿袋のついたものを用意する。尿を全部排出させておいて、今度は尿袋を高くあげて逆流させる芸当もできる。もちろん、その為には逆に戻すポンプの役をするゴム球も必要だ。

妻の尿道をひろげるのにも苦労したが、今では直径1センチぐらいのゴム棒が入るようになった。このゴム棒に電動パイプをつけて震動させると、妻は狂ったようにより泣きする。

私の生ゴム製品はほとんど自分で作ったものである。近頃はアメゴムと呼んでいる上質の生ゴムがなかなか手に入らなくなり、これまでに作ったものを大事に使っているが、私たちと同じような趣味のご夫婦がいたらぜひ文通なり、お会いするなりして一緒に楽しみたいと思っている。よかったらお便りください。



# 露出責めに陶醉する 山路征男

「奇ク」復刊おめでとうございます。  
これまでいろいろなSM誌を拝見して  
いずれは私も投稿してみようと思って  
いたところなので、さっそく私の撮っ  
た写真をお送りしました。

私の場合、いわゆるSMマニアとち  
よつと異なり、緊縛や浣腸といったプ  
レイよりも、町中や公園、あるいは喫  
茶店の店内、ハイキング途中などで、  
女のパンティを脱がせてアノ部分を露  
出させ、恥ずかしがるのを眺めて快感  
に浸るという、いつてみれば「露出責  
め」マニアなのです。

こういう変った趣味なので、普通の  
SM誌には向かないのではないかと、と  
ためらっていたのですが、今度、奇ク  
復刊記念号を見て、これなら私の写真  
も載せてくれるのではないかと、秘か  
に期待しているところです。

これまでに十数人の女性に恥部を露

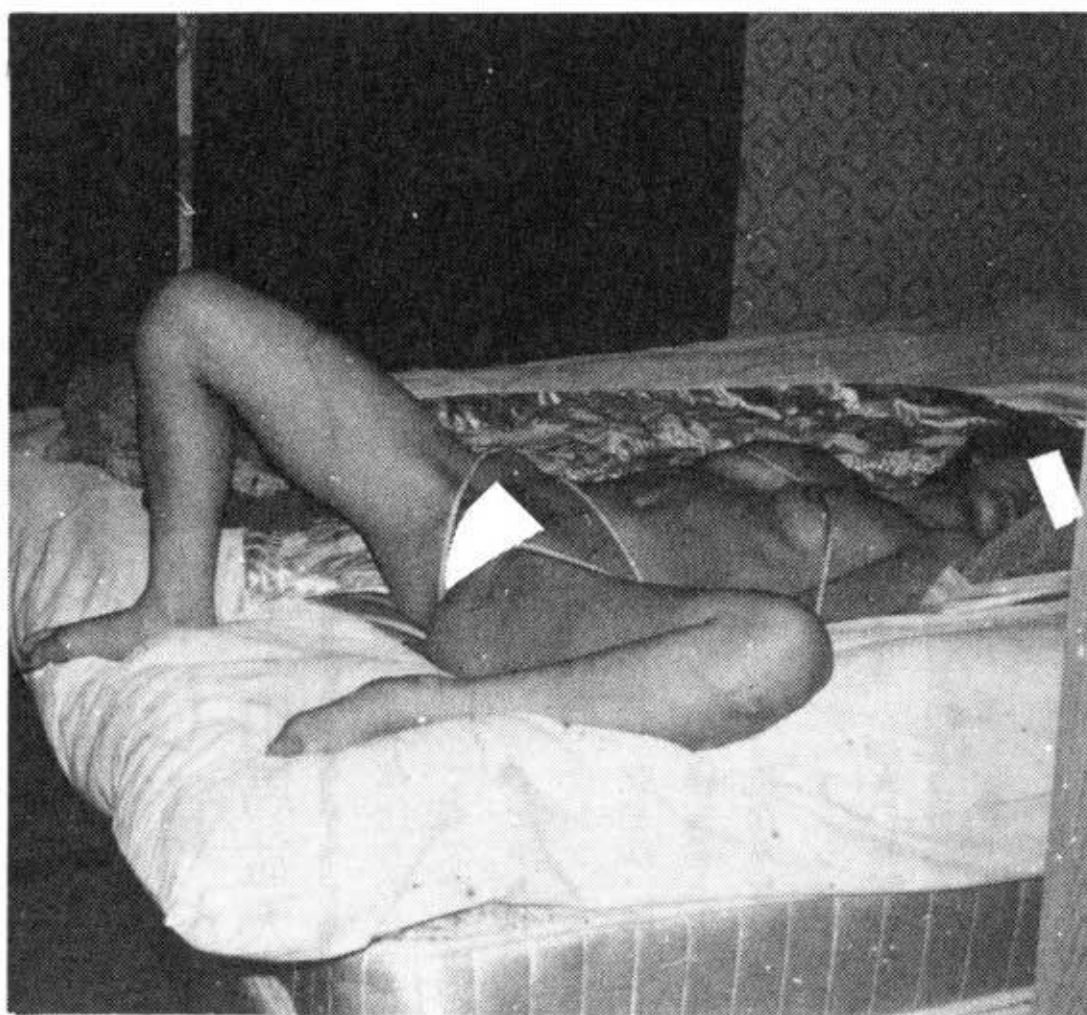


出させて露出責めを楽しんできました  
が、嫌がる女性はいませんでした。  
した。十代、二十代の若い女性はい  
んどためらわずに脱いでくれましたし、  
熟れ盛りの人妻ともなると、けしかけ  
た私が、むしろハラハラするほど大胆

に、しかも人目につきやすい場所で露  
出してくれます。他人に見られるかも  
しれない、というスリルがたまらない  
のか、露出責めにした女は大抵グッシ  
ヨリになってしまいます。投稿した写  
真は、ビクニックで休憩所のベンチへ

寝かせた二十三才のOLの露出、団地の階段で露出する三十一歳の人妻、そのほかはモーターで全裸緊縛露出プレイをした二十二才の美容師の露出です。写真が写真だけにDPEは自分でやったのですが、どうもうまいかないのでこの次は編集部でやって頂こうと思っています。私のような露出責めマニ

アでよかったら、ぜひお仲間へ入れて下さい。





「あひるの会」(東京)

## 全裸羞恥晒し責め

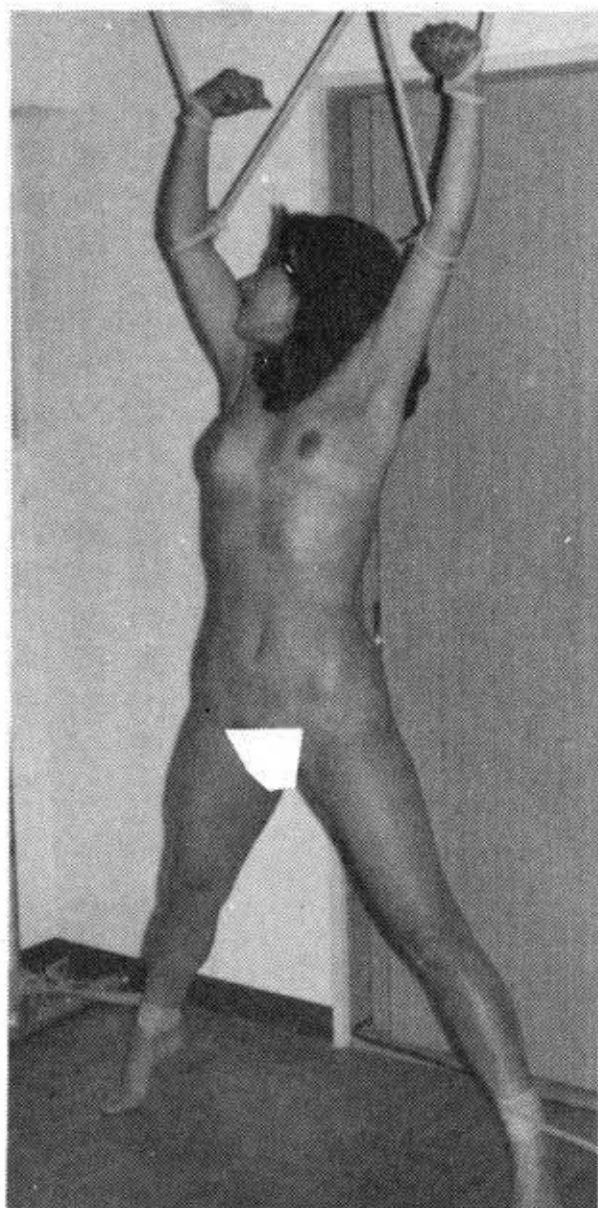
リポーター・相馬盆太

銀座の某サロンで働いている二十三歳の美世子さんを、やっとの思いで口説き落とし、「あひるの会」で撮影会をやることになったのは一月も末のことでした。なにしろ、店で一、二を争う美人の美世子さんを裸にしてロープで縛りあげ、羞恥で悶える姿を撮影してやろうというのですから、今回の撮影会へ参加者は大張りきりです。ところが、運が悪いとき

は仕方のないもので、仕事の都合やらどうしても欠席できない祝いごとやらで、結局、ひとりだけの撮影会になってしまいました。マンションを提供することになっていたO氏などは、残念がることしきりですが、会社の経営者ともなれば、ちよつとの時間すら自由にならないこともあるのでしょう。O氏からマンションのキイを預かった私は、たった一人の撮影会になったことにやや不安を感じま

したが、相手は美人の美世子さんです。このチャンス逃がしてなるものか、と勇気をだして決行することにしました。

美世子さんはSMプレイの経験がありません。縛っているんなことをするのだ、というと、ビックリした顔をしていましたが、別段決心を変えることもなかったようです。O氏の豪華なマンションへ着くと、まず美世子さんにシャワーをすすめ、その間に撮影の準備です。この日のためにO氏が特注したのでしよう。部屋の隅にはスチールパイプで作った吊り台があり、健康のために使っているらしいブラサガリ器もあります。この2ツを使ってプレイすることにし、入浴をすませた美世子さんを、まず、吊り台へ大の字に縛りつけ

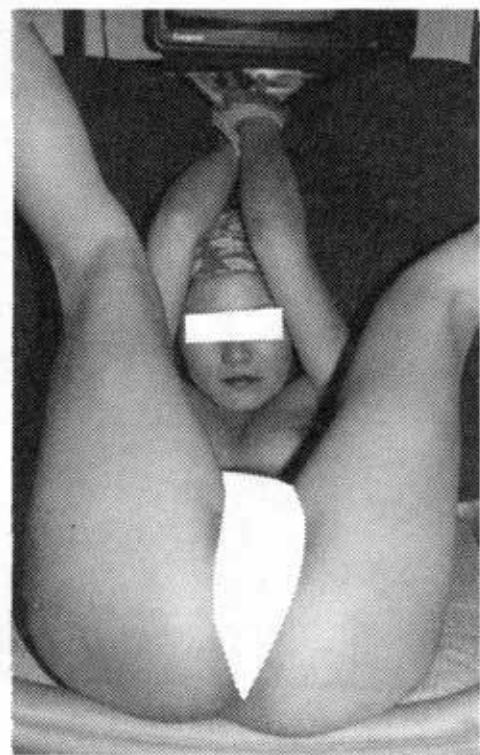


ました。両手両足をひろげた立姿です。輝くように白い美世子さんの裸身が薄いピンク色に染まったのは、湯上りのせいだけではありますまい。両足を大きく開いた美世子さんの足元へうずくまり、見上げるようにしてカメラを構えると、イヤーン、恥ずかしいわ、と甘い悲鳴をあげて身悶えます。レンズで覗く彼女のソノ部分は神秘そのものです。淡いかげりの奥にまるで別のイキモノのようなソレが、ぬめりをおびて輝いているのでした。恥も外聞も捨てなきや、SMプレイの楽しさは

味わえない、といていた「あひるの会」の仲間たちの話を思いだし、私は、ヨーシッ、ここまできて遠慮することはない、もつとスゴイ写真を撮って、参加できなかった連中を羨ましがらせてやろう、と今度は、ブラサガリ健康器を倒して美世子さんを膝立て開脚縛りにしました。開いた膝が閉じないように縛ったのですから、もう隠すすべはありません。その恥ずかしい姿をシゲシゲと眺められ、カ



メラで女の命を写されるのですから、美世子さんはどんなに恥ずかしかったことでしょう。ところが、よく見ると、鮮やかな色の花唇が蜜のしたたりで濡れているではありませんか、羞恥責めが成功したんだ……、私は内心大いに喜び、カメラを近づけてクローズアップのまま、シャッターを連続して押しまくりました。あんなところを写真に撮るなんてひどい



方ね、と優しくにらむ美世子さんに私はテレながら、今度は、せっかく購入したんだから試してみよう、と革の拘束具を着けさせてみることにしました。上半身の装着を終えて、サテ、困ったのは股間へ通す革紐のことでした。股間縛りにするだけならいいんですが、羞恥部分とアヌスへ埋め込む突起物が2つついているのです。ちょっとためらった私は、エエ、ままよ、と前の突起物を少し埋め、アヌスのほうは埋めずに尻の間を割って革紐を腰へつなぎました。さらに革製の猿グツワをさせて、そのまま室内を歩かせてみました。二、三ぶん歩き回らせたとこで、股間を調べてみると、前方の突起物は完全に姿を没していました。最後に、肘つきソファで両脚挙げ縛りにして、たった一人の撮影会を終えました。





# 奇クサロン



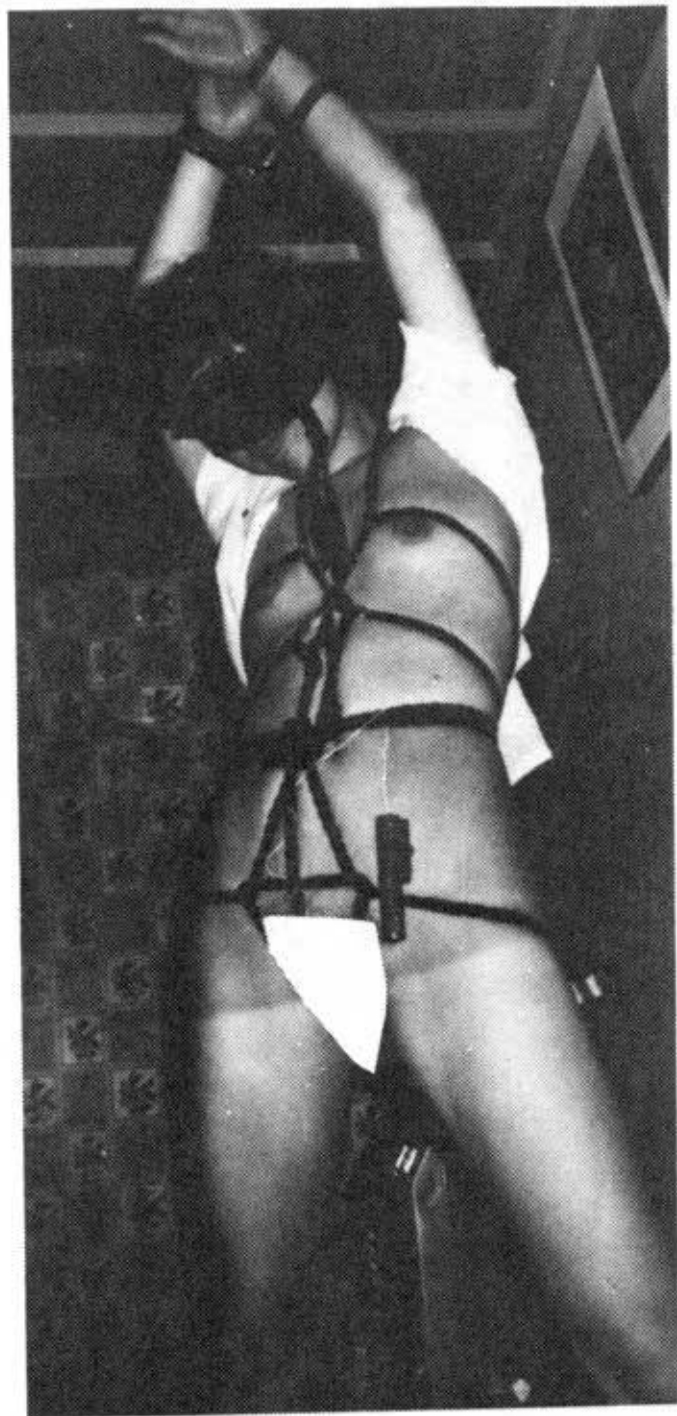
## 菱形股間縛り

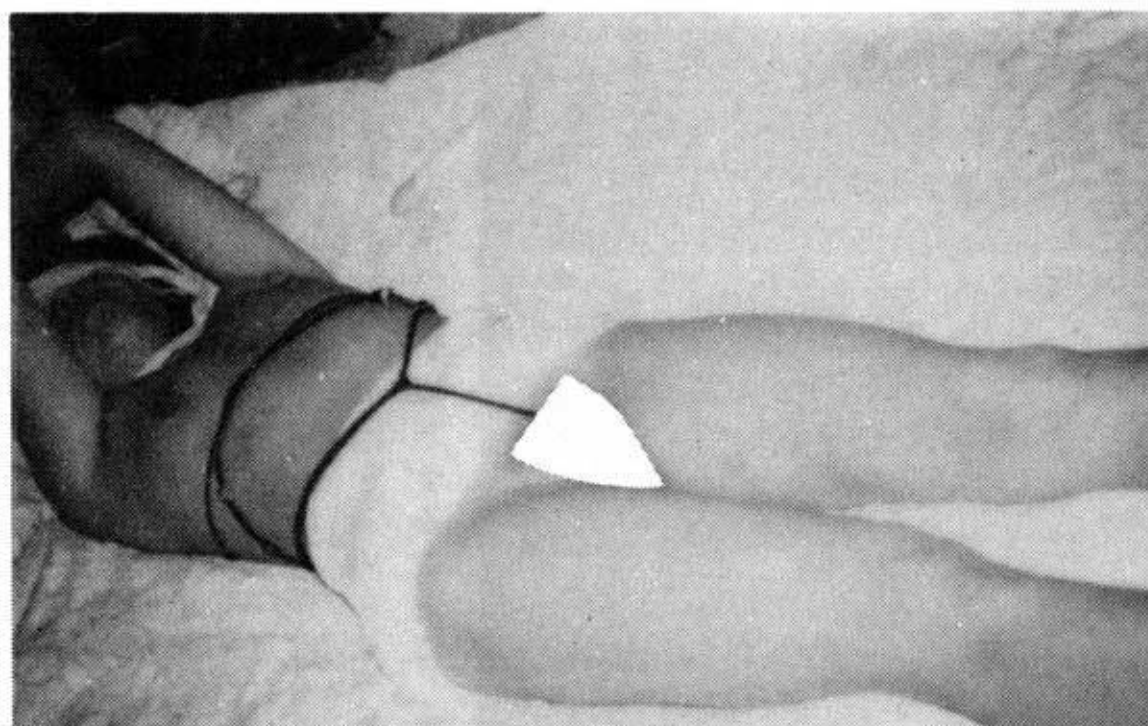
長野・かわせ

ので、カメラで撮っています。まだ腕が未熟なのでよく撮れていないかもしれませんが、とりあえず、昔にポラロイドで撮ったものと、最近カメラで撮

「奇クサロン」は読者の広場です。日頃の成果をどしどしご投稿下さい。文章、写真なんでも結構です。

読者の皆さんの中にはSMプレイの相手がいなくてお困りのことと思いますが、私の場合、幸いに妻が協力してくれるので、気が向けばいつでもプレイを開始することが出来ます。妻は従順な性格なので、私のかなりハードなプレイにもよく耐えてくれ、最初の頃に比べれば、SMプレイでの反応もよくなってきました。私も縛り方を研究して、妻の肌をロープで飾ってやるのですが、工夫すればまだまだ面白い縛り方があると思っています。以前はポラロイドで妻の緊縛姿を撮っていたのですが、最近、DPEの用具を揃えた





って自家現像したものを送りしました。ポラロイドのほうは、犬の散歩用の手綱で妻を股間縛りにしてあります。プレイを始めて間もない頃のものなので羞恥する妻の姿体に興奮したのを覚えてます。モノクロのほうは私が工夫した菱形股間縛りバイブ責めです。



乳房縛りにもうひと工夫欲しいところですが、腹部から股間へかけての菱形は、ほかにはない独特の縛り方だと自負しているところです。そのままタマゴ型の小さなバイブを妻の体内へ埋

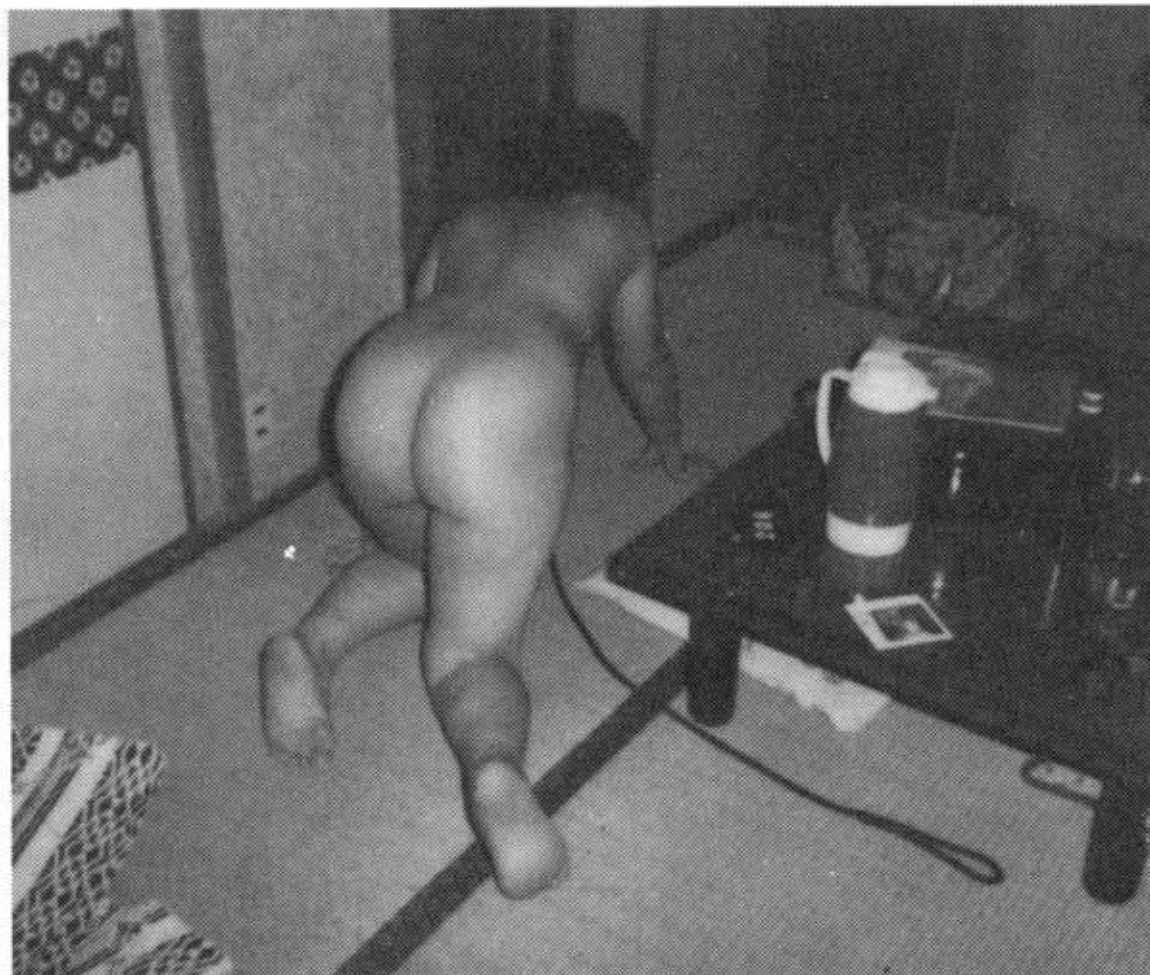
めて責めたてると、妻はたまらずに悲鳴をあげて体を揺すっていました。私はどちらかというと羞恥責めが好きで今度は妻を剃毛して責めてみようと思っています。

## 私はメス犬調教師

別府・細川英二

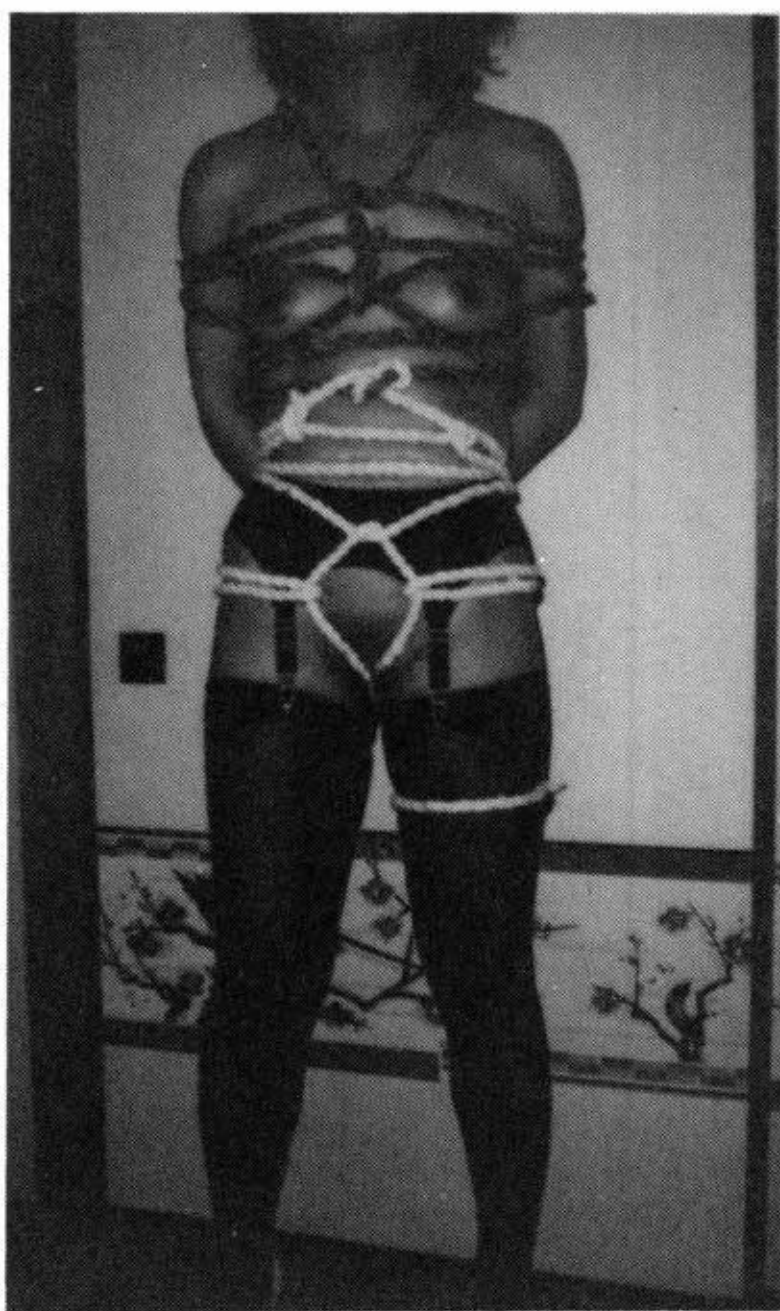
S Mプレイのダイゴ味は、なんといっても、プレイをまだ経験していない、あるいは、S Mという言葉すら知らない女を、メス犬として調教していくことだろう。私は現在、2匹のメス犬を調教しており、マリと名づけた三十五歳のメス犬は色白でポッチャリ型で特に厳しく調教している。裸にしたマリに犬の首輪と手





綱をつけ、部屋の中を四つん這いでグルグル歩かせたり、珍芸や犬のオシッコを覚えこませているのだが、覚えが悪いときは尻を鞭でビシビシ叩いて罰を与えるが、うまくできたときは、ホウビとして私の足の指を めさせたり私のものを口で愛撫させることにして

いる。



結婚以来、妻を飼育して五年。今では、私のハードな責めにもマゾとしての悦び浸れるM妻に成長しまし

た。私はプレイに使うロープには凝るほうで、自分で編み、色も好きなものに染めます。自分で作ったロープというのは愛着があるもので、ボロボロに

## ハード責めに悶える妻

愛知・M

なっても大事にしています。妻は、厳しく緊縛された上、ロウソク責めや鞭打ちを好み、愉悦するさまをビデオに

撮って楽しんでいます。昨年はレズ責めも経験させ、M妻としての磨きもますますかかってきたところですよ。

## アナル調教中の幸江夫人

都内・蛾眉山

「奇ク」復刊おめでとうございます。懐かしい名前を書店で発見した時は、夢でも見ているのかと思わず頬をつねってみました。ほどうです。

青年時代のほとんどを「奇ク」と共に過した小生にとって忘れがたい思い出のSM誌でした。

復刊記念号（3月号）を見た限りでは、まだまだ往年の域に達していないようですが、今後ますます発展して昔日の栄光を取り戻すよう期待してやみません。さて、小生は現在、一匹のよく飼育されたM女を所有しております。幸江夫人、といえど覚えておられる読者もいると思いますが「T」誌上にて稀にみる淫乱人妻として名をはせていました。当時は太田独楽氏なる人物の所有物でしたが、その後、関西に住む某

氏の手に渡り、更に昨年、ふとしたことから私の所有物となったのでした。

所有物といっても、幸江は夫や子供もいるレッキとした家庭の人妻なのですが、最初の浮気相手がSプレイの巧者だった為、すっぱりマゾに目覚めて、以来、S人種の手から手へと渡り歩かされていたのです。



毎日オトコを変えなくてはすまない。とまでいっていた幸江も、現在は私の手元でおとなしく貞操を守っています。幸江とのプレイで困るのは、ロープの痕などが肌につくと夫にバレるからダメ、ということでもっぱら革製の拘束具を装着させています。幸江にとって私は五人目の「ご主人様」で、現在のところ、月三回のアナル調教を受けさせていますが、どうやら男性自身を受



け入れる準備もできたようなので、菊  
花のバーズンを奪ってやろうかと考え  
ています。そしてしばらく馴らして快

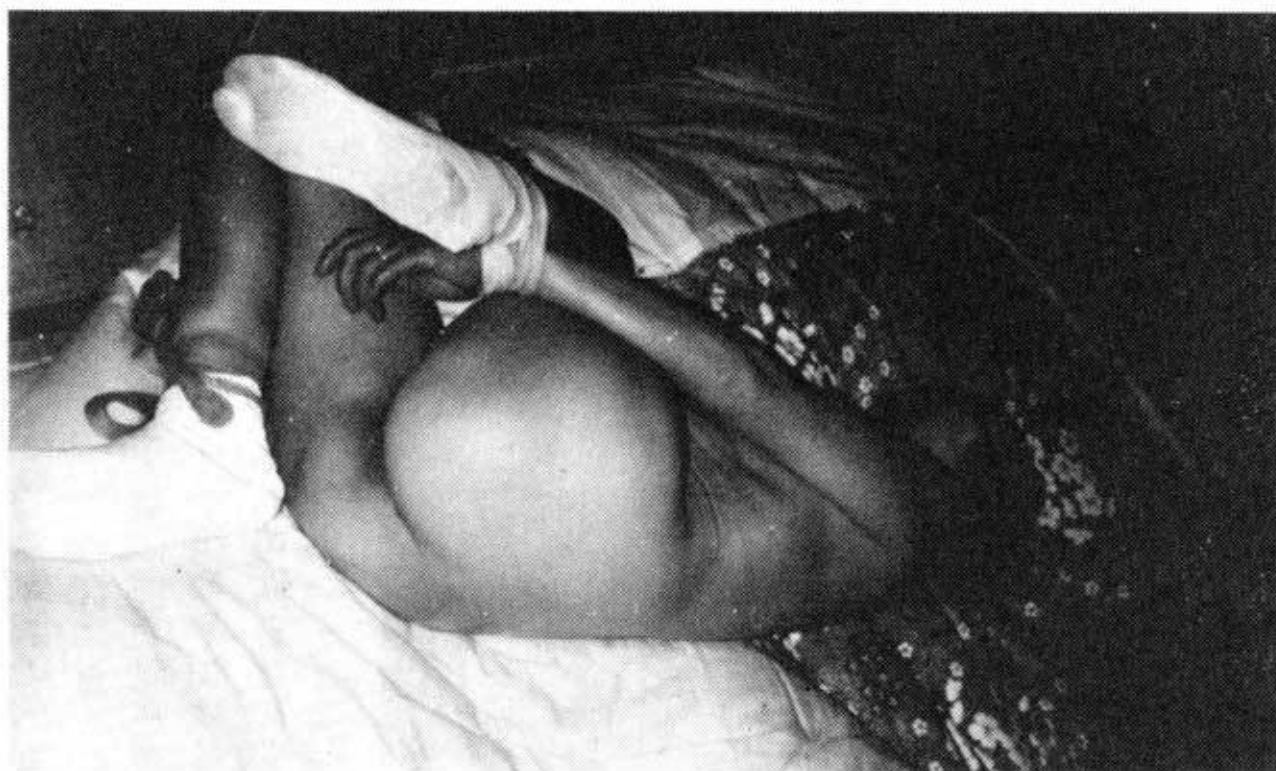
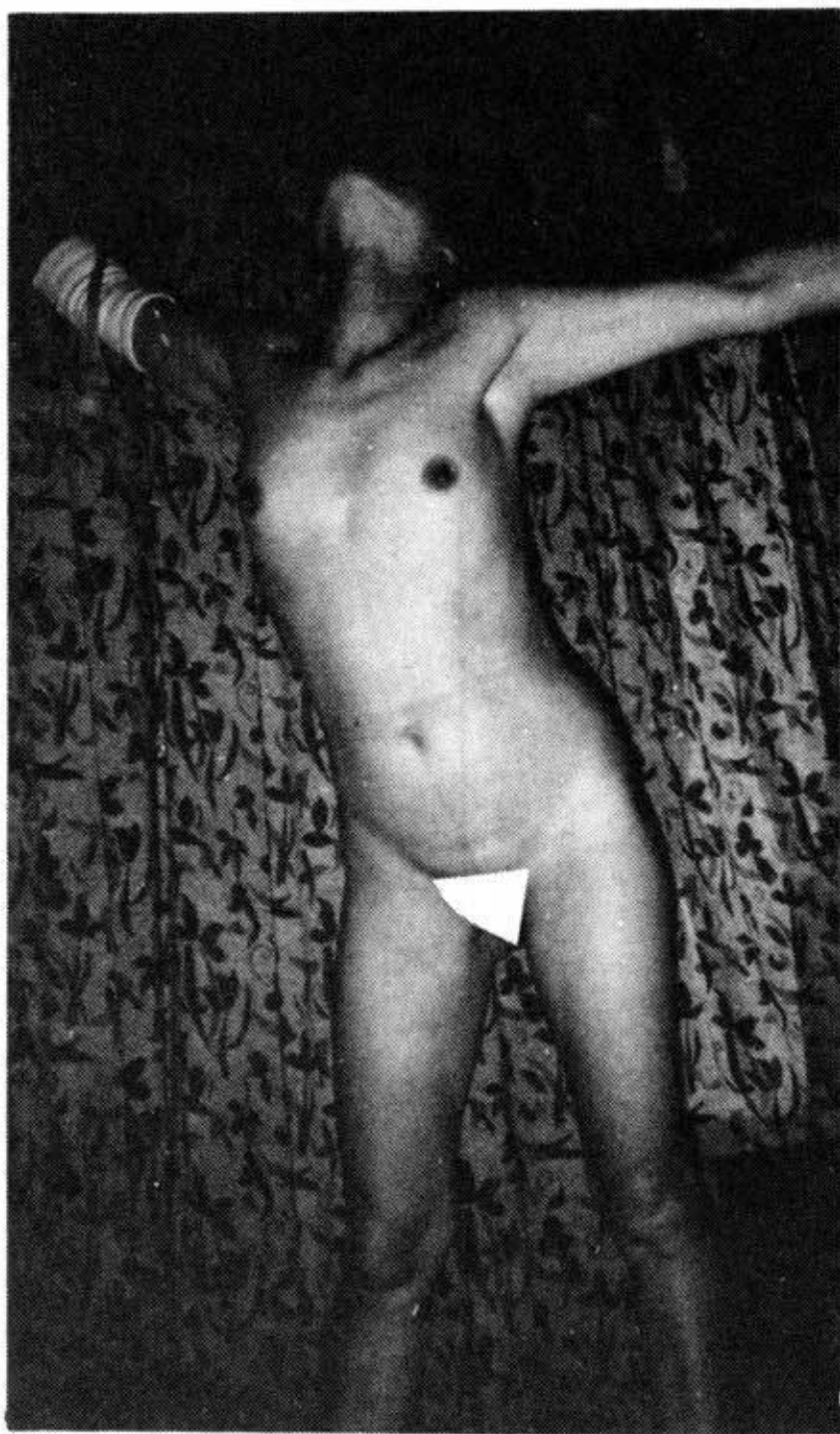
感を覚えこませたら、今度はS人種の  
知人を招待して、ダブルウェイ責めな  
どもやってみようかと計画しています。

## 乱熟女体を縛弄

岐阜・ドシロート

「奇ク」復刊記念号を拝見し、さっそ  
く投稿しました。私は本格的でない、  
ちよつとしたSMプレイが好きで、機  
会があるごとに女性を縛ってきたので

すが、先日、行きつけのバーのマ  
ダムとプレイできたので、その時  
に写したポラロイド写真を同封し  
ました。写真は下手のヨコ好きで



とてもサマになっていないと思います  
が、貴誌の一端にでも掲載して下され  
ば光栄です。幸いに採用されましたら  
掲載誌を送ってくれませんか？ 田舎  
町でなかなか手に入りませんから。

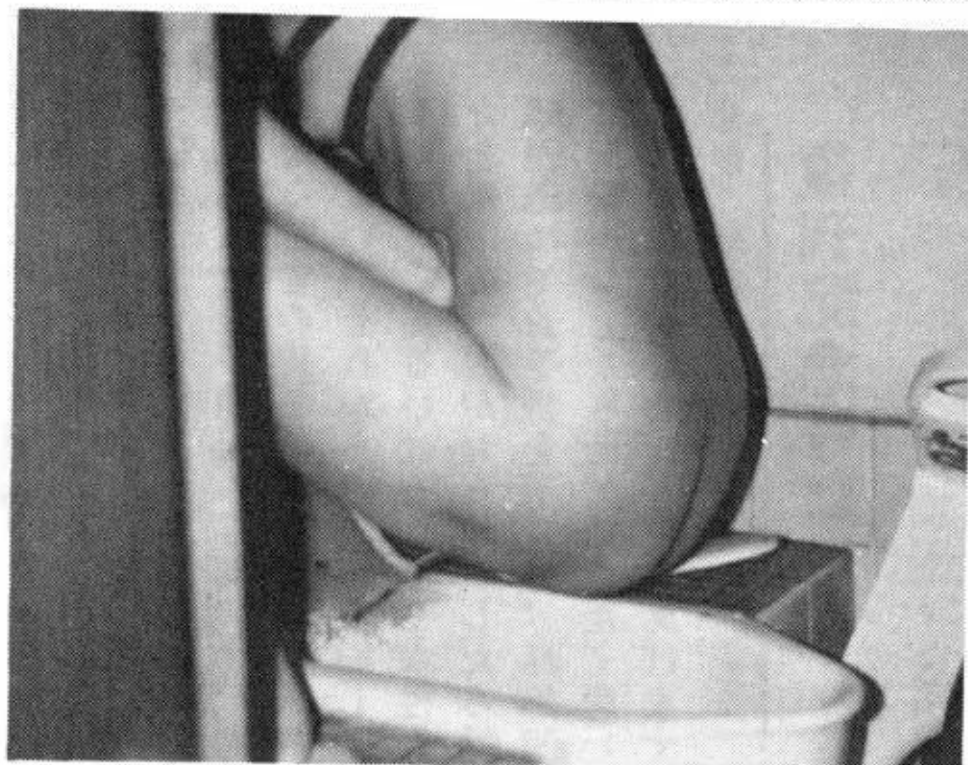
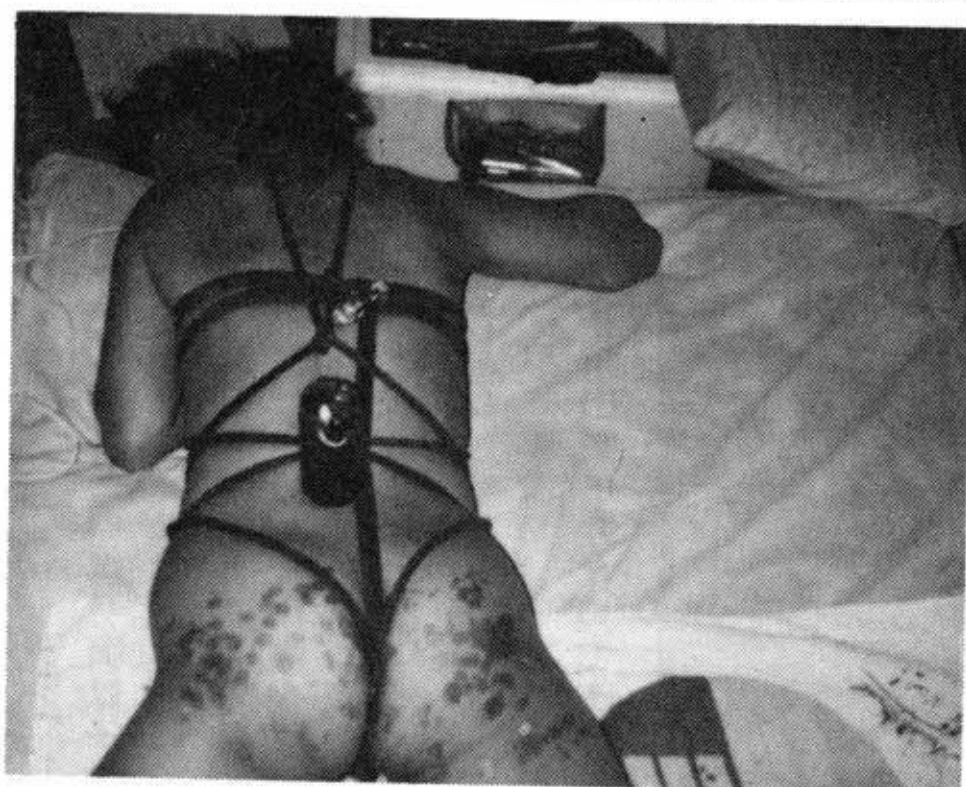
# 剃毛奴隷妻の日課

横浜・十字軍

私の命令に絶対服従を誓う奴隷妻に自己紹介をさせることにしました。以下は奴隷妻自身の自己紹介と読者の皆さまへの口上です（主人）

主人さまに飼われているメス犬でございます。私の日課は、目覚しがわりにご主人さまを口で奉仕して起きて頂き剃毛の点検、秘部の観察などをして頂いたあと、メス犬としての誓いの言葉

を復唱いたします。そのあと、ご主人さまに全裸股間縛りにして頂いて一日を過し、ご主人さまのお帰りをお待ち申し上げるのです。ご帰宅されたご主人さまのお体を私の口で清めさせて頂いたあと、アヌスバイブ責め、乳房やワギナへのクリップ責めのほか、ロウ責め、放尿などをさせて頂いておりますので、その様子をとくご覧下さいますようお願い申し上げます（奴隷妻）





# 妊婦緊縛

都内・前田八郎

今月号より、「膨満の快楽」というタイトルで、妊婦ハントを載せていた。前田八郎です。私は今年五十二歳になりますが、妊婦に興味を持つよう

ものでした。しかし、妊婦とのセックスを経験したのは、つい数年前からで想像以上の快感に感激し、それ以来、妊婦ハントに精出してきたのです。最

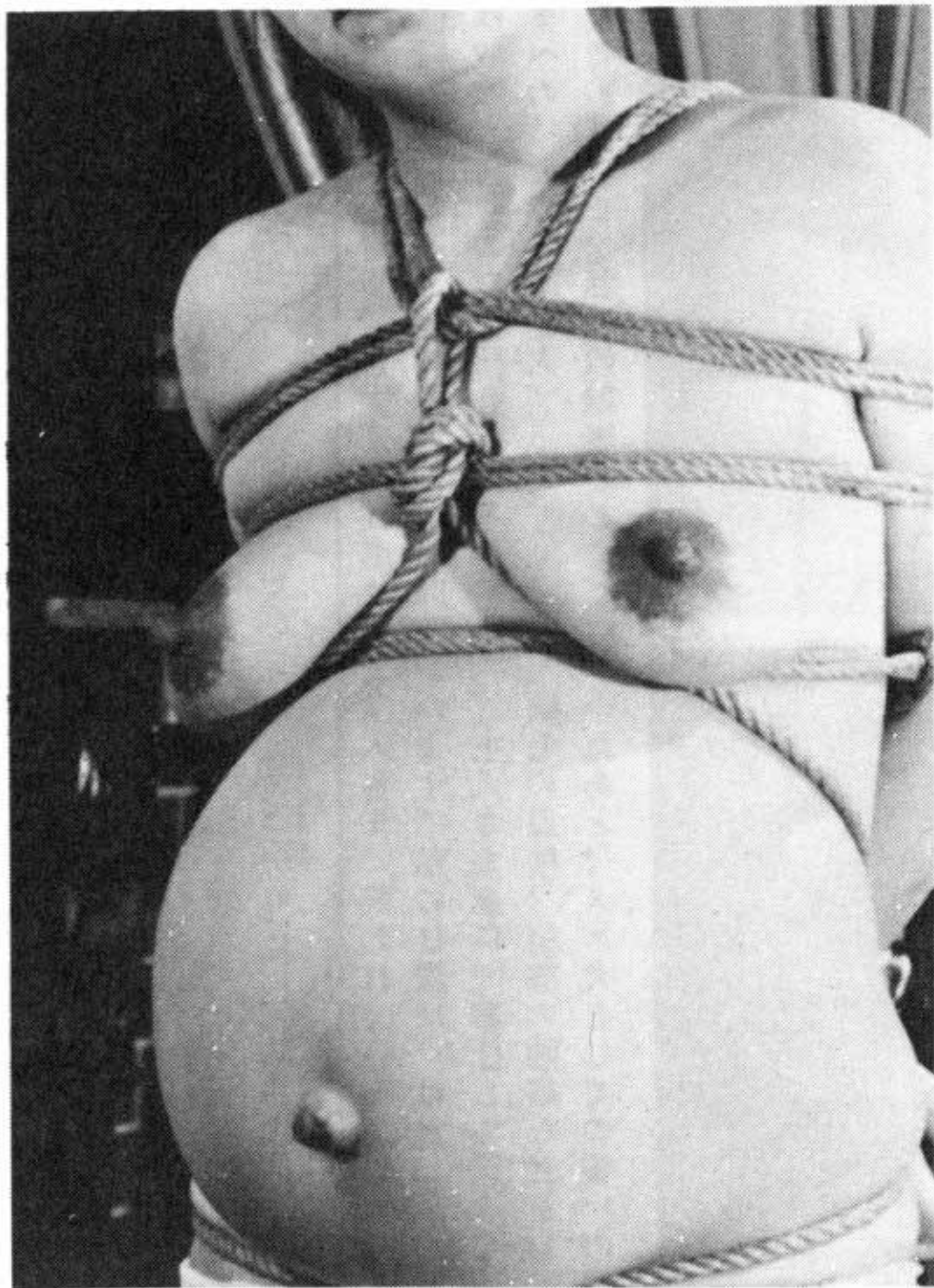
になったのは、実は子供の頃からで、青年期には妊婦のカエルのように膨んだ丸々とした腹を思い描いてオナニーに耽った

近、SMプレイもやってみようと思い現在つきあっている三十六歳の人妻を縛ってみたのが同封の写真です。よかったら読者の皆さんにもご覧に入れてください。それから、現在妊娠している奥さま、あるいはそういう女性を紹介して下さる方がおられましたら編集部回送にてお手紙を下さい。妊婦腹の写真撮影などをさせて頂きたく思います。少いですがお礼も差しあげます。ぜひご連絡下さい。

## 復刊記念号に思う

埼玉・S男

復刊記念号を拝見致しました。私は旧誌の時代をよく知りませんので比較することはできませんが、他のSM誌に比べて独特の味があると思います。ただ、小説はせいぜい2本ぐらいが適当で、それもヘタでもよいからマニアの小説を希望しています。聞くところによれば、他のSM誌ではSMプレイの経験すらない作家がいるそうですが貴誌ではそんなことのないように願



いたいたいものです。私は、写真にはあまり興味がなく、読物に関心があるので、カメラハントや読者の投稿記事をもっと増やして下さい。賀山茂氏の交遊記、草刈善鬼(?)氏のハント、大変楽しく拝見しました。また、「縄妾志願」には驚かされました。こんな女性たちがどんどん現われることを期待しています。勝手なことばかり書きましたが、これも貴誌の発展を願うあまりです。お許し下さい。

## SM情報の充実を

長崎・TK

既成のSM誌はマンネリ化して読む気が起らず、そうかといってビニ出版社のものはドギつ過ぎて僕には肌に合わないと思っていたところへ奇ク復刊号を手に入れました。旧誌とは少し趣きが違うようですが、同じものでは進歩もないわけですから、これはこれでよいと思っております。僕が好きだったユニークなSM誌に5、6号で消えてしまった「T」誌というのがありました。新「奇ク」はそれとはまた

別の方向を目指していると思われます。いづれにしろ、真にSMマニアのためになるSM誌を期待してやみません。できれば、「SM情報」欄をもっと充実させて下さると有難いのですが。上京した時のプレイ場所を探すのに便利ですので。ただ、かなりインキキなところや危険なところもあると聞いていますので信用のおけるプレイ場所のみご紹介下さい。復刊号を拝見した限りでは、SMレズなど女性同志の写真や記事が見当たらないようですが、今後、そのようなものが掲載されるよう願ってやみません。

## 回送方法に工夫を

山口・オサム

復刊号を拝見し、「縄妾志願」には驚かされました。さっそくNo.5の田村ちえ子さんへの回送をお願いしたので、掲載された彼女の写真を切り取って送らなければならないのは、いかにも残念です。なにか別の方法で連絡できるようにして頂ければ有難いのですが。ご一考をお願いします。小説で

は、小さなカットふうのイラストにドキツとするものがあり、楽しめます。これからもしどしこういったイラストを載せて下さい。切り抜いて手帳に張り、ガールフレンドに見せてやろうと思っています。それがきっかけでSMプレイへ進めるチャンスがこないとも限りませんから。

## 読者通信欄に一言

神奈川・Y生

読者通信欄に一言。昨年、某交際誌のメッセージを見て、手紙を出したところ、SMクラブの入会を勧誘する手紙が届きました。交際欄を使った悪質な手口なので断ったところ、家庭へまでも訪問されて非常に迷惑しました。貴誌に限ってそんなことはないと思いますが、掲載者を事前にチェックする方法をお考え下さると助かります。その為にメッセージが減少してもホンモノのマニア諸氏だけとわかれば、安心して手紙を出せると思うのです。私の苦い経験から一言いわせてもらいました。貴誌が、最も信頼できるSM誌になることを願ってやみません。



# 倒錯愛のメッセージ



○二十八歳の独身会社員。一七二センチ、六〇キロ。S、Mどちらでも可。特に切腹、浣腸などお腹を責めるプレイが好きです。私の切腹嗜好は小学生の頃からで、長さ一〇センチ以上の針でも腹に刺すことができ、腹壁を貫いて腸まで達します。また、腸は水道の蛇口から直接注水するもので二〇〇〇CC以上注入でき、お腹は妊婦のようにパンパンになります。私のプレイをご覧になりたい女性、または切腹、浣腸に興味のある女性、男性名にてお便りください。返事確実です。

No 1 愛知

切腹ファン

○私は身長一六七センチ、体重五十四キロ、二十四歳の会社員です。今までSMの世界に人一倍の興味がありながら、なかなかプレイを経験する機会が

なかったのですが、このたび奇クが復刊したのを知り、未知の世界を経験することができたらと思い、ペンをとりました。私は女性を縛り、辱しめてみたい気持がある一方で、自分が縛られて責め苛まれることも夢みています。

S性もあり、M性もあるような気がするのですが、こんな私を幻想の世界に誘ってくださるご夫婦、女性の方はおられないでしょうか。SMの世界を見せてくださるだけでも幸せです。私の容姿に関しては、会っていただいて失望させることはないと思います。また一社会人の責任として秘密は厳守いたしますのでご安心ください。チャンスがあれば一日でも早く経験できたらと思っています。どうぞよろしくお願いします。

No 2 横浜

カレリア

○私は二十一歳、一六八センチ、五十キロの明朗誠実な独身男性です。SM歴は三年で、S性8、M性2ぐらいだと思っています。現在、僕の命令に服従してくれるM女性で、よきパートナーになれる人を探しています。ソフトからハードまで、女性を飼育させてください。必ず満足いくよう努めます。SMに興味のある十八歳から三十五歳までの方。秘密厳守。

No 3 川崎

縛男

○僕は都内の某私立大学3年生です。身長一七三センチ、体重五十八キロで自分ではハンサムだと思っています。僕の趣味は、若くて美人の女性がはき古したパンティを手にとって眺めたり匂いをかいだりすることなのですが、まだ一回も経験がありません。僕は今

二十二歳なので、できれば二〇歳ぐらいの女子大生か、短大生、またはOLか看護婦さんのパンティが欲しいと思っています。お写真があれば一番よいのですが、駄目なら身長や体重、メンスの多い少いを書いて、汚れて不要になったパンティと一緒に送ってください。大切な宝物にします。送るときに都合が悪ければ住所や名前は書かなくてもいいです。では、お願いします。

No. 4 都内

Y 郎

○奇ク復刊号を知り合いの男性から見せてもらいました。私は二十七歳の独身OLです。容姿は十人並みと思っています。第一印象はキツイ感じを受けますといわれます。でも、ほんとはヤワらかいお話が大好きで、会社ではエッチな男性社員たちのワイ談について耳を傾けて聞いてしまいます。特にピンクサロンとかトルコとかで、女性たちがするサービスの話には思わず興奮してしまいます。同性のことなのに自分でも変だと思えます。そういうアソビをたくさんしていて、エッチな話をお手紙に書いて私に送っていただけない

でしょうか。一番エッチなお話を書いてくださった方にご返事さしあげたいと思っています。

No. 5 都内

なでし子

○三十三歳の地方公務員です。ズバリいって私は露出癖があります。そのことで随分長いこと悩み、この年令になっても独身で、ガールフレンドもつくれないのですが、奇クの復刊を知り、ぜひお願いしようと思いたちました。四〇歳ぐらいまでの女性で、私の露出姿を見てくれる方、公園などで露出している私をポラロイドで写してくれる女性の方。連絡方法を書いたお手紙をお待ちしています。

No. 6 神奈川

K・K

○小さな会社の社長をしておる五十八歳の男性です。私の唯一の楽しみは若い女性の健康な聖水を飲んだり全身に浴びたりすることです。昨年の十月まで、私の相手をしてくれる女性があったのですが、都合で郷里へ帰ってしまった為、新しい女性を求めております。私の好みを理解して協力してく

れる二〇歳前後の、水商売でない女性の方、お便りください。お礼に、現在貴女が得ている収入と同じ程度のおこづかいを差しあげようと思っています。

No. 7 都内

聖水男

○SMプレイに興味がある二十六歳の独身会社員です。プレイの経験はまだありませんが、SM写真やSM小説などを集めて研究しています。僕が好きなのは、両足を開いて縛った女性の恥毛を剃毛することです。ツルツルに剃りあげた女性の姿を想像すると、たまらなくなつてオナニーをしてしまうほどです。剃るときに女性の柔い肌を傷つけない安全なカミソリやハサミも揃えてあります。僕の趣味をわかってくれる三〇歳ぐらいまでの女性の方からのお便りをお待ちします。もちろん、お互いに秘密は厳守です。

No. 8 横浜

ナイト

○奇ク復刊おめでとうございます。まだ若い僕などは、奇クの黄金時代を知らないのです。復刊号を拝見して感激に浸っています。僕は現在、ある自動車



メーカーでエンジニアのタマゴとして働く二十一歳の独身です。寮に入っているのですが、あまり自由がきかず、SMの相手をしてくれる女性がなかなかできずに困っています。そこで、お願いがあるのですが、日曜日にプレイの相手をしてくれる三〇歳までの女性はいないでしょうか。僕は経験がないのでSMプレイの経験がある女性がいいと思います。できれば、男性名にてお手紙ください。

No 9 愛知

ビギナー

○私共四十一才と三十七才の夫婦でございます。妻はかなりの太目の身長一五三センチ、体重六十四キロでございますが、感度は大変良く、それもSMになると特別飲んで、私では体力がもたないほど。私は生まれつき太れないらしく、身長一六九センチ、体重五十二キロのがりがり。それほど体力もないので、妻を私にかわって責めて下さる男性を望んでおります。妻の好きなプレイは、羞恥責めはもちろんのこと尿道、アヌスなどかなり激しい責めを求めますので、それらの知識を詳しく

持った方、ご連絡下さいませ。

No 10 都内

H・H

○小生五十一才、家内四十五才、SM歴六年。皮マニヤで家内の全身を皮製品でくるみ、束縛して責める事を最高の喜びとしている。家内身長一五六センチ、体重四十九キロ、小生身長一六五センチ、体重六十二キロ。夫婦円満。家内は少し人見知りをする方で、気に入った方でないとは興奮しない。ヤセ型の落ちついた感じのする四〇代の男性の方、どうぞ御一報を！ 一度お逢いしてからプレイ有無を決めたいと思うので近辺の方、できればご夫婦でお願いしたい。奥方の条件は別になし！

No 11 兵庫

熱い熟年

○私と妻は性の不一致と申しますか、あまりうまくいきません。と言うのも私はSMを好み、妻はごくノーマルな行為しか望まないのです。無理矢理プレイするのは気が進まず、妻もSMをするくらいなら、勝手にどこかで楽しんできてくれた方がいい、などと言って、少しも協力してくれる気がないの

です。どなたか私を呼んで下さる方、ご連絡下さい。私は実際の経験は全くなく、すべて本などからの知識です。で、よろしく御指導を！ 尚、妻は遊ぶのなら私に内緒にして、と言いますので、ご協力をお願いします。

No 12 広島

一匹狼

○二十八歳、極度のアヌスマニアです。美人女性のアヌスを想像してイラストを描いたりしています。特に美人歌手やアイドル歌手のアヌスからウンチが出てくるところなどを想像すると、興奮してしまいます。最近のビニール本には、そういう写真もあります。モデルではなく、普通のOLや女子大生がアヌスをいじめられたり、強制排便をさせられたら、と思います。僕の趣味を理解してくれる二〇歳前後の女性からのお手紙をお待ちしています。

No 13 栃木

A・S

○私は三十三才の今だ独身のサラリーマンです。この年で結婚しないのは、実は同性愛の性癖があるため、女性に興味をそそられないからです。どなた

か私のマスコットに立候補してくれませんか。容姿は問いません。年下でありさえすれば……。もし私を気に入ってくれたら、一緒に住んでもかまいません。現在二LDKのマンション住まい。いかがでしょうか。

No. 14 山口

イチロウ

○私四十四才、自家営業者、少し中年太りの温厚なオジサンタイプです。女房四十一才、やはり中年太りの世話好きなオカミサンタイプです。お互い楽天家でその日その日を楽しもうと考える性格です。月に一、二度、一泊旅行で夫婦交換のできるご夫婦、お便り下さい。旅費は自己負担。色々な所を一緒に見て回りましょう。

No. 15 大阪

のんびり夫婦

○夫三十八才、妻三十九才、普通の会社員です。私も妻もサド傾向で、二人共もマゾのご夫婦を希望します。妻は男性を責めてみたいと言ひ、私は女性を責めてみたい。どうせプレイするのなら一緒に楽しめたほうが嬉しいので、ご夫婦、またはカップルの方、お便り

下さい。単独の方はお断わりします。

No. 16 京都

S・S

○父の書斎から旧奇譚クラブをこっそりもち出した中学生のころがなつかしい。ぼくもいまはもう二〇代。連載されていた小説「花と蛇」の文夫くんみたいに責められてみたい。ベテランのS紳士希望。女性不可。それから年下の、Mつけのあるかわいい女の子も連絡下さい。文通だけでもいいです。

No. 17 三重

二重面相

○私は四十五才になる。中小企業の社長をしており、十数年前離婚して現在まで一人暮らしをしています。SMプレイを始めて、十年位になりますが、ソフトなプレイを望んでおり、M女性に浣腸とアヌス責めを調教したいと思っております。年令は問いませんが、優しく私の娘の様に可愛いがつて、色々と相談相手になってやりたいと考えております。経済的にも余裕が出て来ましたので、これからの中年も後期、ロマンスグレーの私と共に、優しくSMプレイをして下さる方はお便り下さ

い。関東地方の方で一泊出来る方を希望します。必ずお返事致しますので、お便り待っております。

No. 18 茨城

A・K生

○私は女装の女、私はエロチックの女性として、男性にセックスどれいとして犯されたいですわ。年令はかまいません。殿方のどんな要求にもお答えしますわ。ありきたりの女子など問題ではありませんわ。私と一度手合わせした方は、ひたすら通い続けられますのよ。私は肌もやわらかく、テクニクはすぐれてましてよ。声をかけて下さいね。心よりお待ちしておりますわ。男性何人もの方と輪姦されるのは大好きですわ。今日は一人で念入りに化粧してますの。誰も こし下さってませんのよ。どうしたんでしよう。淋しいわ、しっかり男根をつき上げて下さらないのが。私は可愛い女よ。しっかりよがり泣きたいと、殿方よりのお声を今か今かと心待ちにしております近頃で御座いますわ。世の中の男性は眼がないわね。私ほどのサービスの良い女をほっとくなんぞ馬鹿ね。一時ね



むっておれば、夢にも優しい王子さまでもあらわれて、抱いてもらえと思っていますすわ。

No.19 東大阪

佐知子

○私の顔付のアナルセックスの秘写真と、あなたの顔付の女性器のアップの写真と交換してください。私のほうの希望は、陰核のハッキリと写っているもので、私も目を開きますので、あなたも開いてください。そしてプロや外国ものはいりません。互いに顔付のほうが秘密が守られると思うからです。私は三〇女の人妻で、今夫は外国です。私は日本で留守番です。交際の経験はありますが、夫不在の間は私の信念から交際は中止です。私の投稿した体験記が、奇ク復刊号の一一五頁に「アナルセックスのハイテクニク」と題して掲載されましたので読んでください。「顔付の秘写真と交換してください！」と私に命じて旅立ちました。でもまだそんなに交換ができていませんので、メッセージで呼びかけたいのです。また私のものSM、複数、自慰等のものがありますが、それとの交換

もかまいません。秘密が厳守できる方とのみ交換をお願いします。

No.20 愛知

峯島佐知子

○私三十六才、自営業、家内三十四才。一見ハデ好みで気の強そうな女に見えますが、本当は家庭的で大人しい女なんです。そんな家内は強度のMで、今までに緊縛、アヌスセックス、ムチ打ち、尿道責め等々……、とほとんどのSMは経験しました。それもどれをとっても本格的な責め方ばかりです。そうしないと喜ばないので、私も始終勉強に追われている次第。ところが最近私の勉強不足か、プレイが種切れになって、家内を新鮮な遊びに浸すことができせん。どなたか雑誌などに載っている一般的なこと以外のプレイをご存じの方はいらっしゃいませんか。ご自分で考え出したプレイなど大歓迎です。ご一緒に家内を責めてやってください。

No.21 岐阜

M族

○小生四〇才の会社経営者です。SMに興味を持ち始めて十年弱。様々なS

M雑誌のそのほとんどを読み、会員にもなってきました。家内は自分からはそれほどSMに関心があるわけではな

No.22 都内

グループ

○僕は二十四才の勤め人です。回りの皆からは一応の信頼を得ていると思う。だけど僕には家族にも言えない秘密があつて、ここに仲間を探す事にした。実は、僕は排出物の大の方にとっても大きな興味があつて、女の人を見るとすぐ、この人はどんなのするのかなあ、と想像してしまう。もちろん四〇、五

○才のオバサンは別で、二〇才から三〇才ぐらいの女の人。できればしてる所を見たいぐらいだけど、そんな事言えるがないし……。僕の寝っころがっている胸の上でしてほしいな、なんてそんな願望を持っている人、どこかにいますか。そして、もしその望みのかなえられている人がいたら、僕にも少しわけて下さい。一生恩にきますから……。

No.23 千葉

ウンマニア

○可愛い妹を探しております。私、二十九才の人妻。まだ子供はおりません。身長一六三センチ、体重五十五キロ、バスト八十一センチ、ウエスト六十センチ、ヒップ八十五センチ。結婚以前からのレズビアンで、私タチ役。もちろん主人もよく承知したうえで結婚でございました。両刀使いなので結婚生活には影響ございません。しかし、本能は消える事なく、女相手の浮気ならばかまわない、という主人にこの交際欄を教えてもらって投稿致しました。希望としては、二十五才位までの小柄で色白の女の子。経験は問

いけません。ただし、私をお姉さまとして心から甘えられる子に限りです。私の言う事ならば、何でも素直にハイハイと従える可愛い人、どうぞお便り下さい。今この文章を読んでいらつしやる男性も、もし彼女がレズ趣味ならば、この私に紹介して下さいませね。

No.24 都内

お姉

○この私に、汚れた女性のパンティを下さい。ご夫婦なら奥様のを、恋人同志なら彼女のを、そして一人ぼっちで見ているあなたのを……。どんなに古くてもいいです。洗濯前の体液の浸み込んでいるパンティを送って下さい。そのかわり、新しいのを五枚お返しします。できたら、どんな人かはいたいたのかわかるように、全身の写ったスナップ写真と、年令、好み等、自分を説明した何かも一緒だといいです。そして、またできたら送って下さい。私は二十二才の公務員、身元確実だから安心して下さい。

No.25 川崎

ロック

○私達夫婦はとっても仲の良い夫婦で

す。結婚九年ですが、まだお互い新鮮で、セックスにマンネリなどということは全然ありません。その訳は、カテゴリー遊びが大好きで、土曜日の夜とか祭日の前夜などには、必ずといってよいほど楽しんでます。あれはヘタな仕方をする、尿道を傷つけて病院通いという事にもなりがちですが、しっかり知識をもってすれば大丈夫です。もうカテゴリー遊び三年の経験の私達と、共に楽しみましょう。未経験のご夫婦にはご指導します。単独で仲間入りの方はご遠慮下さい。私三十五才、妻三〇才、尚、カテゴリー以外の遊びには今のところ興味はありませんのであしからず……。

No.26 滋賀

カテゴリー

○当方四十六才、現在妻と別居中です。身長一六六センチ、体重七十一キロ。サディストなので、妻に追い出されました。真っ裸にした女を荒縄で縛り、全身にムチを浴びせたり、踏んづけたりして、徹底的にいじめる……。なまぬるいプレイでは満足できません。始めは従っていた妻も、段々エスカレー



トしていく私に恐くなったのです。殺されるとまではいかなかったも、もともとMっ気の少ない妻だったから、我慢できなくなるのもよくわかります。しかしこの世の中には、それ位してほしいM女性がいます。私なりに冷静なつもりだから、一度お便りください。ただし、かなりの激プレイだという事を忘れないでください。体力のある人を！

No. 27 高知

セブン

○三十八才になる私は、百パーセントのマゾヒスト。女王様に好きなかだけいじめられたい。かかとのとがったハイヒールでギュウギュウ体中全部を踏まれてみたい。またある時は息もできなくなるくらい、女王様のアソコでふさがりたい。首輪をつけてペットにもなります。トイレのペーパーがわりにもなります。なんでも言うとききますから私をいじめてください。私はとても大人しくて、やさしい人間です。みんなから気持ち悪いくらいナヨナヨしてるって言われるけど、それだけ怒ったらすることがないんです。女王様の

傍に私と一緒に置いてください。お腹が出て、美男子でもないけど、そのほうがいじめやすいと思います。私は今一人身だから、いつでもお呼びになってくれたら、すっ飛んでまいります。それから、女王様には、背のスラッとした、足のきれいな人を望みます。そういう人に私はとっても弱いんです。のめり込んじゃうタイプなんです。

No. 28 大阪

どれい

○SMに魅入られて四年。女を責めることに面白さを覚えてやめられなくなった。二十三才。独身。自由業。背が高くて恰好いいと自分で思っている。相手は、やせ型の美人がいい。若くて色白ならもったいい。ただしプレイは二人だけでやりたい。独身なら問題ないが、人妻だったら夫はいないほうがいい。場所はホテルはお金がかかるから自分のアパートでしたいと思っている。一晩ぐらい自由のきくMの人、手紙下さい。

No. 29 富山

責め人

○私は三十四才の既婚者です。生後半

年の子供から始まって、三才、四才の子供がいます。子供が生まれる前は、よく妻とSMをしていましたが、子供が生まれてから出来なくなりました。狭いアパート生活なので、子供に見られると言って、妻がやりたがらなくなっただけです。普通のセックスでさえ、気にしながらの毎日に我慢できなくなりました。OL、人妻、学生、どなたでも結構です。私にSMをさせて下さい。好きなプレイは、緊縛、アヌス責め、ムチ打ち、ろうそく責めなど……それから、この事は妻にはまだ言っていないのでよろしくお願いします。

No. 30 山形

M・K

○五十三才でございますが、まだまだ若いつもりで男性でございます。一年ほど前、二才年下の家内にガンで先立たれてから、毎日寂しい思いをしています。家内とは生前よくSMプレイをして楽しみました。羞恥責めや、縛り、腸など、つい昨日のように覚えております。その家内がガンとわかってから一年ぐらい。先立たれてからまた一年、合計二年の間、SMプレイを

してないのでございます。そろそろSMの虫が騒ぎ出してまいりました。

家内に似たご婦人とぜひSMプレイをさせて下さいませ。家内はほっそりした体つきの、香山美子を少し年輩にしような感じでございました。ですから香山美子に似たご婦人、お待ちしております。年令は四〇才から五〇才くらいまで。SMプレイの経験はあられるほうがよろしいかと……。

No 31 埼玉

香山

○四〇才。会社役員。妻子ある中年男です。回りからの信頼は厚く、地位もあります。一応生活は満たされ、温かい家庭があつて、これで文句を言ったらぜいたくだと言われそうです。だがどうしても満たせない事があつて、とうとうこれに出しました。私は異常なほど女性のオシッコに興味があつて、一度でいいから、私の顔の上に股がつてオシッコしてもらいたいです。若い時から、日増しに大きくなってきて今さら妻には言えないし、毎日モンモンとした気持ちは消えません。どなたか、オシッコをかけたいたい女性はいませ

んか。一応希望として、二〇代の若い女性を望みます。それから重ねて言いますが、これは私とあなただけの秘密にしてください。

No 32 岐阜

オス犬

○二十五才の独身男性です。僕はまだSMの経験はありません。雑誌はよく見ているから、ある程度知っているけど、みんな頭の中だけ。だけど実際にやってみたくて仕方ありません。女の人を縛って、色々いたずらできたら、やっぱり面白いだろうな。僕は家の仕事を手伝っているから、普通の勤め人より自由がきます。ただ僕がこんな趣味もっているのを家族は知らないから、バレたら困るんです。たぶんバレる事ないと思うけど……。僕は童顔で年より若く見えます。それに体も小さいから、ジーパンにセータなんて恰好をしてると学生に間違えられます。こんな僕だけどSMの相手にしてください。条件は、独身の女の人はもちろんだけど、夫婦なら僕ぐらいの若いカップル。あんまり年上だと、始めてだらうまくとけ込めるかどうか自信がな

いです。お手紙待っています。

No 33 静岡

あきお

○二十八才。独身。Mの女性求む。当方自由業。昼間逢える人で年下可。○L、人妻、女子学生等々……。プレイ内容、緊縛、A責め、羞恥責め、腸写真撮影等々……。連絡待つ！

No 34 三重

仕掛人

○私は三十一才の妻帯者です。カメラ趣味十年の経歴で、自分で現像もできます。ぜひご夫婦のSMを撮らせてください。もちろん無料で私が全部現像して差し上げます。プレイに参加させてくれれば最高ですが、写真撮影だけでもけっこうです。また女性一人だけのプレイと撮影もけっこうです。思いつくようになるようなきれいなヌード写真も一緒に撮って、大きなパネルにしてあげましょう。私、身長一七七センチ、体重六十三キロ、長身のヤセ型タイプですが、筋肉質なのでタフです。顔はまあまあ普通並みで、少し眼がきついと人に言われますが、中身は少しも恐い人間ではありません。一度逢って確



かめてください。

No. 35 愛知

カメラマン

○当方三十七才の男性でございます。妻の承認を得ております。色々縛りを研究しまして、場所さえあれば、本格的なさかさ吊りなどをしたいと思い、一緒にプレイしてくださる、ご夫婦や恋人同志、また未亡人やOLなど、探しております。複数の女性の合同責めも考えており、二組以上のご夫婦を集めて、一緒にプレイできたらと望んでおります。友達にSM趣味のご夫婦をお持ちのご夫婦、誘い合ってぜひ一緒にどうぞ、お待ち致します。当方は私一人だけの単独参加になりますが、そのかわり労働行為は全部お任せ下さい。ただ、場所的に普通のマンションとかホテルでは、私のしたい縛りができませんので、丈夫なかもいのあるような家をお持ちか、ご存じの方々に限らせていただきます。

No. 36 梨

アブチスト

○まだ学生です。二〇才。スポーツマンのハンサムボーイ。SM経験はゼロ。

だが何でも見たい、やりたいの精神がSMに興味を持たせ、実行させる気になった。一人ぼっちでSMがしたいのにできない女性達よ、ご一報あれ。また夫婦で、刺激がほしいと思っていたら、僕を仲間に入れてほしい。覗き役でもプレイの助手役でも何でもするしもちろん奥さんの相手もさせてもらえたら最高だ。体力がなくて困っているんだなさんのかわりに、僕を使ってほしい。体力だけには自信があるから。好みの女性は、オッパイは大きい方がいいけど、あまり太ってなくて、ポッチャリした可愛い人。年令は三〇才ぐらいまでで、年上だったら、年より若く見える人がいい。僕は一八一センチ、六十九キロ、現在両親と同居中。よろしく！

No. 37 北海道

巨人

○六十六才の一般に老人と呼ばれる部類におります。が、人間好きなことは元気なもんで、若き頃よりSMに熟通して約四〇年。女房以外にも数多くの御婦人方を相手にしてまいりました。人の妻、学生さん、売子さん、夜の世

界のクロウトさん、様々でございます。若き頃は今よりもっと元気で、好奇心も旺盛でございましたので、本当にひまさえあればプレイばかりをしておりました。我ながら感心するほどでした。が、若き頃と較べれば衰えたというだけで、現在でもまだそこいらの紳士方には負けません。四〇年の知識と経験が加わって、必ず満足していただけるものと思っております。なお女房はもう遠慮させてもらうといつて現役から離れてしまいましたので、単独でございます。御夫婦共々、御婦人お一人、いずれでもかまいません。やせてしわだらけの老人ですが、ぜひとも御幸報を……。

No. 38 奈良

Y生

○当方四十九才のごく平凡な勤め人です。性格温厚、子供無し、妻はけっぺき症といいますが、少し病的なほどきれい好きで、夜の営みもいやがるほどなんです。再婚でまだ二年。前の妻とはうまくいかず和解離婚し、今の妻と見合いで結婚しました。今の妻は四〇才で私と結婚したんですが、まだ初婚

で見合いました時は、私を嬉しがらせた  
ものです。処女というから……。確か  
に処女で今時こんな女もいるのかと思  
いました。しかし、それはセックスが  
不潔という思いからで、今は夫婦だか  
らイヤイヤでもしています。私は反対  
にSMという妻に言わせれば変態とい  
う世界に興味があるから、当然、夫婦  
の営みがうまくいくはずなんかありま  
せん。どうか私の心情を察して、OL  
未亡人、女子学生の方々、お便りくだ  
さい。またご夫婦のアシスタントとし  
て、お仲間に入れてください。身長一  
五九センチ、体重五十五キロ、チビの  
デブッちょ。好みのプレイはA責め、  
腸、羞恥責め、連絡は必ず男性名で  
妻にわからないようにお願いします。

No 39 栃木

M・K

○現在、住み込みで働いているので、  
家族と離れて暮している。月に二、三  
回家に帰るが、それだけではどうして  
も欲求不満になる。ただの浮気相手な  
ら適当にすぐ見つかるが、そうもいか  
ない。そこでこの交際誌を知って掲載  
した。年令三十二才。身長一七一セン

チ、体重六〇キロ、SM歴二年。私位  
か、年下の女性を望む。仕事柄、昼間  
逢える人を！

No 40 佐賀

田村

○私は二十七才でまだ独身。身元確実  
の会社員です。身長一七五センチ、体  
重六十三キロ、めがねをかけていて、  
一見、学者風。十代後期にSMという  
ものを知り、今ではマニアになってい  
ます。女性の白くて柔かい肉体をいた  
ぶる事で、人間本来の本能が満足され  
ました。男はもともとサド、女はマゾ  
の本能があり、別に異常な行為ではな  
いのです。それが人によって大小で、  
大になると異常だ、などと言われるの  
です。私自身、それほど大だとは思  
いません。男の覗き好きが普通なように  
私のSMも、ちよつと毛ばはえたくら  
いです。マゾッ気の女性諸君、一度私  
に逢ってみませんか。そして気が合っ  
たら、ずっと交際してください。まだ  
結婚する相手もないんで、考えてみ  
てもいいです。尚、プロにしている人  
はお断わりします。誠実で可愛い河

合奈保子さんみたいなタイプの人を希  
望します。

No 41 和歌山

愛と誠

○三〇才の公務員です。私は非常にタ  
フで、健康なだけがとりえのあんまり  
パツとしない男ですが、よかったら、  
手紙をくださいませんか。タフだから  
きつとあなた様を満足してあげられる  
と信じています。体力だけがありあま  
って、毎日その解消に苦勞しているの  
で、縛られたあなた様が気を失うまで  
たっぷり責めてあげると約束できます。  
なお近辺の女性を……。

No 42 山口

キューピット

住所を知られたくない人へ  
文通相手に住所を知られたくな  
い場合は、当社「回送扱い」を利  
用して下さい。相手へ出す手紙の  
封筒へは住所を書かず鉛筆で、  
「回送」とのみ記入。当社名で回  
送します。



## 投 稿 規 定

### 〔体験・告白・日記など〕

S M・エネマ・フェチ・レズ、スワップ・トリプル・複数・アニメル・窃視・妊婦嗜好など、本誌にふさわしい異色なものをのぞみます。

創作ではなく、実際に経験、実行したことをありのままに、平易な文章でお書きください。

文章の上手下手は問いません。写真（モノクロ、カラー、ポラロイド）のある方はそえて下さい。

四百字原稿用紙2枚以上（長篇は連載）。

掲載分には規定の原稿料をお支払いします。

文章がニガ手な方は写真だけでも結構ですが、簡単な説明を書きそえて下さい。

### 〔創作・小説など〕

S M小説界に新風を吹き込む新人の登場を期待しています。

題材はS M、フェチなど情念的なもので、既成の作家のものとは異なる作品を歓迎します。

四百字詰原稿用紙で二〇―三〇枚以上です。

優秀な作品は本誌に掲載（長篇は連載）とし、規定の原稿料をお支払いします。

### 〔イラスト・カットなど〕

写実的なもの、幻想的なもの、あるいはイメージ画ふうのものなど

自由に描いて下さい。

なるべく白いケント紙か画用紙にエンピツ、ペン、筆で。

イラストの大きさは本誌2ページ大ぐらいまで、カットは葉書半分大ぐらいまで。

採用分には規定の原稿料をお支払いいたします。

### 〔文献・資料など〕

文献や資料を提供または譲って下さる方はご一報下さい。

※投稿作品（写真を含む）の返却を希望される方はその旨書きそえて下さい。

### 宛 先

〒104 東京都中央区銀座1の22の10

ストークビル501号

風俗資料保存会編集室

## 「読者通信欄」への投稿

1・400字以内で  
通信文を書く。

2・通信文の内容は  
“交際”にこだ  
わらず、本誌の  
感想、雑感、プ  
レイ報告など、  
なんでも結構で  
す。

3・投稿文の宛先は  
左記へ。  
長文の場合は右  
ページの投稿規  
定を参照して下  
さい。

宛 先

〒104 東京都中央区銀座1の22の10

ストークビル501号

風俗資料保存会編集室

※郵便料金に注意して下さい

## 「読者通信欄」掲載者への手紙の出し方

1 手紙を書く。

2 手紙を封筒①へ入れて封をする。  
住所、氏名を書いてもよい人は書く。

3 No、ニックネームを記入した回送シール  
と60円切手3枚をクリップでとめ、  
封筒①と一緒に少し大きめの  
封筒②へ入れて封をする。

封筒②のウラには正確な住所、氏名を記  
入して下さい。

4 封筒②の宛先は左記へ。  
※当事者間で生じたトラブルに対しては、当  
会は責任を負いかねます。

No. \_\_\_\_\_

様

S.57.3.31 まで有効

回送シール

No. \_\_\_\_\_

様

S.57.3.31 まで有効

回送シール

No. \_\_\_\_\_

様

S.57.3.31 まで有効

回送シール



## 編集室ノート

○編集者は創刊号より2号目のほうがテンテコ舞いの忙しさに追われる。創刊号は前もって余裕をみておけるが、2号目は途方もない早さで入稿や校正が追いかけてくるからだ。まして今月(2月)は実働二〇日前後しかない短い月であるから忙しさは倍加する。この「編集ノート」を書き終えて、香り高いシナモン入りの熱いダーズリン紅茶をすすり、タバコを一服と言いたいところだが、おそらく



ただひたすら眠るのが先になるだろう、もう3日も徹夜しているのだから(K編集長)  
○編集長はタバコをパカパカとふかし、旧奇ク誌の栄光を語ってはボクを叱咤激励して、働けッ、と怒鳴る。それにしても、編集長の吸うタバコが、百円の「わかば」で、ボクは二八〇円のケントなのだ(R)○ウチのオジイちゃんも「わかば」です。(M子)

### S Mモデル募集 年令。容姿不問

あなたのおひまな時に、モデルのアルバイトをしませんか。一時間につき一万円お支払いします。応募の秘密は厳重に守りますので、写真同封のうえ手紙で連絡して下さい。  
連絡先 東京都中央区銀座一の22の10、ストークビル501号 風俗資料保存会宛。

